
天使で悪魔

Sandalu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使で悪魔

【Zコード】

Z0641T

【作者名】

Sandaiu

【あらすじ】

幼馴染と訪れることになった花火大会。幼馴染はとくと好き放題して最終的には逸れてしまい僕は大慌てで探すハメに。幼馴染を探すためにあちこちと走りまわつてもうへとへと。そんな時に入った公園で一人の女の子と出会う。天使のような容姿に目を奪われてしまう。そして彼女との話の中で自分は天使だと言い出す。電波な人だったのか！　僕がそう思っているときに彼女は僕の右手を触る。その時に微かに光が・・・

僕と幼馴染と天使（前書き）

初めての投稿なのでおかしな表現や言動、他にも多々あると思いますがよろしくおねがいします。感想など貰えればとても嬉しいです。

僕と幼馴染と天使

雲の上の空で飛び交う一人の少女。

白い翼を生やした少女は、手から光の弾を作り出し放つ。その光の弾を軽くかわす少女は黒い羽を生やしていた。

「そんな攻撃当たらない」

淡々と言い放ち、黒い羽の少女は右手で黒く光る玉を作りだす。

「これでおわり」

黒い羽の少女が黒い弾を放つ。

「きゃあっ」

その弾は一瞬のうちに白い羽少女をとらえる。白い羽の少女はこの雲の上の空から落ちていった。

「うわっ、あついな」

窓を開けてあたたかすぎる風をあびながらつぶやく。

今は夏、七月の後半あたり。

「今日から夏休みか」

夏休みになつたからってやりたいこともないし、夏休みは大抵宿題をして友達と遊ぶ。毎年そうだ。

ブルルルル、ブルルルル

携帯に誰かからの着信。

画面を見て誰からの電話かを確認する。

「そう君、今日ひま？」

電話をかけてきた相手は、僕の幼なじみの一高野結衣へこうのゆいく。

幼稚園の頃からずっと一緒にやんちゃっ子とでも言えぱいのか、結衣にはいつも振り回されている。僕の事を弟として叱つてくれているらしいけど、僕からすれば妹みたいなものかな。ちなみに僕の名前は一神木奏吾へかみきそうごへ。

だから結衣は僕のことを昔からそう君と呼んでいた。

「僕は別に暇だけ」

「よかつた。今年も花火大会があるからいつしょに行こ」

結衣はうれしそうにしながら言った。

花火大会は、毎年夏休みの始めに川の近くで開かれている。

「やっぱり夏休みの始めはそう君といつしょに花火見に行かない

と」

「僕は遠慮しとくよ。友達といつてきたら?」

「何いつてるの! 每年いつしょに行ってるじやん」

「そุดけど、やっぱり僕はやめとく」

「なんで!? いつもはいつしょに行つてくれてたのに・・・」

結衣の声が段々涙声になつてくる。

「いいもん。一人で行くもん」

やばいかな、結衣が一人で行くなんて・・・

「ちよつと待つて! やっぱり僕も行くから」

心配すぎる。結衣の性格からして、何かやらかすことは田にみえている。

「から

「うん、浴衣着て待つてる。早く来てね」

それから別れを告げて電話を切つた。

「結局今年も行くことになつちゃつたな」

何も起こらないようにだけ祈つておく」といじょう。玄関で靴を履いていると、

「あら、奏ちゃん。今年も結衣ちゃんと花火? ラブラブね」「何いつてるの母さん!」

この人は僕の母さんで一神木奈々>かみきなな>。

「お母さん、今日からお父さんの所行つてくるから~」

「えつ!? 単身赴任先のアフリカに? 何でそんな急に。ご飯とかどうしたらいの!」

「冷蔵庫のものでも適当に食べておいてね」

「適当について。いつ帰つてくるつもりなの？」

「あれ、もしかして寂しいの？ 高校生にもなつても甘えん坊

さんなんだね」

「違うよ！ 普通に気になることじやないか！！」

「そんなに照れなくとも大丈夫だよ。奏ちゃんが電話くれたらすぐ帰るから」

「電話つて、携帯も持つてないくせに」

「それじゃあ行つてらっしゃーい。お母さんも支度してもう出ないと行けないし、それに結衣ちゃんも待つてるわよ」

「わかったよ。それじゃあ行つてきます。」

ほんとに勝手なんだから。そついえば母さんパスポート持つてたつけ？ 母さん海外行つたこと無いよな。母さんの事だから何とかすると思うけど。

こんなこと考えていろいろつむに着いた。しかも待ち合せの一十分も前に。

家が本当に近いな。

「はーい。ちょっと待つってね。」

インターホンを鳴らしてそう言われてからもう五十分も経つ。なんでこんなにまたされるの！？ ビックリだよ！…早く来てつて行つたの結衣なのに…。

「待たせてごめん。どう、似合つてる？」

息が一瞬止まった。

花柄の浴衣、腰まで伸びている長い紙を後ろで束ねてあり、少し化粧もして少し大人びた雰囲気さえも感じる。

いつも見慣れているはずなのに、浴衣を着たり、化粧をしたりするだけで、何だかいつもと違う雰囲気が漂つている。要するに、とてもかわいかつた。

「どうしたの？」

結衣の言葉で我にかえる。

「な、何でもないよ。はやく行こう」「少し赤くなつた顔を見せないために結衣の前を歩く。こんな顔、結衣には見せられない。

話も僕の方は相槌をうつ位で結衣が殆ど話をしていた。

「わーっ！ すごーい！」

花火会場に着くなり結衣がそう言った。

「なんだか去年よりすごくなつてない？ 人でいっぱい」

たしかに今年は倍の人数がいると思う。

「今年は花火以外に何かあつたつけ。そう君知ってる？」

「いや、僕も知らないよ」

「そう君も知らないのか。うーん、まつ、いつか。はぐれないようしないとね」

そう言つて行つてしまつ結衣。行つてしまつ？

「ちょっとまって、結衣！」

先に行つてしまつた結衣を追いかける。

それから結衣はあれこれとお祭りを楽しんでいるみたいだ。僕は
「ううと、楽しんではいるよ、うん。

「ねえねえ、りんごアメが食べたい」

「食べたいなら買つたら？」

「もうお金ないもん。だから買えない！」

そう言つている結衣の頭にはお面を付けていて、手にはゴムヨーヨー
ヨーやら、金魚、どんぐりアメ、そして結構高いわたあめの大きい
袋のやつまでぶら下げている。

どう見たつて使いすぎなのは一目瞭然。

「考えて使わないからだ。あきらめるしかないね」

僕がそう言うと結衣の目に段々涙がたまつていく。

しかも、その涙がたまつた目で僕を見てくる。

「わかつたよ。僕が買ってあげるから」

そういうと結衣は僕に笑顔を向ける。

女の子の涙は卑怯だ！

「へへっ。ありがと、そつ君。」

りんごアメを買ってもらつて無邪気にはしゃぐ結衣。
でもこの笑顔を見ると良かつたと思つ。

「はしゃぎすぎるとアメ落とすよ。落としても、もう買わないか
ら」

僕の財布も大分寂しくなつたし。

「わかつてるよ。落とす訳ないじゃない」

そういうた矢先、通行人とぶつかる。

「あつ」

りんごアメが手から落ちる。

「あ~~~~~つ！」

その声を聞いて僕は結衣の方を向く。

結衣はそれをすごい速さで拾つ。そして口のほうへ。

「いや、食べちゃだめだよ！？」

「そうくん。3秒ルールをしらないの？」

3秒ルールとか、子供か！

「ダメだよ。ほら、砂とかもすくついてるし」

アメだからか、ものすごい量の砂や何か汚い物が付いていた。

「それじゃあもう一つ買つて。りんごアメ食べたい」

結衣がそう言いながら迫つてくる。

「もう買わないって言つただろ。気をつけないからだよ」

「気をつけてたよ。ぶつかった人が悪いんだから。私は悪くない

！」

そんなえばりながら言つことじやないと思つけど。

「ほら、花火始まるからいくよ。今年は人も多いから早くしない
といい場所で觀れないよ。」

とりあえずはぐらかしどう。

「あつ、ちょっとまってよ！」

いつもの花火スポットまで向かう途中、結衣は落ち込んだようにな
見える。いつもと変わらず元気なままなんだけど。

なんだか胸のあたりがズキズキする。

「花火始まるみたいだよ。ちょうどいい場所が取れてよかつたね」川に着くと思ったとおりすごい人の数だ。

川の土手のポジションを運よく確保することができた。

「そうだね」

結衣と並んで座り、花火が始まるのを待つ。

結衣は元気がないまま。

ドーナン、ドーナン、ぱうぱら。

花火の打ち上げが始まり、多くの人は、花火があがり、はじける度に歓声があがる。

僕は結衣の方に目をやる。

「そう君、今年も花火すごいだね。去年よりもすごいかも」結衣の元気が空元気に見える。さっきのリンゴ飴、買ってあげてたらよかつたかな。なんで僕がこんな後ろめたい気持ちになるんだよ。結衣の呪いにでもかかつたみたいだ。

・・・苦しい。この空気は体に悪すぎる。

「結衣ちょっとまつてて。りんごアメ買つてくるから

結衣の顔が花が咲いたように笑顔になる。

「ほんとに!? ほんとにいいの！」

「いいよ。だからおとなしく花火みてまつててね

「うん。わかった！」

結衣の元気のいい返事を聞いて何だか嬉しくなつてくれる。僕も甘いな。妹を持つ兄の気持ちがわかつた気がする。

「うーん。また落としそうだし一つ買つとこうかな」

夜店の前で一人つぶやく。

りんごアメを二つ、手に持ちながら結衣が待っている土手へと向かう。

それにして人が多い。

「あれっ、結衣はどこだ？」

結衣がいるはずの場所に結衣がいない。

一瞬、場所を間違えたのかと思つたけど、毎年来ていねといひだ。
間違うはずがない。

卷之三

おどなしく待つてまで言つたのに

ため息を一息なかに吐いた

いんだけど。

「心配だ」

今までこんな事態に陥いつたことがなかつたから考へた事なかつたけど、こんなに人がいれば変な奴がいてもおかしくない。結衣は見た目がかわいいし、あの性格だ。りんごアメでつられてしまうかも。

一
結衣が危ない
はやく探さないと

汗を垂らしながら懸命に絹衣を探す

しかし今年はやけに人が多い、またたく見るかしない。

一
絆衣とこたよ
こんなし心配かけて

時間が経て、それで悪い想像が次々と浮かんでくる

いつの間にか、僕はがむしゃらに走って結衣を探した。

気がつくと川の近くにある公園に来ていた

花火の打ち上げが始まつていたせいか誰もいない。

在がるにこの公園に車が生い方一
花火を見る事で

結衣のことを考えすぎていて気がつかなかつた。

ふとおのゝことを思へ出す。

「・・・ケー・タイがあるじやないか」

気が動転しすぎていて携帯電話があることをすっかり忘れていた。

アドレス帳を開いて結衣に電話をかける。

「あー、そういえば、いまどき？」

一
は
々
々
二

安堵の息がもれる。

「……………」
「……………」

ていつたじやないか！…」

僕が息を荒くして言つ。

「だつて花火がキレイだつたんだもん」

普通は花火がキレイだつたからと言つてビニカにいつたりはしない。

大きなため息がでる。

「心配したんだから。今ビニにいるの？」

「え？ たこ焼き屋の前だけど」

「たこ焼きや？ お金ないんじゃなかつたの？」

「お金は大丈夫。さつきお母さんにあつてお小遣いもらつちゃつ

た
「え！ それじゃあ別に僕がりんごアメ買わなくてもよかつたん
じや・・・」

「それとこれとは別だよ。りんごアメはちゃんと買つてきてね」

なんだよそれ。勝手だな。

「わかつたから、結衣はさつきの場所にいてよね」

「わかってるよ。そうくんこそ場所間違えないでね。それじゃあ

電話が切れる。切られる。

あの、迷子になつたの結衣だよね？

疲れた。心も体も。

トボトボと俯きながら結衣がいる場所へと歩いて向かう。

突然気配を感じて顔をあげる。

そこには同じ年くらいの女の子が立つていた。

髪はつややかで腰の方まで伸びているおり、体つきは少し大人な

びた感じ、背は僕と同じくらいで白いワンピースを着ていた。

まるで神話に出てくる天使のよう見えた。

僕はつい見とれてしまつっていた。

「ぐ～つ

その音で我に返る。

彼女の目をよく見ると僕の右腕を見ていた。

いや、正確には僕が握っていたりんごアメを見ていた。

すぐ見つめている。

「えっと、よかつたら食べる？」

あまりにも見ていたので持っていたりんごアメをひとつ差し出す。

彼女は目を輝かせながら

「ほんとにいいんですか？」

と聞いてくるので僕は小さくうなづく。

「ありがとうございます！」 いただきま～す

ガリッ、ガリゴリガリ。

僕はそれをただ呆然と見ていた。

相当お腹が減っていたようで、固いアメを数分でりんごの芯も残さずきれいに食べきっていた。

「すこし固かったけど、甘くておいしかったです。ありがとうございます！」

彼女は笑顔で言つてくれた。

彼女の田はもつ一つのりんごアメを見つめて、僕の方をチラチラとみる。

「・・・もう一つ食べる？」

そんな田しばしに耐えられなくなつてつい言つてしまつた。

さらに笑顔になる彼女。

「それじゃあ・・・いただきま～す」

今度は遠慮の言葉もなく、僕が差し出したりんごアメにかぶりつく。

さつきよりもすこい勢いで食べ進める。

「これはなんて言う食べ物ですか？」

突然、彼女がそんな質問をしてくる。

「りんごアメっていうんだけど、知らないの？」

「はい！ りんごアメっていうんですか。とっても甘くて美味しいんですね。気に入っちゃいました。」

彼女の目は輝いている。

それにしてもりんごアメを知らないなんて珍しい。

僕はそんなことを考えながら、彼女が食べ終わるのを待つた。

「『うちそうさまでした。すいませんでした。二つもあつたという」とは誰かに上げる物だつたんではないですか？」

「気にしないでいいよ。そんなこと無いから」

実はそうなんだ。なんて言いづらいな。

「それより、君はなんでここにいるの？」

この公園は昼間でも人があまりいないのにこの時間帯だ。周りが草木おいしげる中、しかもこんな暗闇の中で女の子一人で来ところではない。

「ちょっと帰れなくなりまして・・・」

笑顔は消えて俯きかげんでそう言つた。

この周辺はこの町の人なら迷はずがないので

「どこから来たの？」

すると彼女は空を指差した。

僕は上を見上げた。そこには無数の星が散りばめられたきれいな空が広がつてた。

「・・・空から！？」

つい声が出てしまつた。

空からなんてあり得ない。

そうだ。飛行機に乗ってきたんだろう。

「空から落ちてきたんです。」

どうしよう。電波な人だつたなんて。

「あ～っ、信じてくれてませんね！」

僕の顔を見て彼女はそういう背を向けた。

白いワンピースをはだけさせて背中を僕に見せつけていた

「これで信じてくれましたか？」

どこに信じられる要素が存在するんだろつ。ただ、とてもキレイな背中があるだけじゃないか。

僕は彼女の背中をまじまじと見る。

「聞いているんですか？」

彼女がここを振り返った

鼻が生でるに暇がないものが垂れ下がり

「大丈夫ですか！？」

波又廿二年正月

僕は彼女の背を向ける。

心配そうに業の顔を覗く

胸元流してあるから。」

そろそろ耐えられない

「どうぞ着てください！」

「ノル・・・・」ハサフ~~~~~

しゃがみ込んで胸を抱えながら叫んだ

それが山領の事に關する事だらう。

彼女は顔を赤くしながらの声だった。

「えつと・・・」

まともに彼女を見る事ができない僕。

わが△たか△たんですか？ し じ△かり見てくたさい

行記一卷

「ほら。これでわかつて……あれつ？」

彼女は自分の背中を見ながら考えているようだ。

あ、そこでした。たかに帰れなかつたんでした。そこでした。

「勝手に納得してないで説明してほしんだナビ

「もういいです。証拠がありませんでした。」

いや、その証拠がなんだってたのか気になつ

なんだか話が噛み合わなくなつてきた。

「それは忘れてください。今日はありがとうございました。この恩はいつかお返します」

なんだかまとめに入っていないか？

「それでは！」

彼女は走つていつてしまう。

「りんごアメおいしかったで～す！」

彼女は最後に振り返りそう叫び行つてしまつた。

僕はそのまま立ち尽くしてしまつていた。

それから少ししてから結衣の元へと急いだ。

「ごめん。本当にごめん！」

僕は結衣に謝りたおす。

「来るのおそ過ぎだよ～。とっくに花火終わっちゃってるんだよ」

周りはほとんど人がいなくなつっていた。

僕があの電波な女の子といふ間に花火大会は終わつてしまつた。

正直全く気がつかなかつた。

そういうわけでさつきからずつと謝つてるんだけど。

「絶対に許さないもん。りんごアメあげちゃうじ。そう君なんか嫌いだよ」

嫌いとか言わると傷付くからやめて！

「それは仕方なかつたんだつて。さつきも説明したじゃないか。」

結衣になんて来るのが遅れたのか説明した時はふてくされた顔をしてるだけだつたけど、りんごアメをあげたことを話した所で結衣の機嫌が悪くなつてしまつた。

「もう屋台だつて無いんだよ？ もつりんごあめ買えないじゃない！」

りんごアメでどれだけ怒るんだよと思つたり、半分は結衣のせいじゃないかとも思つたりしたけど、結衣をこのままにはしておけない。後で何されるかわからないし。

なんとか結衣の機嫌を取り戻さないと。

「僕が悪かった。ほんとにごめん。いや、「めんなさい」… 何で
もするから許してもらえないかな?」
「…」

僕、ただだけ謝ってるんだろう。

「ほんとになんでもしてくれるので?」

僕のその言葉を待つていましたとばかりに聞いてくる。

「それじゃあ、明日の夏祭り一緒に行つてくれる?」

「えつ、いや、それは

さすがに夏休みに2回も振り回されたくない。

「なんでもつていつたじやん! それにお祭りでならうんジャメ
買えるし」

また僕に買えってことか!?

「そろは言つたけど、友達と約束してないつていつたじやないか!

結衣も約束してるんだろ?」

「大丈夫! いつしょに回ればいいんだよ

「いつしょに回ればばって…」

「それじゃあ決定! 連絡するね」

「ちよつとまつて! 勝手に進めないでよ

「残念。もうメール送っちゃった」

「送つちやつた ジゃないから! それにそっちの友達が良い
つていうかもわからないし

「いいくつて

「もう返信きたの! ? 速いよ! なんなの、打ち合せでもし
てたの! ?」

「打ち合せなんてしてないよ。仲がいいから以心伝心でもで
きたんじゃない?」

なんだ? あの含みのある笑顔。絶対打ち合せしてたな。

「いや、でも。ほり、ほくの方はまだ了解得ないわけだし

「それじゃあすぐにメールして! 電話でも可! ?」

「いや、だからむりだつ、うおつ

ポケットに入つていた携帯が鳴りだす。

「ちよつといめん」

僕は結衣に誤って携帯をポケットから取り出す。ディスプレイを確認する。

「だれから?」「

「亮介からだよ」

結衣にそう答えるながら電話にでた。

「もしもし、どうしたの?」「

「明日の夏祭りどうすんの? まだ何も決めてないじゃん。慎弥にも早く伝えにやならんし」

今電話で話しているのは同じクラスで友達の一田野 亮介^{トナリ リョウイチ}のりょうすけ^{リョウスケ}。

それと亮介が言っている人は一市ノ瀬 慎弥^{ワカタニ リョウイチ}のせ しんやくつていう。慎弥も同じクラスの友達だ。

「あつ、田野くん? 明日いつしょに夏祭り行かない?」「

いつの間にか結衣に携帯を奪われていた。

「ちよつといめん! なに勝手に話してるの!」「

結衣から携帯を取り替えそうとするけど結衣は僕の手をうまくかわす。

「ほんとに? うんわかった。それじゃあ明日ね。ばいばい」「

電話を切つてしまふ結衣。

「ちよつといめん! なに勝手に電話切つてるの!?」「

「いつしょでもいいって。これでいつしょにいけるね」「

僕は携帯を取り返して急いで亮介に電話をかける。

「亮介! さつきの話は無しでお願い!」「

「もう慎弥にも連絡しちまつたし、おまえだけ夏休みエンジョイするなんてずりーぞ。俺も結衣ちゃんと花火みてイチャイチャしたいわ!」

「イチャイチャなんてしてないから」

「うそつけ! 花火見ながら手とかつないじやつたりしていい感じになつてたんだろ! それぐらい俺位のレベルになれば感じとれ

「… るー！ だから今度は俺が結衣ちゃんといチャイチャしてやるわー！」

2

いや、レベルってなんだよ・・・もう手がつけられない。

「んじゃ、わかったから。結衣ちゃんによろしく伝つて」

「ちよつ、亮介！」

切れてしまつた携帯をただ見つめてしまつ。

「ほり早く帰るわ。遅くなつちやうめい」

結衣に右手を握られて引っ張られる。

「おれのことはなつた。紅衣だけでも手一杯なのは亮介せう

されるなんて、もう癪るのは間違えている

・・・・・樂しいんだにとね

「それで、その女の子がどうんな顔だったの？」

「ニシキヤ」

あのハプニングな場面が業の脳内を埋め尽くしてしまった。

「どうしたの？」

河かこの風景一だったのか!!?

何かに気が付いたのか!? 結衣にも亮介のいうレベルに到達しているともいうんだろうか。いやそんなことは、だけど、あんなこ

知られると僕の学校での立場が。

熱があるんじゃないかな！ もしかして和のせい？

僕の焦りはなくなりたがる

熱な人かないから

ほんとはナスチキなのが、

結衣の家に着いた

「私、そろへんの駄まで送るよ。やつぱり心配だし」

結衣がまたあの子の話題を出しそうだし、わざと逃げよう。

いいで
ナヌガたよ
どうか早くそこなはれしゃ
まだ

連続するたび

「もう、わかつたよ」。気をつけてねー！」

自転車があればすぐ家に着くんだけど、今日はしかたないか。

「それにしても、今日も結衣に振り回されつ放しだつたな。結衣とどこかに行くと必ず僕は疲れている気がする。本当に疲れた」といつもそうだ。

去年は今年みたいに迷子にはならなかつたけど、花火がうち上がつた時に興奮しすぎて僕の手をひっぱつて走り回されたり、一昨年なんか結衣が花火の見える方向に拳を振り上げた時に、僕の顔面に当たつて鼻血とまらなくなつたつけ。僕の服も血まみれになつて、そのまま家に帰つたら母さんビックリしてたつけ。誰にやられたの？ なんて、木刀持ち出すんだから。

「それにしても、今日の女の子は誰だつたんだろう。この近くで見た事無い顔だつたけど。よそから来たのかな」

ちょっと電波だつたし。

そういうえば迷つてるみたいだつたけど、無事に家にかえれたんだろうか。少し心配になつてきた。良く考えてみると、この町の人じやないという事は道がわからなかつたんじや・・・やつてしまつた。あんな所一人でいるなんて危険すぎる。

「自転車に乗つて行つたほうが速いかな」

僕は自転車に跨つて勢い良くペダルを漕ぎ始めた。

「はあはあ、どこに行つたんだろう。結構時間経つちゃてるし、この近くにはもういないのかな。早く見つけないと」

公園につくと自転車から降りて彼女の搜索を始める。

夜も深くなつて、周りから人の気配がなくなつている。

この時間帯で、ましてやこの町の事をわからない女の人が一人、危険要素が満載だ。とにかく彼女と出会つた場所にいつてみるしかない。

「やつぱりもういないか。走つて行つちゃつたしな。町をやみくもに探しても見つかるとは思えないけど探すしかないか。・・・なんだろ、あれ？」

草むらから何か出ている。

「あつ、痛つ。あれ？ぬけない」

聞き覚えのある声。

「ちょっと待って今助けるから動かないでじっとしててね。服が茂みに引っかかるてるみたいだから。これで、よし多少分抜けるよ」
むづくつと出でるのはやはり彼女だった。以外に簡単に見つかった。

「ありがとう」やこました！何度もお世話をになりっぱなしで申し訳ないです」

彼女は僕の方を向いて深々とおじぎをする。なんだか少しだけ照れる。

「全然いいよ。そんなことよつあんなどいりで何してたの？」

「実はですね・・・」

彼女が両手をこいつこいこ出ししてきた。

「これは、小鳥？怪我してるみたいだけど」

「そうなんです。あの木から落ちちゃったみたいで」

「さっきの茂みの近くの木？結構高いところから落ちたんだ。早くケガの治療をした方がよさそうだね」

「そ、そうですよね。けど普通の治療方とか良くならないんですけど・・・」

「普通？ 良くわからぬけど結構弱っているみたいだし、危ないかもしない。ちょっとケガの具合を診たいからその子貸してくれる？」

「あぶないんですか！？ おねがいします！ 何とか助けてあげてください！」

彼女は僕に小鳥を手渡す。軽く手が触れる。

「うんわかるから。あれっ？」

「どうしたんですか！ そんなにその子の怪我ひどいんですか！」

「いや、違うよ」

さつき彼女の手が光った気がするけど氣のせいかな？

「怪我はあんまりひどいモノじゃないみたいだけど、病院には連

れて行つたほうがいいかも・・・？」

なんだろう。彼女の雰囲気が変わつたような気がするんだけど。
なんというか彼女の後ろに白い羽が見えるよ'うな。

「羽！？」

「ど、どうしたんですか！？ 羽つて・・・あれ？ 力が、力が
戻つてます！」

「力つてなに！？ それより羽なんて、どうして？」

「それよりこれでその子を助けられます！ 早くその子をかして
下さい！」

「えっ、あっ、ちょっとど、って」

混乱してきた。この状況で言つ言葉が選択できない。

「早くしてください！ その子を早く治してあげないと」

「あっ、はい。ごめんなさい」

謝つてしまつた。

「もう大丈夫ですよ。すぐに治してあげますからね」
彼女はそう言つて小鳥を手で包み込むようにして持つた。その時
彼女の手が白く優しさを感じる光を放つた。

「これで大丈夫ですね。ほんとに良かつたです」

彼女は僕に満面の笑みを向けながら、包みこむようにして持つて
いた小鳥を僕に見せてくれる。

「なんで？ どうして？ どうやつて？ 手品？ それとも他の何か？ わからない、分かれない。理解できない、答えが僕の脳内には存在しない。どうやつたらこんなことが、小鳥が完全に完治しているなんて。

「あの、大丈夫ですか？ どこか悪いところでも？ でしたら今
の私に任せてください。何でも治してみせますよ」

「いや、なんでも治すつて。どうゆうこと？」

「君は一体何なの！？ どうしてこんな力が君にー？」

「それは私が天使だからですよ。最初にあつたとき言つたじやないですか。あつ、小鳥さんを巣に返してあげないと」

そう言つて彼女は自分の背中にある羽を広げて僕よりも高い場所に、いとも簡単に小鳥の巣までいってしまった。

いやいやいや、天使って普通にいってるよ・・・

やっぱり彼女は天使なのか？信じられない。本当にそんな曖昧な存在が現実に、しかも僕の目の前に現れるなんて。結衣なら喜んだだろうな。いや、そんなこと考えている場合じゃない！ 今のこの状況をどうしたらいいか考えないと。

「これでよしと。もう大丈夫ですよ。もう落ちたらダメですからね」

彼満面の笑みを小鳥に向けていた。

「ありがとうございました。いろいろとお世話に、とか心配ばかりかけてしまってごめんなさい。でも力も戻ったのでこれで帰れます」

小鳥を巣から返してから僕の方に飛んで戻ってきた。そして僕にもある笑顔を向けてくれる。

「あっ、いや全然いいよ。それより帰るって・・・」

「はい。空の上ですよ」

電波さんじやなかつたのか。というか天使とわかつた時点で気づいてはいたけど。

「そ、そつか。元に戻つてよかつたね」

「はい。それじゃあさっそく」

そういうて翼を大きく広げた。

ふわりと地から足が離れる。それと同時に薄く透けた羽を羽ばたかせる。

そして僕から段々と離れていく。

色々あつたけど帰れるみたいでよかつた。あれっ？

「あの！ なんだか羽透けてない？」

彼女に届くように大きな声で言つ。

「はい？ ほんとですね。でも跳べていいのですから。大丈夫ですよ」

そういつて彼女はもつと高く飛ぶためなのか、また大きく翼を羽ばたかせた。

でもなんだかみるみる羽が透けていいつているよつな・・・

「あれっ？なんだか背中軽く・・・ちゅう、うわ～～～～

「やつぱり落ちてくらゐね。つてそんなこと言ひたぬ場合じやない

い
!

「やせこむ。てかちよひ、壇すぞー。」

僕は彼女の落下地点であろうつ場所に駆け出す。

「ハラ、間近スルゾ！」

僕は彼女の落下地点であろうう場所にダイブする。

その時不覚にも目をつぶつてしまつたけど仕方ない。

鄂を摩り、剥きながら地面を滑れる。

手には何の感触もない。勝には

彼女をキャラできてね

それしやあ彼女

周辺を見渡す

たすけてください

木の方から声が

木の方に引かかてるみたいだ

大正二年九月

はい、たまごを貰うです！

ほんとに大丈夫でほつとする。でか、僕のスタイルインケは！？

「今助かるからじつとしてね！」

今田おーの木に縁があるみたハだ。

「ほら抜けた。大丈夫?」

なんか今田は大丈夫しかいつてないな。

「大丈夫ですよ。ありがとうございました。今日は何だかお礼を

言つてばかりですね

僕にまた満面の笑を向けてくれる。

「何かありましたら声をおかけください。出来る限り力になります。それでわ！」

走つていつてしまふ。

走つていつてしまふ？

僕の目的はなんだつたつけ？

「ちよつ、ちよつとまつて！　ちよつとまつてよーーー！」

僕は彼女を追いかけながら叫ぶ。

「はい？　なんでしょう」

何とか彼女に追いつくことができた。走るの早いよ。

「これからどうするのかと思つて。寝るところとか、食べ物とか」「どこでも寝られますし食べ物だつてなんとかなりますよーーー！」

何とかって、というかどこでも寝られると言つてこりつ」とは住むところもないということだけね。

ぐ〜〜〜

彼女の方から聞こえたのでそつと田舎をやると、顔を赤くしながらお腹を抑えていた。

「す、すいません。そろそろご飯探したいので、失礼してもいいですか？」

探さないといつて、まあ無理だらうな。仕方ないか。一二度出会ったのも何かの運命と思おつ。

「それじゃあ家に食べにくる？」『飯』

今日は幸いといつか、母さんもいないことだし。

「いいんですか！？私なんかがお呼ばれしちゃつて！お邪魔じやないですか？」

「いや、むしろ大歓迎だよーー一人で食べるより、一人で食べた方が美味しいって言つし」

「それでわ、よろしくお願ひしますーー！」

彼女は僕に向かつて深々と頭を下げながら言つた。

「うん。それじゃあ、かなり遅い時間だから一人乗りしてやつさ
といこりうか」

「はい！」

彼女を船頭して自転車のあるところへと向かい、僕は自転車へと
またがる。

彼女は僕の自転車の荷台に両足を同じ方向に出して座る。

「危ないからしつかり捕まつてね」

「あの、どこに捕まればいいのかわからぬのですか・・・」

「二人のりしたことないの？」

「二人乗りといふか、こいつた乗り物はなかつたもので、飛べ

ますし」

そういえば本物の天使だつたんだつけ。

「それじやあ、僕にでも捕まつて。落ちないようにな

「分かりました。しつかり捕まつてますね」

「つくひや！」

変な声を出してしまつた。いや胸あたつてるしー。これは注意する
べきなんだろうか。だけどこの幸福な時間を大事にしたいし、いや
でも僕の良心が・・・

「どうしたんですか？早く行きましょうよー」

「そ、そうだね。それでは、行きます」

そのままの状態で僕は自転車を漕ぎ始める。僕は悪い子です。

「そういえば名前、言つてなかつたつけ。僕は神木奏吾つて言つ
んだけど、君の名前は？」

「あつ、はい。私の名前はルリエル・キュール・シユトライレーゼ
です。みんなはルリつて呼んでいるので、奏吾さんもルリつて呼ん
でください

「うん、わかつた。それじゃあ、よろしくルリさん

「さん付けなんてしないでくださいよ、奏吾さん。気易くルリつ
て呼んでください」

「気安くって・・・」

「それじゃあ、ルリさんもさん付けしないでいいよ。」

「そんな分けにはいきません。命の恩人の名前を呼び捨てにすることなんて、とてもとても、私には出来ません。それとまたさん付けしますよ。気をつけてください」

なんだか折れそうもないし、諦めて僕だけ呼び捨てで呼ぶか。何だか恥ずかしい。結衣以外の女の子を呼び捨てしたことなんかないし。

「改めてようしぐ。ル、ル、ルリ」

恥ずかしすぎて今絶対顔赤い。そして呼びづらい。

「はい！よろしくお願ひします。奏吾わん」

家に着くまで數十分、彼女を呼び捨てにすることや、背中に当たる感触のせいで、まともに話すことができなかつた。

数分後、幸せな時間を味わいながら自分の家に着いた。

「着いたよ。」ヒロが僕の家

「すごいです！ 大きい家ですね」

ルリは自転車から降りてそう言つた。

「あつ」

「どうしたんですか？」

「な、なんでもないよ」

つい声にでちゃつた。背中が寂しい。

「それより早く中に入ろ！」

ポケットの中の鍵を取り出してドアを開ける。

「そうくん！ どこに行つてたの！ 心配で来てみたら帰つてしまいなかつたし、心配したんだよ！」

「結衣！？ なんで家の中に？？」

「そんなことよりも・・・って、その子は誰！？」

結衣の顔がものすごい事になつていて。こんな顔見るの久しぶりだな。

つて落ち着いてる場合じやない！ 結衣になんて説明したらいいんだ。天使とかいつても信用してくれないだろうし、どうしたら・・・

「えっと、彼女は」

「私はルリエル・キュール・シユトラーレーザと言こますー！」

突然挨拶を始めるルリ。

「ル、ルリエル？？」

「はい！ ルリと呼んでくださいー。奏吾さんの妹さんー！」

「い、妹？？」

結衣の体がフルブルと震えてる。

「いや、この子は妹じゃなくて」

「きやはははー！ 私がそうくんの妹？ ゼンゼン違うよ。私はそ

「うくんの幼なじみ。それに私はどちらかといつとお姉さんかな」

「いや、どちらかといつと妹だと思つんだけど」

「うくん、今、何かいつた？」

結衣の顔は笑つてゐるのに、なんだか殺氣を感じる。

「いや何も・・・それより自口紹介！ ほら、ルリはもつしたんだから、次は結衣の番だよ」

「うくんは呼び捨てで呼んでるんだ。そいつた関係なの？」

「何言つてるの！？ そんな訳ないだろ！」

「もう、声が大きいよ。冗談だつて。私は高野 結衣。うくんとは幼稚園からずつと一緒なんだ。よろしくね、ルリちゃん！」 笑いかけながらルリにいつた。

その笑顔からは、さつきの殺氣が混じつたものではなくて、僕が今まで観てきた中での最高の笑顔をしていた。

ほんと、嫌味がまつたく見られない笑顔なんだから。

「はい！ よろしくお願ひします。結衣さん！」

「結衣さんとかいいよー。なんか堅苦しいし。結衣つてよんでもしきくは結衣ちゃんで」

自分でちゃんと付け要求するな。

「それでは、よろしくお願ひします。結衣ちゃん！」

僕にはさん付けにならぬ。僕もちゃんと付けしてもりおうかな。

「それじゃあご飯にしようか。早速つくるから、リビングにでも行つてちよつとまつててね。結衣も食べていいく？」

「うくん！」

なんかこつちを見て笑つてゐる。

さつきの笑顔とちがつて何か怖い。

「な、なに？」

「私がご飯つくる！ だからうくんはルリちゃんと待つてて

なんだつて！？」

結衣がご飯を作る！？

あんなにおつちょいとはレベルが違いまする結衣が！？

「いやいやいやいやーー 遠慮しとくよー 結衣も疲れてるだろ?」

僕がつくるから

なんとか回避しなければ、結衣が料理なんてキッチンが爆発しない。そうでなくともポイズン料理が出てきかねない。

「そんなに遠慮しなくていいよー。そうくんも疲れてるじゃない」「全然だよ! すぐ元気ー 元気すぎるくらい元気! ! !

「そうなの?」

「うんうん! やーー だから料理はまくこまかせて」

「なら、私が料理作ってる間に部屋の掃除でもしたらいでっ」

「部屋?」

「うん。どこの部屋も、ものすげー散らかってるよー。」

「泥棒! ?」

「泥棒じゃなくて、はいこれ

そういうて結衣は僕に一枚の紙切れを渡す。

『 そりゃくそへ

部屋の片付けようじく(笑)』

「(笑) ってなんだよー 片付けくらいしていいってよ。」

「それじゃあ、料理つくつてくるねー」

- ・・・結衣がキッチンにこっちやつた。
- 手紙にツッコんでる場合じやなかつた。

「私は料理の方はあまり得意ではないので、部屋の掃除手伝いますね」

「あ、うん・・・ありがと」

「の後どんな物食べさせられるんだ。
もう腹をくくるしかない。」

「先にリビング片付けちゃうからリモーと一緒に来て」

「分かりました! リビングですね。必ずお役に立つて見せます

! !

「ルリはすごいやる気だね。そんなに掃除すきなの？」

「いいえ。ですが奏吾さんは恩を返さなくてはいけないので。」

「そんなに恩なんか感じ無くていいんだけどな。」

「あれっ？ 奏吾さん。全然綺麗じゃないですか」

僕達がリビングに入るとルリが言った。

確かにきれいだ。母さんが散らかして行つたんじゃなかつたけ？

「あつ、そうくん！ リビングは私が片付けといったから。」

「結衣が！？」

「なんでそんなにおどろくの？」

「い、いや、別に、おどろいてなんか」

びっくりした！！

ゆいが掃除できたなんて、整理整頓できたなんて。考えられない。もしかして結衣、嘘を付いてるんじゃないか？それがあんまり散らかしてなくて、簡単に片付けられたか。そうだ！ そうに決まってる！

「奏吾さん。どうしてにやけてるんですか？」

「にやけてなんかないよ。そんなことより結衣！ リビングも片付いてることだし、手伝うよ！」

これで変なものが食べさせられずに済むんだ。

「そういえば結衣。どうやって家の中に入つたの？」

幼なじみだからといつて合鍵を渡しているわけでもないし、玄関の鍵だって一度帰つてきたときにしつかり確認したのに。

「そうくんのお母さんに、そうくんのことよくしくつていつて鍵、渡されちゃつた。その時に『飯も作つてあげてつて』

か、母さん！ なんて余計なことを。助けになるどころか、逆に負担になつてるから！ それにいつ鍵渡すタイミングなんてあつたんだ？ 家を出るのが遅かつたみたいだ。今頃空港くらいかな。飛行機に乗り遅れなければいいけど。

「つてことで、私が作っちゃうね。材料も家から持つてきたから」

「なんだ。助かるよ。それじゃあ、僕も手伝うね」

結衣が安全にキッチンから生還できるのみで監視をしておかないと。

「ありがと。でも、一階の掃除はしなくていいの？」

「一階？」

「うん一階。すこことなつてゐるから。手、付けてないしすごいことと言つてもどうせすぐ終わるだろ。結衣がリビング綺麗に出来るくらこだし。

「わかった。一階をササッと片付けてくるから、そしたら料理、作るの手伝うからね」

「わかつたから、はやく片付けてきたほうがいいよ。ご飯できたら呼ぶね」

結衣のやつ、終わらないと思つているな。結衣が片付けられたんだ。僕にできないわけがない。ルリもいることだし。

「それじゃあ、いこつか

「はい！ 頑張りましょう！」

それじゃあ一階に上がつてつと

前言撤回。

なんだよ、この散らかり用。ドアといづドアが開いていて、そこから服やら靴下、かばんと、あらゆる物が飛び出している。そのせいで廊下は足の踏み場もない。

「すごいですね！ やつがいがあります！」

「はあ～っ。一体どうしたらこうなるんだ？」

とりあえず足の踏む場所を確保しないと。

「ルリ、廊下にある物拾つていこつか

「はい！ 廊下にある物ですね」

元気良く返事して、ルリは素早く服やら何やらを拾つて行く。僕もそれに続くよろに拾つていぐ。

「うわっ、僕の部屋まで散らかってるし。

だいたい拾い終え、今は部屋の中の確認をしているところで
「なんで僕の部屋が一番ちらかっているんだ？」

「ホントですね。他の部屋よりすゞいです」

一階の部屋の数は3つで、一つは僕の部屋、一つは親の部屋、それでもう一つは、物置みたいになつていてる部屋がある。

物置部屋は、鞄が少し出でいるくらいで散らかっているという感じではなかつたけれども、両親の寝室は服や靴下、下着なんかも出しつ放しになつていて、ベットのシーツやらも散乱している。そんな部屋よりも僕の部屋が一番散らかっている。

服などの散乱はもちろんのこと、机の上にあつたCDが落ちて踏まれて粉々になつていて、コンポの配線は誰かが引きちぎつたみたいに切れているし、ベットは横にして立てかけてあるし、椅子は倒れているし、棚がただの板になつていて、漫画や教科書は散乱してゐるし・・・

言ひ切れないくらいに散らかっている。とこりよつ、こじで一騒ぎあつたくらいになつていて。

「なんで僕の部屋だけ」

大切なCD達が・・・

なんだろう。目がしらがあついや。

「あの、私さつき拾つたお洋服たんじやいますね」

そういうてルリは僕の部屋を後にした。

今日中に終わりそうもない自分の部屋をやるよりも、先に両親の部屋でも片付けようかな。それに今日は片付ける気が起きない。とりあえず僕もその部屋を後にした。

「なんで終わらないんだ?」

どれくらいいたつたんだろう。

僕が両親の部屋を片付けて、ルリが服などを畳み終わつたくらいに結衣が僕達を呼びに来た。

「『』飯できたよ! 掃除も終わつたみたいだし、ちょいと良かつたね

「僕の部屋以外わね」

「へ、へへ。そくんの部屋そんなに散らかってるんだ」

「そうなんですよ。誰かが暴れたみたいになつているんです」

「そ、それはたいへんだね！あとで手伝うよ」

なんだか結衣が明らかに動搖している。

「結衣。僕の部屋で何かした？」

「な、なんにもしてないよ。そうくんの部屋にいたら、そうくんが見えたから急いで降りようとしたときに配線に引っかかるて机に当たつて、CDが落ちてきて踏んじゃつて、その後本棚に激突したなんて事全然なかつたんだから」

それで僕の部屋だけ散らかつてたのか。といふか、隠すの下手す
ぎ。バレバレだから。

「あれ？でもベッドが横になつてたのわ・・・」

「そ、それは多分そうくんのお母さんが、そうくんのむつてりい
かがわしい本でも探そうとしたんじゃないかな」

「結衣は僕の部屋でそんなことしてたのか！」

「ち、違うもん。私じゃないもん！ そうくんのお母さんだつて
いつてるじゃない！」

「なんで海外行こうとしている人が出発前に、息子のH口本の隠
し場所を探すんだよ」

「え、エロ本だなんて！ そうくんはやつぱりエッチな本たくさ
ん持つてるんだね！ 変態さんなんだね！！」

「エッチな本はもつてないし、変態なんかじゃないよ！ なんで
エッチな本持つてるだけで変態になるんだよーもしそうだとしたら
この世の男性の殆どは変態になるじゃないか！－」

「じゃあやつぱりエッチな本持つてるんだー 変態さんなんだ！－」

「だから違うって！」

いつたいなんでこんなこと言ひ合つているんだ？

「うそだよ。男の子なんだから一弾や二弾へりこ逆に持つてない
と変だよね」

いや、そう言われると何だか逆に恥ずかしい。

「あの～、すみません。ご飯が冷めないうちに食べにこきません

か？」

「あつ、『めんルリちゃん！ルリちゃんはお腹へつてるんだったよね。それじゃあ降りて食べよっか！』

そういうて何事もなかつたのよつに階段を降りていく結衣とルリ。

「なにしてるの？早くしないと冷めちゃうよ。そうくん！」

僕の部屋を荒らしたこと、怒るタイミングを逃した。怒つても仕方ないからいいけど。

「それにしても結衣の料理か」

「そうくん何か文句あるの！」

「え！いや、文句なんてこれっぽっちもないよ

「そうですよ、結衣ちゃん。女の子の手料理が食べられるというのに、文句なんか言うはずないじやないですか！」

「そうだよね。それに私が作ったんだし、文句なんかないはずだよね。というがあるわけないよね」

結衣の機嫌がよくなつたみたいだ

それにもしても結衣の料理か、どんな物が出てくるんだ？美味しくなくてもいいから普通で。そうでなくとも、せめて食べられる物でありますように。

そう願いながら料理が並んでるであろうリビングへ。

「うーん　いい匂いです。それにとつても美味しそうー。」

リビングに入るとルリが言った。

テーブルの上には結衣が作った料理が並べられている。

確かにいい匂いだし、見た目も想像してたものより断然いい。いや、美味しそうに見える。

「美味しそうじゃなくて美味しいんだからーふたりとも早くすつて！ルリちゃんはこっち」

椅子は4つあって、僕が座った正面には結衣、その隣にルリがそぞれ座つた。

「私、お腹すき過ぎてもう限界です」

実は僕も、さっきの片付けとかで結構お腹すいてるんだよな。

「それじゃあ、早速たべちゃおう！」ただま～す
「いただきます！」

そう言つて、結衣とルリは勢い良いく食べ始めた。

「んつ～～～」

ルリが田を大きくしてうめき声を上げた。

「ルリ！ 大丈夫！？ やっぱり何か変なものでも」

「なんですかこれ？！ とても美味しいじゃないですか！..」

「お、美味しい！？」

何だつて！？ 結衣の料理がおいしい？

「ふつふ～ん そうでしょそつでしょ。そつくんも早くたべてよ。

ほら、早く～～」

「ごつくん

とりあえず生睡を飲み込む。

ルリがあんなに美味しそうに食べてるんだ。大丈夫。きっとこれは美味しいんだ。そうに違いない。でもルリは天使なんだし、味覚だったり、僕達が食べれないような物も食べられるのかも知れない。でも結衣はたべれれてたな。ということはことは僕が食べても安全なのか？

「もうそつくん！ ほら

「ほ～」

「ほ～」

結衣は僕の口の中に唐揚げらしき物を無理やり突っ込んできた。

「どう？ 美味しい？」

なんだ？この味は。外はカリッとしていて中はジューシー。唐揚げなのにしつこくなく、何個でもいけそうな今までで食べたことの無い味。

「・・・美味しい

「でしょー！ 私、料理得意なんだ

他の料理にも手を伸ばす。

ヤバい。美味しいじゃないか！ 何なんだこの料理は。

「なんで結衣がこんなに料理できるんだ？」

「お母さんにみつちり鍛えてもらつたの。わたくしをいつか驚かせてあげようと思つて。頑張つたんだからね」

ものす」驚きましたよ。

あのドジばかりする結衣が料理や掃除ができるなんて。

「ルリちゃんって、そつくんとどうじつた関係なの？」

結衣が突然そんな」と言い出した。

「奏吾さんは私の命の恩人なんです！　ほんとに助かつたんですよ！」

「助けてもらつた？　そつくんに？？」

「うん、いや、どうじつた関係かといふと。ほら、りんごあめあげた子の話したじやないか。その子がルリなんだ」

「ルリちゃんが、私が食べられなかつたりんごあめたべちゃつたのー？」

「えつー？　あれ結衣ちゃんのだつたんですか？　すいません！　私が一つも食べたせいで、食べられなかつたなんて。本当にすいませんでしたー！」

ルリは椅子から立ち上がり頭を下げた。

「謝らなくていいよ。ルリちゃん！　あげたのはそつくんだし、ルリちゃんは一つも悪くないんだから。もし悪いとしたらそつくんが全部悪い！　そう、そつくんが全部悪いんだよ。だからそつくんは私の言う事一つくらい聞いてよね」

なんか僕に飛び火きたー。

「なんでそうなるんだよ。願い事つて一緒に夏祭り行くつていうのがもうあるじゃないか」

「違うー。またそれとは別のお願い。だつてルリちゃんに一つあげたんだよね？　りんごあめ」

「うん、そただけど・・・」

「とにかくことはだよ。りんごあめ一つで一つ。一つあげたんだから一つは聞いてもらわないと、数があわないじゃない」

「あわないじゃないって、ちょっとそれは違うんだじゃ」

「全然違わないよ！ そりゃくんは算数もできないの？ 2引く1は1になるんだよ？ といつことば1残ってるじゃない。そりだよね？」

？」

結衣は一コツした顔を僕に向ける。

「わ、わかったよ。それじゃあもう一つのお願いってなんなの？」

「今はいいよ。また今度お願ひするね」

「う、うん。わかったよ」

何要求されるんだろう。あんまり考えたくない。

「うんうん。素直でよろしい そついえればルリちゃんつてびこから来たの？」

やつぱりきたかーっ。当然その質問は本気で答えられない。空から来たなんて言つたら、僕が最初に思つた通り電波さんと思われてしまう。

それはどうしても阻止したい。

「えっとですね。私は」

ルリがしゃべりだす前に、

「ほら、あれだよ、あれ。」

「ん？ あれって？」

ルリの発言は防げたけど何にも思ひついてない。ハンドト手に親戚とか言つちゃうと後々めんどくさいことになりそうだし、だからといって、迷子の人を家にいれたなんて言つたらまた変態扱いされかねない。どうしたら。

「どうしたの？ そうくん。あれってなんなの？」

「あれっていうのは・・・」

「いうのは？」

「それは・・・」

「それは？」

「空のことですよ！」

「そうー空のことですよ。」

「ソラ？ そりつてあの雲とかある空の事？」

しまつた～～～！もたもたしてる間にルリが答えちゃった。しかもそれに賛同してしまつた！どう言い訳したらいいんだ！？

「はい。私、天使なんです。だから正確にいって、その空じゃ無いんですけど。そのもつと上にあるところの事になるんですが、それ以上ややこしくしてくれ、ルリ！」

フォローする言葉が全然見つからない。

「あの、結衣。違うんだよ。これはちょっと」

「すごーい！空からきたなんて。一体何しに来たの？どうやって来たの？空の世界はどうなってるの？空の上ってことは宇宙に住んでるの？あとあと」

なんか信じちゃってるよ！よくこんなつづつ話みたいなこと信じれるな。僕なんか実際に天使の力見るまで信じられなかつたし。というか、見ても信じられなかつたのに。

「そんなに一変に聞かれても困ります！一つずつお願ひします」「そうだよね。ちょっと興奮しちゃった！だって本物の天使に見えるなんて夢みたい！私、小さい頃から天使に会いたかったの。もう嬉しそう！そくんありがと。ルリちゃんと会わせてくくれて！…なんて笑顔するんだ。悪い気が全くしない。

「うん。よかつたね」

なんだかわからないけど、信じてもらえてよかつた。

「ルリちゃん！ それじゃあまず一つ目。なんで空から地上に降りてきたの

「そういうえば僕も聞いてなかつたな。どうしてなの？」

「えつとですね。それはちょっと恥ずかしい話なんですが、あんまり笑わないでくださいね」

「うん。そんなに笑わない

ちょっととは笑うんだ。

「えつとですね。私、ジャジちゃんとしたんですよ
「ジャジちゃん？」

「はい。私の友達のジャジちゃんです。それでジャジちゃんが鬼

で私はジャジちゃんの攻撃をうまく避けていたんですけど

「えつ？ 攻撃つて何！？ 鬼じつこなんだよね？」

「そうですよ。鬼じつこといえば、鬼が攻撃してくるのを避けては逃げる。そういう競技じゃないですか」

「競技なの！？」

「？ 攻守を分けて決着が着くまで戦かつ競技じゃないですか。空の世界では今、もっともブームな競技なんですよ。」うちでは無いんですか？」

「そんなの無い！」

なんて危なつかしい競技なんだ。地上の鬼じつとはえらい違いがあるみたいだ。

「ないんですか。残念です。秦吾さん達ともやりたかったんですけど」

そんな危ない競技、普通はしたがらないよ。

「私、やつてみたい！」

・・・普通はね。

「いや、やつてみたいじゃないから」

「いいじやん、いいじやん。とつても面白やつだし。やつてみたい！」

！

「やつてみたいって、ルールもいまいちわかんないし

「教えてもらえばいいじやんか。ね、ルリちゃん！」

「はい！私でよければ」

「そんなのいいに決まってるよ。ルリちゃんしか分かる人いないしね。」

「それでは、えつとですね」

「いや、話が逸れてるから！ルールなんて後でもいいんじゃないかな？」

「良くない。今聞きたいの！」

「簡単なルールなんで、説明なんてすぐ終わりますよ？」

「わかつたよ」

ルリがこっちに来た理由を早く知りたいの！」

「まず、鬼をどちらがやるかを決めます」

「じゃんけんとかでもいいの？」

何でもいいじゃん。

「決め方は自由ですよ。ちなみに私達はじゃんけんで決めましたけど」

その情報は別にいらないから。

「それで決まった鬼は、相手を、天力などを使って攻撃をします」

「天力？」

「はい。私達の力の事です」

「あの小鳥を助けた時の力のこと？」

「そうですね。力の種類は少し違いますが」

力の種類ってなんだ？

「それでそれで。どうしたらいいの？」

結衣が話を急かす。

「それでですね。相手を撃ち落としたほうが勝ちです」

「撃ち落とす！？」

「はい。撃ち落とします」

「すごく危険な遊びじゃないか！」

「遊びじゃありません！ 競技です」

そんなのどっちだつていい！ 競技でも危険なことには変わりないから！

「それでルリちゃん負けて落ちてきたんだね！」

「恥ずかしながら

「いや、恥ずかしながらとかじゃないよ！ 怪我とかしなかったの！」

「なんとか力を使ってうまく着地ができたので、無傷です」

「それはよかつたよ。もしルリちゃんが怪我なんてしてたら、とつても大変なことになつてたから」

「いや、ほんとに良かつた」

心から思つ。

「二人とも心配してくれてありがとうございます！」

ルリは席をたつて深々とお辞儀しながらお礼を言つた。

いちいち立たなくとも。

「そしたらルリちゃん、天使つていっぱい地上に落ちてきてるの？」

結衣がルリにそんなことを言つた。

確かに僕もそう思う。競技になつてゐるくらいだから普通に一般人にも人気がありそうだし、必ず一日は誰かがやつていそうだし。

「そんなことは無いですよ。私の場合は特別なんです。私がいた空の世界は特別な力が働いていて、その力で下には、地上には落ちないようになつてゐるんです。だから、普通は地上に落ちる前にその力で防いでくれるのです」

「特別な力って、さつき言つてた天使の力のこと？」

ルリの世界は僕の知らないことが多すぎる。

「天使の力とは違います。正確には天使の力を使つてゐるんですけど」

「ルリちゃん！ そうくん！ もういいじゃない。そんな話、ぜんつゝぜんわかんないよ。はい、だからこの話はおしまい」

「おしまいとか、僕はもつと聞きたいことが」

「なら後で聞いて！ 私が面白くないじゃない？ 暇になるじゃない？ 楽しくないじゃない？ そしたら、寂しいじゃない！ だ・か・ら、終わりなの」

「そんな強引な・・・」

「ごめんなさい！ こんな美味しい料理をつくつてくれた結衣ちゃんに寂しい思いにさせてたなんて。今はもうこの話はいたしません」

「いや、それはちょっと困るんだけど」

「そうくん！ わかつてるよね」

まだ聞きたいことがたくさんあるんだけど、また結衣の機嫌が悪くなつても困るしな。

「わかったよ。この話はおしまい」

「うん さすがそうくんは物分かりがいいね」

物分りって・・・結衣の機嫌を保つのも大変だ。

「それじゃあルリちゃん、ルリちゃんのいた所の話を教えて」「いやいやいや、さつきの話しさは終わりって結衣は言ったんじゃないかな！」

「違うよ。私が言ったのは難しい話は終わりって言ったの。そうくんはルリちゃんのこと知りたくないの？私はもつともつとルリちゃんの事知りたい。友達の事は何でも知りたいじゃない！」

さつきから僕は知りたがっているのに、邪魔してるのは結衣じゃないか。

ルリの方に目をやると呆けた顔をしている。

「友達・・・ですか？」

「そうだよ！ 私達はもう友達に決まってるじゃない！」

「決まってるんですか？」

「そうだよ、決まってる！ 私達はあつたその時からもう友達。それはもう決まってたことなの。そうだよね？ そうくん

「そうだね」

全く、結衣はいつもこうだよな。「友達に決まっている」結衣はこれで誰とでも友達になるんだよな。この言葉は何だか知らないけどそんな気にさせる。友達であることが決まっていたと思わせられる。洗脳されているみたいな言い方だけど、それとは全く違う。運命を感じるみたいな感じなのかな。言い表しにくい。要するに全く悪い感じがしないってことなのかな。

「私、とっても嬉しいです！ 私も何だか結衣ちゃんと奏吾さんは友達になることが決まってたみたいに思えてきました」

ルリは笑顔を僕と結衣に向けてくれた。その笑顔は、さつきまでの笑顔とは違つてとても柔らかく、温かみのある物に思えた。

「それじゃあ、ルリちゃん！ ルリちゃんの事もっと知りたいからこいつぱい教えてね。私たちの事もしつかり教えてあげるから。心

配しなくていいよ」

「はい！ お互いを知ることはどうでも大事ですもんね。と、友達の事は」

ルリは少しうつむきながら言った。その頬は少し赤に染まっている。

「さつきはルリちゃんの話を聞いたから、今度は私の事を、で、其の次はそろくんね。それからルリちゃんの話を聞くからね」

「ね じゃなくて、今はルリの事少しでも知りたいんだけど、今後の為にも」

「別に時間はまだあるんだ新しいじゃない。それにルリちゃんも私たちのこと知りたいだらうしね」

結衣はニヤけた顔をしてルリに視線を向ける。

「そうですね。私も二人のこと知りたいです！私、一人のこと名前くらいしか知りませんし・・・」

「ほら、そろくん。ルリちゃんだけ私たちのこと知りたいんだよ。だから私たちのこと話そう。いいよね？」

「いいよねといふか・・・」

「いうか？」

なんて目で見てくるんだ。そんなキラキラした目で見られると、「わかったよ。結衣の言うとおり時間もあることだし、僕達の事も話そう。僕もルリに自分の事を知つてもらいたいし」

それに地上の常識も話しておきたいし。さつきからルリの話を聞く限り、空とは常識が少し違うみたいだし。

「うん それじゃあ私の事から、もう一度自己紹介から始めるね。私の名前は高野 結衣。ぴちぴちの高校二年生です」

ぴちぴちとか自分でいいうな。

「それでそろくんとは幼なじみなの。えっとね、幼稚園の頃からずっと一緒に、小学校、中学校、高校とずっと一緒にクラスなの。すごいでしょ」

「すごいですね。私も幼なじみがいますけど、そんなずっと一緒に

のクラスなんてなかつたですよ！」

「ルリちゃんも幼なじみがいるんだ！どんな人なの？」

人の質問を遮るな！

「ルリのことはあとで聞くんじゃなかつたの」「いいの。聞きたい時に聞くのがいいの。こうこうのはノリが大事なの」

いや、ノリとか、さつきと全然話が違うし。

「えつとですね、私は幼なじみが二人いて、一人はさつき話をしたジヤジちゃんと、もう一人はオル力ちゃんです。一人とは小学校の頃からずっと一緒に遊んでる仲なんです」

「ジヤジちゃんとオル力ちゃんか。一人も幼馴染みいるなんてすごいね！」

「はい！でも最近オル力ちゃんが一緒に遊んでくれないんです。私なんかしたのでしょうか」

「ルリちゃんがなんかする訳ないじゃない。気にすること無いよ」「そういうてもらえると嬉しいです」

なんか人生相談みたいなことになつてる。たいして良いアドバイスになつてないけど。

「結衣。とりあえずルリのことは置いといて、自分のことを話したら？学校の事とか、友達のこととか」

「しかたないな。ルリちゃん。そうくんが私のこと知りたいみたいだから、私のこと話してもいい？」

「僕は結衣のこと知ってるよね！？それにさつきから結衣の話をしているんじゃなかつたんだつけ！？」

「それは仕方ないです。私も結衣ちゃんのこと知りたいから話して下さい」「いや、だから」「えつとね」

僕の話を聞いてよ！
ピロリロリン

「あつ、『ごめん。私の携帯。お母さんからだ。もしもし、お母さん、どうしたの？』えつ、うん。そうだけど。うん、大丈夫だから、そうくんいるし。迷惑なんかかけてないよ。でも、うん。わかつたよ。わかつたってば。うん。それじゃあね」

「どうしたの？おばちゃんから？」

「うん。そうくんに迷惑が掛かるからもう帰つてきなさいって。

私迷惑なんかかけてないよね？」

さすが結衣のお母さん。娘の事は良くわかつていなさる。

「わかつたから、結局帰るの？」

「うん。怒られちゃうしね。ルリちゃん『ごめんね。私の話あまりできなくて。明日またくるからその時いつぱい話そ

「はい！また明日お願ひします」

「それじゃあ、僕が送るよ。もう時間も遅いし」

「いいつて。私よりルリちゃんを一人にしておくほうが危ないよ

？」

「私の事は心配しなくても大丈夫ですよ。私だつて留守番くらいできます。子供では無いですから」

子供とかの問題じやないんだけどな。結衣の言つ通りルリの事は心配だ。一人にしておくことはできない。

「ルリちゃん。私も一人で帰れないような子供じや無いんだよ。家も近いことだし、こっちの世界に慣れてないルリちゃんを一人にするほうがよっぽど危ないよ」

「・・・でも」

「そうくんはいいよね？」

「わかつた。だったら僕の自転車使つて帰りなよ。子供じやないし、家が近いと言つても結衣は女の子なんだから。それでルリも安心出来るだろ？」

「わかつた。そうさせてもうつね。もう一・どれだけ私のこと心配してくれるの、ルリちゃんは。とくとくても嬉しいじやない！…ルリの納得していくくて心配そうな顔をみて結衣が言つた。

その言語を聞いたルリの顔は照れくさそうな笑顔に変わっていた。

「それじゃあ結衣。また明日」

玄関をでて自転車にまたがる結衣に別れの挨拶をする。

「本当に気を付けてくださいね」

「わかつてゐるつて。ルリちゃんも大変そうだけど頑張つてね」

「はい。奏吾さんもいるので私は大丈夫です」

「だよね～。だけどそくん以外と頼りないから気をつけてね」

結衣は田を細めてこっちを見る。

「なんだよ、その田は。それじゃあね」

「はいはい。それじゃあね。ルリちゃんもまた明日」

「はい！ それでは気をつけてください」

結衣はペダルに足をかけて勢い良くこいでいった。

結衣の姿はすぐに見えなくなつたけど、その間ルリはずつと結衣を心配そうな田で見守つていた。

なんだ!? この気まずい雰囲気は。

結衣を見送つてからリビングに戻つてテープブルに着いた僕とルリ。さつきまで賑やかな結衣がいたので会話には全く困らなかつたけど、いきなり一人になると話すことが何も浮かばないぞ。ルリに聞きたいことはある程度聞いたし、結衣がいないときにあんまり聞いてしまうと、明日結衣がスネるだろうじ。何を話題にして切りだしていけばいいんだろう?

「これってテレビですか?」

「ん? そうだよ。そっちの世界にもテレビつてあったの?」

「テレビはあります。番組も結構あつて退屈しないです。こっちの世界ではどんな物があるのか見てみたいですね」

「そうなんだ。それじゃあ付けるよ」

僕はテレビの電源を付けた。

そこでは料理番組が映しだされた。

「とっても美味しそうです」

テレビに田をやりながらコダレを垂らす。

それにしてもテレビに食いつきすぎじゃないか？

「ルリは食いしん坊なんだね」

「それは否定しませんが、こっちの料理はどれも魅力的で美味しいなんですよ。食べたくなるのは当然です！」

ルリの顔は笑顔になっていた。その笑顔をみた僕は、自然と緊張が解けていた。

「あつ、そうだ。お風呂びうする？」

「どうするって、一緒にに入るかつて事ですか？」

「違うから！ そんなやましいことなんかこれつポツチも思つてないから！ 僕が聞きたかったのは今入るかどうかってこと」

「そうだつたんですか。私はてつきりいつしょに入るのがこっちでは常識かと思って」

「常識じやないから！ そんなエッチな常識はないから！…」

「うちの常識しらないにもほどがあるつて程度じやない！？ 勘違いすら通りこしてゐる。

僕の言葉に反応してか、ルリの顔が一気に赤く染まる。

「別に私がエッチなのはなくてですね。エットですね、それよりお風呂ですよね！ 私が先にお呼ばれしてもよろしいでしょうか！

！…！」

「わかった、わかったから…」

恥ずかしがりすぎて声にちからが入りすぎだから。「近所迷惑だから。明日苦情とか言われなきやいいけどな。

「お風呂はリビングをでたところの左の廊下をまっすぐ行つたところにあるから。タオルは置いてあるの使つていいよ。着替えは後で持つていく」

「わ、分かりました。でわ、行つてきます！」

そう言つてルリは勢い良く出て行つた。

「ふ～つ。これからどうしよう」

何日かは家に置いてあげることは出来るだろつけど、母さんが帰つてきたらなんて説明したらいいんだ？ さすがに母さんだつて身も

知らない女の子を家に上がらせるだけでなく、何日かは泊まることになるのだから。何を言われるのか。言われるだけならまだいいけど。

「まつ、母さんが帰ってくるまで何日かはあるんだ。ゆっくり考えよう。それよりもルリの着替えを早く持つていかないと」

お風呂上がりのルリと鉢合せなんてことにはなりたくないからね。一度ルリの胸を不可抗力とはいえ観てしまったのだから、これ以上そんなハプニングが起こると変態のレッテルをはられかねない。着替えはとりあえず母さんの服でいいとして、下着は今日着ていたヤツで我慢してもららうしか無いかな。明日くらいに結衣にでも頼んで買つてきてもらおうか。

2階に上がって一番でかいサイズのパジャマを取り出してルリが入っているお風呂場へと向かう。

家のお風呂は少し広めの脱衣所があって、そこには洗濯機が置いてあり洗面台もある。なので、ルリがお風呂場にいる限り決して覗きにはならないといつこと。安全に着替えを待つていけるといつことだ。

脱衣所に続く扉をノックする。シャワーの音は聞こえるけど用心に越したことは無い。

「返答なしつと」

風呂場にいるとこのノックは大抵聞こえない。これで安心して中に入れる。第一試練突破といった所かな。

ドアノブをひねって中に入る。

「なつ！？」

脱衣所には丁寧にたたまれた服と下着が綺麗に別れて置いてあつた。

なんなんだこれわ！？ 僕さつき着替え持つて行くつて言つたよね！ こういう時つて普通下着は隠すよね！ 僕は試されてるの！？

とりあえず落ち着いつ。ここで慌ててしまつては駄目だ。変態のレッテルをはられるのは「めんだ。これから顔を合わせづらくなる。

「ここは冷静に判断しろ、僕！脱いだ服は洗濯したほうがいいから洗濯機の中へ入れよう。

とりあえず服を洗濯機の中へ入れる。

次は下着。変えが無いからこれはそのまま。触つたのがバレれば

とりあえず、予想外の出来事だつたけど第一試練突破！

このまま、あとは着替えを持って来たことをルリに告げて置いて
いけば任務完了。これが最終試練だ！今までの試練の中で一番ハ
ードルの低い試練、ここで失敗する余地はない。

「しかし、」ここで考へるべし」とはルリにとハサヒで知らせるかと言ふ事。「ノックで知らせん」か、最初から「声をかけて知らせん」の一択。ノックは突然の音にびっくりさせてしまつかも知れないし、不審者が来たかも知れないといつ恐怖心を与えてしまつといつ危険を犯さなければならぬ。といふことは答えは一つ。「声をかけて知らせる」だ。これなら多少はびっくりさせてしまつといつ危険は伴うけど、誰が来たかは分かる。いつの世界に慣れてないルリの事だから怪しいやつが来たのと勘違いさせてしまつたら申し訳ない。「・・・でもちょっと緊張するな」

「僕が息を大きく吸い込んだと同時にシャワーの音が止まる。」
「ルリ！」

ガチャリ
扉が開く。

「はい！なんで・・・わや~~~~~」

「いだつ！」

おもいツきり顔面を殴られた。いたい！それにまた赤い物が垂れ

あつて・・・何だか視界が薄れて
てしるよ二な これは殴られたから垂れでしるに違しない！そ二で

「謝る前に・・・服を着よう」

そこで僕の意識はどこかへ行ってしまった。

弁解することもできずに。

僕が気がつくとそこはまだ脱衣所のようだ。

一瞬意識を失っていたみたいだ。

そういえばなんで意識なんか失っているんだつたっけ？

「あつ！」

自分がやつてしまつたことを思い出して勢い良く起き上がる。

「奏吾さん！大丈夫ですか？『めんなさい私のせい』
ルリは僕が持つてきた服に着替えていた。というより、服を羽織
つていたというのが正しいのかな？ボタン止まつてないよ。

「奏吾さん！また鼻血が出ます！」

それは君のせいです。

「大丈夫。あの、こっちこわさつきは『めん。覗くとかそんな変
な気持ちはないで』

「はい。奏吾さんが覗きなんかしないのは分かっています。脱衣
所の外から声をかけているのかと思つてお風呂から出てきてしまつ
たのは私ですから」

それでドアを開けたのか。でもなんだか不可抗力だと思つてくれ
ているみたいだし、良かつたのかな？でもこのままじゃあ接しづら
くなつてしまふ。なんとかしないと。

「それじゃアリビングの方に戻ろうか。それとルリの服は洗濯機
の中に入つてるから。後で洗濯しておくれ」

「はい。よろしくお願ひします」

「あと、ボタンは閉めよね」

「えつ？はい。すいません！」

会話がつながつた。これでなんとか沈黙といつ最悪の結果はまぬ
がれたよ。

一人でリビングへ移動。ルリはさっきのことがなかつたかのよう
に僕に接してくれた。やっぱリルリはいい子だな。またテレビを付

けるとルリは食い入る様に見ていたので次は僕がお風呂に入ることにした。

「今日は一日いろいろあつたな」

結衣に振り回されたり、ルリに動搖させられたり、正直疲れた。僕がお風呂から上がるとルリはうとうとしていた。

「ルリ。もう寝ようか」「体がビックとなるルリ。

「一緒にですか？」

「違うって……！」

このやりとり今日で二回目だから！その流れはもういいよ……

「ルリは母さんのベットで寝なよ。客間で寝るよりそのほうがずっと寝やすいだろ？」「

「……はい」

つぶやく用に返事をする。ルリにも今日は大変な一日だったろうし相当疲れてるだろう。

ルリを立たせて一階まで連れて行く。

「大丈夫？ ほら、しつかり立つて」

「……ふあい」

そろそろ限界のようだ

両親の部屋に入つて母さんのベットまでルリを連れて行った。

「今日はここで寝てね」

「……」

黙だ。もう返答が無い。

「ほらベットに入つて」

ルリはもそもそとベットに入つていった。すぐにルリのスヤスヤ

という寝息が聞こえた。

「ふあ～～～つ。僕も眠い。明日に備えて寝よう」

明日は今日より大変な一日になるような気がするし。

僕は自分の部屋のベットにもぐりこんで熟睡を決め込んだ。つもりだった。

ギシギシギシ

階段から誰かが上がりてくる足音が聞こえる。

なんだ!? その足音はルリが眠っている部屋の前で止まる。ドアが開く音がしてその足音が消える。

部屋に入ったのか!? 泥棒? やばいぞ。ルリに向かあつたひびつするんだ、僕。

どんどんじん

走つて誰かがこっちにやつてくる。

もしかしてルリ? 僕に助けを求めてきたのか?

ベットから出でルリの元に向かおうとしていた足が止まる。ぱんっ!!

勢い良くドアが開く。

「奏ちゃん! この子誰なの? 可愛いじゃない! ! !

「へっ? 「

そこには僕の母さん 神木奈々が立っていた。ルリを抱えて。

「ルリ!!

「ふえい?

寝ぼけてる! ?

一体どうなつてゐるんだ? 父さんに会いに海外にいつてゐるはずの母さんがどうしてここにいるんだ? なんで? どうして?

眠氣やら、体の疲れやらで僕の頭の中は何も考えられなくなつていた。

といつても考へたくない。

今日はもう寝かせて!!

「それで、なんでも母さんが家にいるの。今頃飛行機の中のはずなの!」

今はリビングで母さんと一人。ルリは起きていられる状況じゃなかつたのでまた母さんのベット! 。

「えっとね、それが・・・飛行機乗り遅れちゃった。テヘッ やっぱり乗り遅れてる! それより

「テヘッ。じゃないから！ 可愛くいってもダメだから！ だからつて首を傾げても可愛くないから！」

「可愛くなじってひどいじゃなし。奏ちゃんはお母さんが不細工だとでも言つの？ それともブサイクなお母さんが好みだつていうの！？」

「ブサイクな母さんが好みなんて誰もいってないだり！」

そりや可愛いほうがいいけど

「・・・じゃなくて！ 父さんとは連絡どうたの？ 父さんさりと心配してゐるよ」

「大丈夫。お父さんには元々連絡してなかつたし。テヘッ」

「テヘッつて、だから可愛くないから！ 何回使つても可愛くならないから！ 歳を考えてよ。もういくつになつたと思つてるの！？」

「いくつって。女人に歳を聞くの？ 奏ちゃんも男の子なんだかうわういうところ気を付けないと。女の子にもてないぞ」

「もてないそつて・・・今はそんな話をしてるんじゃなくて。父さんによつてないつてどうこう」と――？」

「お父さんをびっくりさせようつて思つて。だつてその方がおもしろいんだから」

「だからつて。・・・僕さつきから何々つてしか言えてない！？ ふざけてないでまともに話をしない！？」

「お母さんはさつきからずっと真剣に話をしているじゃない。だから・ら、あの子は誰なのつて聞いてるの」

母さんの笑顔が

「えつ？えつと、そんな話をしているんじゃなくて」

「そんな話？ 私がいない間に若い女の子を家に入れて、そなればりか私のベットまで使わせえ挙げているなんて。それが、そんな話なの？」

「・・・」めんなさい。勝手に女の子を連れ込んで

「はい、分かりました。許します！」

「単純！？ そんな簡単に許してもらつていいの！？」

「ん？ 許してほしくないの？ それとも、もつと怒りたいの？ 奏ちゃんMなの？」

「違うから！ Mじゃ無いから、勘違いしないで！ だつて理由も聞いてないのに許す何て、どうしてって思ったから」

「どうしてって、奏ちゃんのことだから何か分けがあるのは分かっているし、そんな奏ちゃんの易しさを叱ることなんてできない。でも訳は聞かせてね」

そういうつて母さんは笑顔でいつてくれた。

母さんにこんなに信頼されているなんて、何だか照れくさい。

「うん。訳は話すよ。ちょっと長くなるんだけど」

僕は母さんに今日あつた事を話す。

「長くなるんならいいや。今日はもう疲れたし」

ハズだつたんだけどな。

「でも今話しをしておいたほうが僕はいいんだけど何があつたか纖細に話もできるし。

「でも、あの子も一緒にいた方がよさそうだしね」

それもそうか

「それじゃあ明日、朝食の時にも話すよ」

「そうして。あつ！ でもあの子の名前だけでも教えてくれる？」

「うん。彼女はルリエル・キュール・シコトレーゼって、僕達はルリって呼んでる」

「わかった。ルリちゃんね。それじゃあ私は寝るから。電気消し」といてね

「ねるつて、母さんのベットはルリが使っているんだし、父さんのベットでネルの？」

「ルリって、呼び捨てにしている仲なの？ 一人は

「ち、違うつて！ そんなんじゃなくて

顔が暑い。火が出そうだ。

「はいはい。それも明日聞くから

あぐびをしながらリビングを出て行く母さん。

「もう、勝手なことばかりいつて。結局僕がいつたことスルーして行くし」

ほんとに調子がいいんだから。それにしても、僕もそろそろ限界。

「・・・寝よ」

僕はリビングの電気を消して自分の部屋へと向かった。

途中、母さんとルリが寝ている部屋の扉が空いていたのでちらりと目をやると、一緒にベッドに一人して寝ていた。

とっても寝にくそうだ。

僕は部屋に戻つてベットに潜り込む。今日あつたことを考えながら

そして、僕はいつの間にか深い眠りについていた。

迷子と3人で（前書き）

書いてたら長くなってしまった（焦

「ん~。ふつ」

ベットから起きて大きく伸びをす。時間は午前6時。

「4時間くらい寝れたかな」

そんあことをつぶやきながら窓を開けて部屋の換気をする。

今日も晴れ。これで昨日洗濯した服を乾かせられる。

「そうだ。朝食の支度を始めないと。母さん朝から結構食べるしな。それに

ルリだっている。今あまり信じられないけど、女の子が寝ている部屋に勝手に入つて確認するなんてできないし。ほんとにつたんだよね?

僕はルリと母さんが寝ている部屋を通つて階段を降り、キッチンがあるリビングへと向かつ。

「あれ? 何だかい匂いがする」

母さんがもう起きてきたのかな? ついえは昨日空いていたドアも閉まつていたし。

「それならもつと寝てもよかつたかな」

そんなことを考えながらうとうとした頭でリビングへと入る。

「そうくん! おはようーーー!」

「ずわつ!」

「ずわつてなに? わくわく。朝の挨拶はおはようございますだよ?」

驚いた。結衣がいることもだけ、結衣の声にすぐ驚いた。

「結衣が大きい声出すからだ。だから変な声が出たりやつただけだよ!」

「そうくん。朝の挨拶は元気よく。一日の始まりの挨拶に元気がないこと、その日一日元気のない日になつちやつなんだよ。わかつたら

そうくんも元気よく挨拶。はーい、おはよう「や」ります！…」

元気いい挨拶と声の大きさはあまり関係ないと僕は思うけど。

「・・・おはよう「や」ります！」

「うん… よろしく」

結衣は満足したような笑顔を僕に振りまいてキッキンの方へと入った。

「結衣が朝食つくりてくれているの？」

「そうだよ。さつき部屋を覗いたら皆寝てたみたいだつたし。それにそうくんの事は奈々さんから頼まれていたしね」

本人はもう帰ってきてるけど。

「そつか。でも何だか悪いね。結衣には昨日もつくりもらひたし」

「そんなことないよ。私も自分が作った料理を美味しく食べてもらえて、とっても嬉しいんだから。気にしないでね。それより顔、洗つてきたら？」

「うん。そうさせてもらうね」

僕はリビングを出て洗面所兼脱衣所に向かった。

昨日はここでルリに蹴飛ばされたんだつけ。

そんなことを考えながらわざとと用事を済ます。

「結衣。僕も何か手伝つよ」

リビングに戻つて結衣に申し出る。結衣ばかりに任せつづりつていうのも悪いし。

「ありがと。でも、もうできちやつてるから大丈夫だよ
テーブルを見るともう豪華な朝食が並んでいた。

「それじゃあ私はおばさん達をおこしてくるね」

結衣はエプロンを外してリビングを出て行く。

「あつ、そうくん」

結衣がドアを開けたところで止まる。

「なに？」

「つまみ食いなんてしたらダメなんだからね。皆でいただきます

して一緒に食べるんだから

「子供じゃないし、そんなことしないよ」

「だよね」

結衣は僕に笑顔をみせてからリビングを出て行つた。

「それにしても美味しそうだな」

昨日食べたのも僕の予想を見事に打ち砕いてくれた味だったし。食べたい。

「ごくつ

生つばを飲み込む。

「でも、結衣とは約束したし。つまみ食いなんて・・・」

くつ、まさか結衣の料理にこんな中毒性があるなんて。目の前にあつたら耐えられない。

「なら田をそらせばいいだけじゃないか

テーブルとは反対の方向を向いたらいだけ。

「の筈なのに。匂いが・・・」

我慢出来ない。我慢ができない。

でも、確かに結衣はつまみ食いはダメって言つてたけど、味見をしてはいけないとは言つてなかつたよね？それにこれは本当に美味しい出来ているのか確認しないといけないんじやないかな？ルリや母さんにも美味しいものを食べてもらいたいし。それに結衣がもし味付けに失敗していることに気づいてなかつたら？それで僕達と一緒に食べているときにそれに気づいたら？結衣は大恥をかくかも知れない。僕は全然気にしないし誰も気にしないと思うけど、変に気を使つて訳にもいかないし。こんなに朝早くから来てくれた結衣に申し訳ない。だからこれはつまみ食いとは言わない。そう、これは味名！

「ということで、いただきま～す！」

テーブルの上に並んであつたソーセージをつまんで口の方まで持つていく。

「バンッ！」

「うわっと」

僕はソーセージを落としそうになりながらも音がした方へ、つま
リリビングのドアに恐る恐る眼をやる。

「そうくん。今、いただきますって聞こえたんだけど」

「え？ なんのこと？」

何とかとぼける。

「じゃあ、その手に持っているソーセージはなんの……」

「いや、これは味見を」

「もう…やうくんは朝御飯抜き。反省しなさい…」

「そんな・・・」

「朝からどうしたんですか？ 嘔吐はいけない」となんですよ
ルリが厭そうな顔をしながら、その後ろから母さんリビングに
入ってきた。

「嘔吐じゃないわよ。やうくんが悪事をしたから叱つていただけ。
ほら、早く座つて！ せつかくの料理が冷めちゃうよ」

「そうだったんですね。奏吾さん、悪をなんとして結衣ちゃんを
困らせちゃ駄目です。ご飯食べさせてもらひえなくなつちやこますよ
もうなつちやこました・・・

「はい、みんな席についたね。それじゃあ皆で食べよつー・やうく
んも食べていいよ」

「え？ いいのー？」

「反省してくるみたいだし、それに皆で食べたほうが美味しいし
ね」

良かつた。もうちょっとドドーの美味しいものを食べ損なう所
だつたよ。

「そうですね。昨日も皆で食べてとても楽しかったですし。それ
にまた結衣ちゃんの手料理を食べられるなんて、こんなに幸せなこ
となんてありません！」

「ルリちゃんもわかつてゐるじゃないー… やうくんもルリちゃんを

見習つてよね」

「はいはい」

「・・・あの～」

「どうしたの？ルリ」

「まだ奏吾さんのお母さんが寝ているんですが、いいんですね？」

「それなら大丈夫だよー。もうちょっとしたら覚醒するから

「覚醒？ですか」

ルリは首を傾げる。

「あと十秒」

「あつ！ 九」

結衣が反応する。

「どうしたんですか二人共！？」

「カウントダウンだよ～。ハ！」

「七」

僕もカウントする。

「六！ほらルリちゃんも」

「は、はい！五」

「四、三、二、一、」

ルリと結衣が声をあわせてカウントする。

「「零」」

三人の声が重なる。

「おっはよ～～～～～！」

母さんが元気良くな挨拶をする。

「おはよう、母さん」

「おはよう！」れこます、奈々さん！」

僕と結衣は挨拶を返す。

ルリは呆気に取られた顔をしている。

「ルリちゃんもおはよう！」

挨拶を返さなかつたルリにむづ一度言ひ。

「お、おはようございます！」

「どうしたの？ そんな変な顔なんかしちゃって

「ビックリしたんですよー！まさかカウントダウンが終わるとお母

さんが起きるなんて

「またカウントダウンなんかしてたの～」

「まあ、何回見てもおもしろいし」

「そうだよ！だって起にしてから五分鐘ちょっとで覚醒するなんて、そんな人奈々さん以外に見たことないんだから」

結衣は「コニコ」としている。

「ふふ～、私の特技といつたところかしら」

「特技と呼べるような事でもないとと思うんだけど」

「それじゃあ奈々さんも起きたことだし、冷めない内にたべちゃおう！」

「そうだね～。せっかく結衣ちゃんが作ってくれたみたいだしね」

「これ、結衣が作ったってなんてわかったの？」

「ん～？匂いかな」

「匂い？ そんなので分かるの…？」

「わかるよ～。それがお母さんと並ぶものです」

全国のお母さんにそんな能力はない。

「それじゃあ、いただきます」

母さんが先人を切り、それに続いて僕達が続く。

「美味しい　さすが結衣ちゃん。奏ちゃんの事任せで正解だったみたい」

「そうだよ、奈々さん！ 私がいれば何の問題もないんだから！」

誇らしげに胸を叩く。

「ルリちゃんどうしたの？ さっきからずっと黙つているけど」

黙々と「飯を食べていたルリに話しかける。

確かに、昨日よりも口数が少ない気がする。

「えっと、ですね」

困惑しているようだ。

「そういえば母さんの事、何にも話してなかつたつけ」

「そうなの…？ そういう事は早くに言いなさい。私の名前は神

木　奈々って言うの。覚えてくれたかな？」

「は、はい！バツチリと脳に焼き付けられたもうこました。奈々
ちゃん！」

「うん、よろしく」

「あつ、せつかく自己紹介したんだし、ルリの事を詳しく述べ
おかないと」

僕は昨日あつたことを要約して説明をした。

「それならルリちゃんは空の世界から来たってこと？」

「そういう事。信じるのは難しいとは思うけど信じて欲しいんだ」「信じるも何も・・・そうだ！ルリちゃん。住むところが無いん

だつたよね？」

「はい。そうなんです」

その声には元気がない。

「それなら、ここに住みなさい」

「それはいいんじゃないかな！これでルリちゃんは安心してこの

ちの世界で生活できるじゃない！」

「僕もそれがいいと思うけど、ルリはどうなの？」

みんなの視線がルリに集まる。

「あのできれば、よろしくおねがいしますー」「

ルリの顔が赤く染まっている。

「はい、よろしくおねがいします」

「ルリ、よろしく」

「ルリちゃんよろしくね」

「結衣は関係ないんじゃ」

「関係ないことないよ？私、今日からここに住むし」

「え・・・えーーーっ！」

「奏ちゃん。そんなに驚いてどうしたの？」

「どうしたのって、結衣が住むなんて聞いてない！」「

「ん~。私も聞いてないよ？」

「聞いてないの！？ 結衣こればどうこう事？」

「今言つたじゃない。ね、奈々ちゃん」

「うん、そうだね～」

「そうだね～って言つて居る場合じゃないから…そんなのでいいのー?」

「悪くわなこと思つよ～。だつて結衣ちゃんがいれば安心だし」「安心? 何のこと言つてゐの?」

「だつて～。私またお父さんの所に行かなくけやいけないし

「また行くのー? ルリも住むことになつたんだし、できれば家

にして欲ほしいんだけど…」

「だから結衣ちゃんがいれば安心でしょ?」

「結衣の前に母さんがいてくれた方が安心なんだけれど」

「そうくん! 私じゃ不満だつていうの?」

やめて! その目はものすごく怖いから。

「不満とかじやなくて、子供だけじや心もとないと思わないの? とりあえず思つてもないことを言つてみる。

結衣と一緒に住むことが亮介にばれたらい、ややこっこ!

「何言つてるの? 今までも留守番なんて何回もあつたじゃない。

今更そんなこと言つたって、説得力が無いよ
おつしゃるとおりです。

「奏吾さん! 私も一生懸命頑張るので、安心して下をこ

留守番をじう頑張るの?

「それじゃあ、お母さん、明日行くから」

「明日! ? セめて一週間はいてくれても」

「なんで? 本当は昨日行つて居るはずだつたんだから問題ない
と思つたけど

「・・・・・」

もう流れは変えられないか。

「わかつたよ。それなら母さんと父さんの部屋を一人につかって
もううかる。いいよね?」

「オッケーだよ～」

母さんの返事はいつもあることな。

「ルリちゃん一緒に寝ようね

「はい！夜が楽しみですね」

ハハ、修学旅行かい！

「それでは今日の予定を発表します！！」

母さんが突然立ち上がりて言った。

「発表って、今日はどこかに出かけるの？」

「奏ちゃんは鋭いね～。正解で～す。今日はデパートに買い物に行きま～す」

「やつたー！私欲しい服があつたんだ」

「デパートに何しにいくの？」

「決まってるじゃない。ルリちゃんの服を買いに行くの。私の服や奏ちゃんの服をずっと着ててもううわけにはいかないでしょ～」

「そんなの悪いですよ。私は今まで十分です」

「そう？でもこのままいくと着る服がなくなっちゃうよ。私も服は持つていかないといけないし～。裸で過ごすの～？」

「そ、それは・・・困ります」

「それじゃあ、「」飯食べたら出発します。わっさと食べて準備してね」

「はーい！」

結衣の元気の良い返事。

「はい・・・」

ルリの申し訳なさそうな返事。

「はいはい」

「奏ちゃん！そんな返事じゃ連れて行つてあげないぞ～

「僕は別にいいんだけど・・・」

「そうくん。何か言つた？一緒に行くよね

「ハハつ・・・」

この三人で行かせるのは心配だから付いていくけど。

それから他愛もない話をしながら朝食を食べ終えた。

「それでわみなさん。」ちそうさまでした

「『うちやつさま…』！」

結衣の元気なご馳走様。

「『ご馳走様でした』」

ルリの落ち着いたご馳走様。

「美味しかったよ結衣。ご馳走様」

僕も結衣にお礼を言つてからご馳走様を言つ。

昨日と同じで結衣の料理は絶品。今日はこの美味しい朝食を食べただけで幸せ。

今日も頑張るつゝて気持ちになるな。

「そんな、そろそろにちがつてもうべると作つたかいがあるよ

」
結衣は嬉しそうな顔を僕に向けながら言つた。

「それじゃあ三十分後にはいくよ。わざと用意を済ませてね～」

「はーい！」

ルリと結衣が元気良く返事をする。

「ルリちゃんは私と一緒に部屋に来て。結衣ちゃんは一回家に帰る？」

「もういろいろ持つてきてるから大丈夫！」

▽サインをしながら言つ。

それであんなに大きな鞄が置いてあつたのか。

「うん、よろしく。それじゃあ着替えよっか。」

僕も早く着替えてしまおう。

それぞれ部屋に入つて着替えを始める。

結衣は着替える必要なくない？

それから僕は着替えてリビングで待つこと五十分。

「用意が遅い！三十分にここを出るんじゃなかつたつけ？一体いつまで待てばいいんだよ

僕の関わる女人は何でこんなにマイペースなんだ？

僕はテレビを見ながら三人が支度が出来るのを待つ。

「奏ちゃん！用意できたよ~

三人がリビングに入つてくる。

「「「めんね～」。ルリちゃんのお洋服を選んでたら遅くなつたやつた」

「いや、別にいいんだけど……ルリに何したの？」

僕は飛び込んで来た不思議な光景を目にしていた。

「何したつて、お化粧したに決まつてるじゃん。私と奈々さんの共作なんだ！かわいいでしょ？」

「目がパンダじゃないか！」

ルリの目の周りには黒々とした物が塗つてあつた。

「パンダじゃないよ～。今の流行りなんだつて。そりだよね結衣ちゃん」

「そうそう　これが今風のお化粧なんだよ」

「いやいや～　どう見ても塗りたくり過ぎだから～　それはおかしいからね～？」

「おかしくないよ～。秦ちゃんはお化粧つてものを知らないからそんなことが言えるんだよ～」

「知らないも何も、似合つてないから～　ルリには不釣合いな化粧だよ～！　化粧しないほうが絶対可愛いって」

「そんな、可愛いだなんて。嬉しいです～～～」

ルリは顔を赤らめる。

「もう、せつかくお化粧したのに。どうある～　ルリちゃん？」

「・・・お化粧はやめておきます」

「残念、私もおそれこのお化粧しそうと思つてたのに～」

「・・・パンダが増えなくてよかつた。」

「それじゃあ、さっさと落とそう～　早く出かけたいしね」
いや、時間をかけたのは結衣じゃないか。

それからルリは化粧をおとしにいって、みんなで出かける。

「今日は車でいくからね～」
家には軽自動車が一台ある。

「私は助手席」

結衣が助手席に乗り込む。

「それじゃあ、僕達は後ろに乗るうつか

僕はそう言って、後部座席があるドアを開ける。

ルリは荷台のある方のドアを開ける。

「いや、後ろってそこじゃないからね？」

冷静に突っ込む。ルリのこれは天然なのか？

「すいません。車……ですか？ 初めてなので」

「どうか。天然なんじゃなくて無知なのか。無知というのは少し言い過ぎなのかも知れないけど。なんせこここの世界は初めてなんだから。仕方ないのか。」

「気にしないで。こっちに乗つてね」

僕は奥に詰めてルリが座れるスペースを作る。

ゴン

「・・・・痛いです・・・・」

痛そうな音だった。どうやら天然なのはあたつてるのかな。

「大丈夫！？」

結衣が心配して声を掛ける。

「すごい音がしたね～」

母さんは感想を述べる。

心配もしてあげて。

「ルリ、大丈夫？」

僕も心配の声を掛ける。

「大丈夫です・・・少し痛いですけど」

なにか涙を流してるみたいだけ。ルリは我慢しきれない。

「じゃあ、そのドアを閉めてくれる？」

「はい！」

そう言ってルリがドアをおもいっきり閉める。

その勢いは凄まじかつたようで、ドアが壊れるかと思つくらいの音がした。

「びっくりした！！」

結衣が思わず感想を漏らす。

「すごい音がしたね～」

母さんはそれしか言えないの？

ルリが放心状態になつてゐる。ビックリしすぎー。

「・・・ルリ、大丈夫？」

「だ、大丈夫です・・・」

「それじゃあ、出発します」

「はーい！」

結衣の元気の良い声。

僕もルリもだんまりだ。

なんて空氣なんだ。僕としてはゆうくりできていいいんだけど。
車は母さんの運転で出発。実というと母さんは運転は得意なほう
で、僕も以外だつたんだけど大型の免許も持つてゐるらしい。見せ
てもらつたこと無いけど。というより、実は母さんが運転する車に
乗るのは今日がはじめてだつたりする。

「そういうええ、これからどこに行くの？」

何となくさつきから思つていていた疑問を口にする。

「この近くで服とかを揃えようとと思うとあそこしかないでしょ～」

「そうだよ、そうくん！ 双葉デパートしかないでしょ～！」

「双葉デパートって、確かにやら何まで揃つテパートだつたつ
け」

「その通り！」の近くで一番早くに流行のファッショソを取り
入れてゐるあの双葉デパートだよ～。」

結衣がすごく興奮してゐる。そいつええは結衣つて服好きだつたつ
け。

「ルリちゃんには可愛い服、買つてあげるからね～」

「ありがとうございます！」

少しこわばつていたルリの顔が緩む。

そんなに痛かつたんだろうか。

「良かつたね！ 私も選んであげるから」

「結衣ちゃんの分も買ってあげるからね~」

「ほんとにー？奈々さんありがとー！大好きだよー！」

「私も大好きだよ」

二人してにやける。

なんで服一つでこんなにテンションが上がるんだ?

どうしたの？ 奏ちゃん。心配しなくても服、買ってあげるよ

{ }

「そんな」と思つてないからー。」

つい声を張り上げてしまつた。

「ルリ、そんなに震えて怯えないで！別にルリを脅かそうとしたつナゾやないから

「にじめなしから」

今までヒヤケリしたのか ハリは小刻みに震えている
「何笑つてるの? ルリちゃん」

「えっ！？ 美つてたの？」

「はい・・・すいません。みなさんを見てこの辺で楽しめないでし

まつて

ルリは申し訳なさそうな顔をしながら言つ。

「謝る」じゃないよー。樂しい気持ちになる事は悪いことじゃ無

いんだから。ね、そうくん

「樂しき」とせこゝだ。結衣のまつとねつ髪のじや無こゝだ。

楽しいことはみんなで共有するのが普通なんだが

15

母さんは真後ろの後部座席に座ってしる川の方を向きながら言つた。

「はい

ルリは顔を赤らめながら言った。

「織田の前、井戸の二つ……」

詫が歯を噛つ下げる。

前編

魔道書院

卷之三

僕の声

卷之三

ルリの声

- 151 -

西の風

そばにいて母のことはおやいだり、口一升を呑む

「道、聞違つていたみたいね」

母さんは笑って言う。

「そういう問題じゃないからね！？」

「そりゃ、

結衣と僕は母さんに文句をいう。ルリはとうとう

- 1 -

放心状態は噂しているよ二だ
口をホカンと開けていて白目を向
いている。

ト ラウマなんかにならなきゃいいけど……

「はい到着です」

あのアリカラマジックトからも何度も危ない運転を繰り返して今に至る。皆ぐつたりとしている。

僕もぐつたりだよ。

「奈々さん……私ちよーど氣持ち懸けて

二人の顔がげつそりとしている。

「ちょっと休憩してから買い物に行こう。一人も気分が悪いみた

一
九

な
」

「あれのど」が安全!? 危険しか存在していないかたよ!」「そう? 安全だったとあもうんだけどな」

いつもはどれだけ危険な運転してるんだ！？

「はーい。それじゃあ降りてね」

パーキングに入れてから母さんが言つ。

みんなが車から降りて、四方八方にふらふらと散る。

「どこにいくの？入り口はこっちだよ～」

その声がする方へふらふらと付いていく。

「到着～」

母さんの声がする。

僕も意識が朦朧としているのか？

「うわっは！ すぐ～い。この前来たときよりもお店が増えてる

！」

「あれ！？ 結衣車酔いは！？」

「そんなのもう吹き飛んじゃったよ。それより早くいこ

なんという回復力。

僕もだけどルリなんてもうとひどいことになつていてるの。ルリは見るからに吐き気を催しているよつて見えるんだけど。

「・・・気持ち悪い・・・」

口元を抑えながらルリが言つた。田の焦点が定まつていない。今にもリバースしてしまいそうだ。

「ちよつとまって！あと少しだけ我慢して！－！結衣と母さん－ルリを早くトイレに連れて行つて上げて！やばいから－こんなどこのでやつちやつたらトラウマになるから－！－！」

「ルリちゃん大丈夫？」

「大丈夫じゃないからいつてるんだけビ－！」

「ん～。トイレつてどこにあつたつけ？」

「マイペース！？」

「・・・私、もう・・・」

顔色がどんどん悪くなつていく。

「多分こつちだつたつけかな～」

「どつちでもいいから早く連れていつてあげて－－－！」

「一時はどうなるかと思ったよ」

ルリをなんとかトイレに連れて行くことができて本当に良かった。トラウマなんかを植えつけさせずにするんで本当に良かった。

「ルリちゃん気分はどう…むづむづと休む？」

結衣が心配の声を掛ける。

「もう大丈夫です。はい・・・」

見た目からして少しあんまりやうだ。

「無理しなくていいよ。辛かつたら言ひて」

僕も声を掛ける。

母さんはとくに

「飲み物買いに行くつていつてから帰つて来ないね。奈々さん」

「ほんとにどこ行つたんだか」

「あーい。遅れてごめんね~」

母さんが手を振りながらこちらに向かつてきました。

いや、そんな大声で・・・恥ずかしいから。

「ちよつ、みんな観てるじゃないか！ちよつとは考えてよ。とい
うかどこに行つてたの？」

僕は母さんにとりあえず説教をして当然の質問をぶつける。

「えーっとね。ルリちゃんに似合ひそうな服があつたから買つち
やつた」

てつへつと言わんばかりに舌を出して首を傾げて自分に軽いげん
いつ。いつの時代の少女マンガだよ。

「でも奈々さん。サイズは大丈夫なの？」

「それだいじょうぶ。この前一緒に寝たときにだいたいのサ
イズは把握したから

「さわつただけで！？」

「ふふふん。それが全国のお母さんのスキルです」

全国のお母さんにそんなスキルはない！

「あの・・・飲み物・・・が

ルリの苦しそうな声。

「え～っと、忘れちゃった」

「・・・そん・・な・・・」

ルリの声が今にも消えそつ。

「ちゃんと買つてきてよー。むづ僕が行くからおとなしくセヒで待つてね」

そういうて僕は自動販売機がある方へと足をすすめる。

それにしても、なんでトイレの近くに自動販売機が無いんだよ。こんなことなら最初から僕が行くんだった。

「あれっ? ここに自動販売機がある。母さんどこまで行つてたんだ!? すぐそばにあるじやないか!」

ここはさつきのトイレから少し進んだところにある休憩所。歩いて一分もしない。

「・・・ミネラルウォーターでいいか」

母さんのことであんまり考えるのは良くないな。うん、考えただ

けで疲れる。

僕は飲み物を待つているルリを待たせるわけには行いかないと急ぐ。

「い、いない。・・・・もついや」

もういや〜〜〜〜。

「だけど僕も学習はする」

携帯電話をとりだして結衣に電話をかける。

近くから着信音が聞こえる。

「・・・携帯が落ちてる」

いい加減にしてほしい。

いうまでもなく着信画像には僕の名前が。

「なんだろ?」この状況。あの3人をこんな広い場所で探さないといけないのか?「

もう帰つてもいいかな?

そんなことを考えていると近くから声が聞こえる。

「こっちのほうが似合つてると思つんだけど」

「そうかな。私はこっちのほうが似合つていると思つんだけどな」

「な」

「えつと、私はどちらでも、どちらも可愛いですね」

「あんなところ。いや、近くにいて良かつたと思つのがこの場合

正解なのか？」

僕は3人がいるところに寄つていぐ。

「あつ、そぐん。どっちがルリちゃんに似合つてると思つ?..」

「こっちのほうが似合つているとおもうんだけどな」

「いや、それよりルリはもう大丈夫なの?」

「そういえば、もう大丈夫みたいです」

ルリも女の子つていうことか。服一つで元気になれるなんて。

「・・・僕はもう疲れたから、ちょっと向こうで休んでいるよ」

近くにあつたベンチに腰を下ろす。

何分くらい待つんだろう?

どうして女人の人つて買い物が長いんだろう。

「遅くなつてすいません。待ちましたか?」

「いや、待つたていうか・・・他の二人は?」

ルリだけが僕の座つているベンチに寄つてきた。

他の一人は影すらも見えない。

「えつとですね、結衣ちゃんと奈々さんは違う階に行つてしまいま

ました」

「えつと、ルリは一緒に行かなかつたの?」

呆れた気持ちをこまかすようにルリに質問をぶつける。

「それは奏吾さんがここにいるからじゃないですか」

当たり前みたいに僕にそんなことを言つてくれる。

「そんな事を言つてくれるなんて・・・ビコかに消えた二人にも

たまにはそう思つくらいはしてほしいよ

「何か言いましたか?」

「いや、何も言つてないよ!それより、僕の事心配してくれてあ

りがとう

「心配ですか？心配なんにしてしませんよ？」

「えつ！？じゃあ何で僕の所に」

さつきは僕がいるからついてくれたのに。

「それはここにベンチがあるからですよ？私も疲れたので休もうと思つて」

そういうことか一つ！

何か早トチリしたことが恥ずかしい！

ありがとうとかいっちゃつたし、穴があつたら入りたい！

「ブツブツ何か言つていいみたいですが、どうしたんですか？」

あつ、やばい。口から漏れてた。

「な、なんでもないよ！あつ、その袋、かつてもらつた服？」

「はい！奈々さんにいっぱい買つてもらつちゃつて、ほんとに申し訳ないです。でも、とっても嬉しいです」

ルリは満面の笑でいう。

本当に嬉しそうだ。

「良かったね」

嬉しそうにするルリを見て僕もなんだか気分が上がる。

「はい！」

ルリは可愛く返事をする。

「・・・ふつぐ・・・ぐすつ」

どこからか嗚咽が聞こえる。

「どうしたんですか？ 大丈夫？」

ルリの声。

僕がそのほうを見るルリはしゃがんでいた。子どもに田線をあわせるために。そこには嗚咽をもらしている、もとい泣いている子供がいた。

大声でないではないけども、小粒の涙を絶やさず流している。

「泣いてないで教えてくれるかな？」

できるだけ易しい声で話しかける。

「・・・僕、お母さんと、はぐれ、た」

帽子を深くかぶついてよくわからなかつたけど、自分の事を僕
と言つてゐるようだからどうやら男の子みたいだ。

「お母さんと迷子になつてしまつたんですか。秦吾もんどうしま
しょう?私、こういうの良くわからないんですけど」
僕が別にどちらでもいいことを考へてゐるとルリがとつても心配
といふ顔を見せて言つた。

「うーん、迷子センターにでも行こうか」

「迷子センターですか?それって迷子を預かるところの?」

「そうだよ」

軽く返事をする。

「でわそこに行きましょー!」

ルリが言つた。

しかし迷子の子は動こうとしない。

「どうしたんですか?迷子センターに行くのが嫌なんですか?」

その子は軽く頷く。

「でも迷子センターに行けばアナウンスしてくれるし。すぐにお

母さんに会えると思うけど」

「どもがぎゅっとルリの服をつかむ

「・・・一人は、いや」

帽子のせいで表情は読めない。

「一人じゃないよ。係の人もいるし、遊具だつてあるはずだから
退屈はしないと思うんだけどな」
その子からの反応はない。

「奏吾さん。あの、私たちで探しませんか?」
ルリがそんなことを言つた。

僕達で親を探す?

「なんでそんな事・・・」

「だって、一人は寂しいじゃないですか
ルリの顔が少し暗くなる。」

そういうえばルリは僕と合ひ前は、自分が知らない場所に一人でいたんだもんな。一人が寂しいのは嫌というほど分かっているってことか。

「うんそうだね。それじゃあ僕らで探そうか」

「はい！ ありがと「ひざこます！－」

ルリの顔に明るさが戻る。

「それじゃあこのフロアから探そつか

このデパートは6フロアあって、屋上は小さな遊園地みたいになつていてる。

今僕達のいるフロアは一階で洋服店。

「あの～、僕の名前はなんて言つんですか？」

そういえば名前聞いてなかつたつけ。お母さんを探すのに名前は重要だね。

「・・・葵・・・です」

小さな声で答えた。

「葵ちゃんって言つんですね。可愛い名前ですね」

「ほんとだね。でも、男の子の名前としては珍しいね

葵ちゃんはうつむいたままだ。

「それじゃあ行こうか。ルリ、葵ちゃん」

僕達はとりあえず探し始める。

「僕達、葵ちゃんのお母さんの顔知らないから見つけたらルリが僕に言つてね」

僕は葵ちゃんの方を向いて言つ。

「そうですね。それがいいです！」

ルリが僕の言葉に反応してくれる。

「・・・」

葵ちゃんは無言のまま頷く。

ゆっくりと歩いて行つてすれ違う人や、お店で物色している人に注意して見ていく。

「このフロアにお母さんはいましたか？」

Jのフロアをだいたい見て回つてからルリが言つ。

「・・・・・」

無言のまま首を横に降る。

さつきから僕やルリが話しかけても首を降るだけで言葉を発しない。

どうやら葵ちゃんは無口のようだ。

「Jのフロアにはいないよつですから、他のフロアも探しますか？」

「いや、それは少しまずいんじゃないかな？ Jのフロアで逸れただから、あつとJのフロアにこるとおもうんだけど、きつとお母さんも探しているだらうじ。」

「・・・・・がつ・・・・」

「えつと、葵ちゃん。今、なんて言つたんですか」

小さすぎて僕も聞き取れなかつた。

「・・・・違・・・・う・・・」

「何が違うんですか？」

「・・逸れたのは・・違つ・・所・・・」

「違つところなの！？」

僕の言葉に葵ちゃんがビクつとなる。

「奏吾さん！ 葵ちゃんがビックリしてゐじやないですか！」

「えつ、いや。『めんなさい』

ついついルリに謝つてします。

「私にじやなくて葵ちゃんに謝つてくださいー。」

「・・・はい。葵ちゃん、『めんなね』

「『めんね、じやなくて謝るときば』めんなさいでいいよー。」

ルリの両方の眉毛が釣り上がつていて。

ルリ、『めん。その顔ちょっと可愛い。』

「葵ちゃん、『めんなさい』」

だからと言つて謝るのを怠つてはいけないよね。ルリにも葵ちゃんにも嫌われたくないし。

「・・・大丈夫・・・」

心なしかその大丈夫の声が笑つて聞こえたのは氣のせいかな？

「奏吾さん。許してもらえて良かつたですね」

ルリの機嫌は戻つたようだ。

「話がそれちゃつたけど、逸れた場所がここじゃないつてほんと

？」

「・・・本当・・・」

さつきまで質問には首しか振らなかつたのに、今回は答えてくれた。

少し打ち解けてくれたつてことかな？

「それじゃあ、どこではぐれちゃつたんですか？」

「・・・屋上・・・」

葵ちゃんのか細い声が微かに聞こえる。

「屋上つてあの小さな遊園地のある？」

僕の間に葵ちゃんは小さく頷く。

「遊園地ですか！面白そうですね。楽しみです！」

いや、ルリが楽しむために行くんじゃないんだけど。

「というか、ルリのいたところでも遊園地あつたの？」

僕がふと思つたことをルリに聞く。

天使が遊園地で遊ぶイメージつて、あんまり浮かばないな。

「はい！ とっても面白いですよね！」

前言撤回。ルリを見ていると容易に想像が付く。

「・・・屋上行こつか」

僕の言葉に反応してくれた葵ちゃんが大きく頷いた。

なんだかこの大きな頷きはうれしいな。

僕達はエレベーターを使って6階のフロアへと移動した。

「あの奏吾さん。ここ屋上じゃないですよ」

僕達が向かっていたのはルリが楽しみにしている屋上であつて、

このフロアではない。ルリは少し困惑した顔で僕に言つ。

「Hレベーターは屋上までは行かないんだよ。ここから階段で

行くしかないんだ」

「そうだったんですか」

ルリの顔から安堵の表情が見える。

遊園地にどれだけ行きたいんだよ！

「ルリあのね、こここの遊園地は子供が遊ぶところであって、僕達が楽しめるようなアトラクションとかは無いよ？」

たしかにここには普通のデパートとは違つて少々クオリティの高い物は置いてあるけど、やっぱり普通の遊園地とは比べ物にならないくらい見劣りする。さすがにデパートの屋上と言つ狭いスペースで大きな場所の遊園地と張り合おうとするのは無謀。

「た、楽しむだなんて。私はこれっぽっちも楽しもうなんて思つてませんよー 葵ちゃんのお母さんを探すためですから。屋上に行くのは！」

ルリが分かりやすく動搖している。

僕が言つたルリが楽しめるかつて所に反応してしまつたらしい。屋上に行つてがっかりしないといいけど。

そして屋上に続く階段まで来た。

「えっと、この先が屋上なんだけど」

ルリの目がさつきよりも輝きを増している。

そんなに期待しなくとも。残念な顔が田に浮かぶ。

「それじゃあ、行きましょうー 葵ちゃん、いっぱいあそびましょーねー」

本音がもれてるからー お母さん探すんじゃなかつたつけ！？

「・・・・・」

葵ちゃんは首をたてに降る。

葵ちゃんも遊びたいんかい！

でも、ルリに会わせていいだけかも。

「・・・登ろうつか」

あんまり考えないでおひつ。

そして僕達は屋上の遊園地へと続く扉の前へ。

「ここが遊園地だけど、準備はいい?」「

ルリ、できるだけがっかりとかしないでね。

「はい!」

ルリの元気のいい声。

「・・・・」

葵ちゃんは首を縦に降る。

そして僕は屋上へと続く扉を開ける。

「・・・・あれ?」

だれもいない。

「あの、誰もいないんですけど」「

そこには人が一人もいなかつた。

遊園地の係員でさえも。

「えっと、どういう事?」

全く訳がわからない。

「奏吾さん! ここに来て下さい!」

ルリが何かを見つけたみたいで僕を呼ぶ。

「どうしたの?」

「これを見てください!」

ルリが指を指す方を僕は見る。

「真に申し訳ありませんが、都合により

本日は休館とさせていただきます」

「今日休み!?」

「ここに案内状に張り紙がしてあった。」

「・・・みたいですね」

ルリが見て分かるくらいにしょんぼりとしている。

いや、やっぱり楽しみにしていたんじゃないかな!

なんて言えないし・・・どうしよう。なんて声をかけようかな。

「あれ?」

ふと疑問に思う。

「どうしたんですか？」

ルリが落ち込んでいるところに反応してくれる。

「本日休館なんだよね？」

「はい」

といつことは

「葵ちゃんってここでお母さんと逸れたの？遊ぶ場所もないのに」「ホントですね。どうしてだらう？」

休館のはずの遊園地。

もし今日遊園地が開いていたらおかしくはないけど、閉まっているといつことは普通ここでは遊ばない。この遊園地に係員なしに遊べる遊具と言つものがない。

「・・・・・」

葵ちゃんは答えない。

「葵ちゃん？大丈夫ですか？」

答えない葵ちゃんを心配してルリが優しく声を掛けた。

それでも葵ちゃんに反応はない。

「とりあえず探そうか。もしかしたらお母さんいるかもしれない

し

葵ちゃんに反応はないし、ルリは困った顔をして動く気配がしない。ここは僕が動かないと。

僕が左手で葵ちゃんの手を握つて連れていこうとする。

「えつ？」

「・・・・」

つないだ手の方から少しだけ光が。

「えつと、今のは・・・」

ルリの時と似ている。

あの時は確か僕が右手でルリに触れた時だったか。

「奏吾さん！ 今光つて」

「うん分かつてるよ。葵ちゃんつてもしかして・・・天使」

ルリとの経験からして天使といつ答えにたどり着く。

「・・・天使？・・・」

葵ちゃんが久しぶりに発した言葉は疑問系。

「葵ちゃんは私と同じ天使なんですか？」

ルリがもう一度質問をする。

「・・・？・・・」

葵ちゃんは首を傾げるだけ。

「えつと、なんだかごめんね」

何も知らない葵ちゃんからしたら僕達はおかしな人。僕がルリに天使と聞いたときは電波な人と思つたんだから当然のこと。

「あの、えつとですね。えつとー」

ルリが変にフォローを入れようとしている。

ルリはそんなことをいわないでいいよ！ややこしくなるから。僕はそう思つていた間に手に感じていた温もりが消える。葵ちゃんが僕の手から離れてしまつたみたいだ。

「葵ちゃんどこいくの？」

葵ちゃんは遊園地の奥の方へと入つていった。

「えつと、どうしましよう！？」

ルリが慌てている。

「とりあえず追いかけるしか無いよーもしかしたらお母さんを見つけたのかも知れないし」

もしくは僕達をへんな人と認識してしまつて逃げただけかも知れないけど。

あの位の歳だと流石に天使は信じないか。

「葵ちゃん！ 待つてください！」

ルリが走りながら叫ぶ。

それにして葵ちゃん走るのはやいな。全然追いつけない。

とか思つていると突然葵ちゃんが止まる。

僕達も葵ちゃんと少し離れた距離で走るのをやめ歩いて近づく。

「葵ちゃん。いったいどうしたの？ 急にはしつて」

周りに人が見えない。こうことはお母さんを見つけたわけではないと。

あ、変人扱いされたか。

僕の中では一択しかなかつたので答えは自動的に導きだされる。でもそんな事信じたくないの理由を聞く。

「そうですよ！ 勝手に走つていいくと危ないんですから！」

ルリは何にも気づいていないみたいだ。

ルリの声に反応してか葵ちゃんがこっちを向く。

そして黒い霧が葵ちゃんを包みこむようにして現れた。

「何ですかあれ！？」 葵ちゃん！』

ルリが声を上げる

ルリの声と同時に僕は葵ちゃんに向かつて走りだしていた。だけど近づいていたとはいえ、葵ちゃんとは少しの距離がある。全く間に合わなかつた。

僕が一步くらい進んだといひで黒い霧は葵ちゃんの全身を包みこんでしまつた。

「葵ちゃん！」

腹の底から声を出した。少しでも葵ちゃんに届くよう。その声で黒い霧を吹き飛ばすようだ。

黒い霧は吹き飛ばない。

それどころかその黒さは増していくばかり。

僕はそれでも葵ちゃんに近づく。

そしてどす黒くなつてしまつてこる霧に右手を伸ばす。

「うわっ！」

右手は軽く弾き返される。

痛みはそれ程はない。

「けど、近づけない」

霧は大きさまでも増していく。

後退するしか無い。

「奏吾さん！ 葵ちゃん！」

ルリの声が微かに耳に入る。

「ルリは離れていて！ あぶない！」

僕は精一杯の声でルリに叫ぶ。体は葵ちゃんの方を向けて。

「・・・葵ちゃん」

決心を決める。

僕は左手をさつきとは違いおもいつきり突っ込む。

「へつ？」

おもいつきり突っ込んだせいか、弾きだされると思つていてたせいか僕は前のめりにずっこけた。

弾き返されるところか通り抜けてしまつた。

「どうゆう？ 霧の中じやない？」

通り向けたと思っていたの周りに霧はない。

その霧はとくに葵ちゃんがいた場所へと凝縮していく。

「奏吾さん！ 大丈夫ですか！？」

ルリが僕を心配してか寄つてくれる。

「あれって、どうこうことなんでしょうか！ 葵ちゃんは大丈夫なんでしょうか！？」

ルリの動搖が見て取れる。

そんなことを見て取れているといふことは僕は今冷静でいられてゐるんだろうか？

そんなどうでもいいことを考えてこの時点では僕はもう冷静を失つていたのかもしれない。

そして黒い霧は段々と晴れてくる。

そこからは段々シルエットが浮かび上がつてくる。

葵ちゃんのシルエットのハズ。

「なにか羽みたいなのが・・・」

ルリがシルエットを見てそう言つ。

確かに羽がある。

そして霧が晴れていく。

黒い羽に黒い角が一本。

これはどう見たって
「どうも、悪魔です」
僕の目の前に悪魔が姿を表した。

悪魔の友達（前書き）

久しぶりの投稿です。
内容が結構めちゃくちゃになりつつありますのが付き合つてくださる
と嬉しいです。

悪魔の友達

「どうも、悪魔です」

今は帽子もなくなつていて顔がはつきりと見える。葵ちゃん、いや悪魔はにっこりとしている。出来事が突然過ぎて頭の中が全く整理できない。

「ジャジちゃん？ ジャジちゃんじやないですかー！」

ルリが驚いた顔を見せながら大声を出す。

ジャジちゃん？ どこかで・・・

「あつ！ ルリを撃ち落としたつていうあのー！」

「それは心外だな。あれは事故

ジャジちゃんは顔を少しだけしかめて言った。

「それより、ルリのことを気安く呼び過ぎじゃないかな？ まだ

あつて間もないと思うんだけど」

なんだろう。よくしゃべる子じやないか。

葵ちゃんに比べると全くの正反対。

「葵ちゃん・・・葵ちゃん！」

ジャジちゃんの急な登場のせいで葵ちゃんが僕の脳内の端っこに追いやられてしまつっていたみたいだ。

「そうです！ 葵ちゃんをどこに隠したんですか？ ジャジちゃん！」

ルリの顔が自分の友達に会えた嬉しそうな顔から、若干困惑した顔へと変わる。

「僕と葵は同一人物。見れば分かるよね。葵の時の姿に羽と角が生えただけなんだし。他には僕が少しばかりしゃべるよくなつただけであつて、後はそのままなんだからさ」

そのままと言わても顔なんて殆ど見えなかつたし。

「『めんなさい！ ジャジちゃん友達なのに気づかなくて

ルリだつて顔さえみえればわかつただろう。』だ

「そんなこと、僕は全く気にしていないよ。むしろ都合がよかつたぐらいだ。それより、君はルリに近づきすぎ」

ジャジちゃんは僕とルリを引き離す。

「あの、ジャジちゃん。なんだか僕に冷たくない？」

「そんなことはないよ。ただ君の性格をあまり知らないと言ひ事が僕の警戒心を高めているだけかな。それに、よく知らない男性がルリの側に居てほしくないとと思うのは当然だと思つけど」

何なんだこの子は！？ 僕のこと嫌いなのか？ なんだか悲しくなつてくるからやめて！ 葵ちゃんといった楽しい時間に戻つて！

僕が変なことを考えている時にふと思ひ。

「そういうえばジャジちゃん。なんで葵ちゃんなんて嘘の名前なんか言つて僕達を騙したの？ ルリに会いに来ただけなら本当の名前と姿で会いに来ればよかつたのに」

それにルリを助けに来たのなら尚更そうすべきだと思つただけど。

「それは君がいたからだよ」

ジャジちゃんは僕に指を指す。

「えっと、僕？」

僕がいたからってどういう事だ？

「ルリを助けてくれたのは感謝してる。僕もルリと同じで、力を失つていて迂闊には動けなかつたから」

「力を！？ ジャあ今までどうしてたの？」

ルリを見ている限り力がなければ只の人と同じ。そんな子が一体どうやつて。

「一田くらいうら大丈夫。君は僕を子供と見過ぎじゃないかな？ 僕はルリよりも歳上だよ？」

「歳上！？ とゆうことは僕よりも」

「歳上」

少しにつこりとして言ひ。

全然見えない！ こんなに幼い容姿なのに。

「君はルリの年齢を知つているの？」

えつと、そういうえば聞いてなかつたな。

「君と同じ年だよ。そんなことも聞かないで、君は見た目で判断するのが得意のようだね」

「仕方無いじやないか！ ビンからビン見たつて小学生にしか見えないよ！」

「君は失礼な人だね。ロリコンといつやつなのかな？」

「ロリコンじやない！ それにロリコンの意味を間違えてるよ！ ロリコンは小さい女の子を好きな人のこと。ジャジちゃんは男の子だから」

ショタコンって言つんだっけかな？

「僕はどうちかというと女なんだけれども」

「えつと、女？」

ジャジちゃんは小さく頷く。

「えつ！？ どう見ても男の子にしか・・・」

「胸もなければ身長もない。髪だって短いし間違つても無理はないけれど。でもそれは失礼じやないかな？」

かなりの失礼を犯してしまつた！

「いや、というかルリ！ 知つてたら教えてよ！」

僕はルリの方に目をやる。

「葵ちゃんがジャジちゃんで、ジャジちゃんが葵ちゃんで。私が誤つたのは葵ちゃん？」

なんでそんなに混乱しているの？

「ルリはいつもの事だからいいよ。それより、君の事が知りたいな」

ジャジちゃんが言ひ。

「ぼ、僕の事？」

「そう。君の事」

突然僕のことが知りたいだなんて、もしかして僕の性別を判断できていないのか！？ さつきの僕の失態をあまり怒つていよいよ見えるのは、自分も性別を判断できなかつたからか。

「あのね、男に間違われたことは今でも怒ってるよ。それに君の性別位は分かつていいつもりだけれども。それとも君は女なのかい？」

「僕は男です！　はい、もうバッヂリ、毛が一本も通ることのない完璧なまでに男です！」

少し笑っているところが怖い！　一体僕はこの後何をされるって言つの！？

「だから、君の事を教えてって。君が男であるという情報以外の事をね」

よかつた。僕の事を教えるだけでの笑みを消せるのであればいくらでも話すよ！　それこそ湧き水のように。それにジャジちゃんの事も聞けるかも知れなし。

「わかった。それで、何から聞きたいの？」

「当然名前から」

「そ、そうだよね。僕は神木奏吾。高校生で、今は母さんと一緒に暮らしているんだ。それで僕の趣味は」

「ねえ」

「えっと、何かな？」

「君の事はもういいから、ルリとあつてからの事を教えて

・・・自分から聞いておいてそれはないよ

「どうしたの？　そんなに悲しい顔をして」

それからルリに会った経緯、ルリの力が一瞬戻ったことなどを話した。

「だいたい理解したよ」

「次は僕の番でいいよね？」

僕だって聞きたいことが色々とあるし、ここはぜひとも聞いておきたい。

「わかった。僕が話せることは何でも話すから」

「それじゃあジャジちゃんのこと教えてくれる？」

「僕のことかい？　僕の名前はジャルジ・ウォルク・ハンク。気

軽にジャジとでも呼んで、奏吾

「僕の名前呼び捨て・・・」

「呼び捨ては嫌だつた？ 年上だから構わないと思つたけど」

「どうだつた！ 見た目にダメされる。

「全然いいですよ！ むしろこいつちが呼び捨てでいいのかと」

「構わないよ。ルリの事も呼び捨てで呼んでいるみたいだし。そ

れにちゃん付けよりはマシだからね」

「ちゃん付けごめんなさい！ 次からは気をつけます！」

くつ、なんてやり辛い。

「敬語もいいから。これから厄介になるんだから馴々しくても一向にかまわないよ」

「いや、馴れ馴れしくなんて。・・・ん？ 厄介になる？」

「そう。僕もルリと同じく君の家に住まわせてもらうことにしたから」

「えっ！？ このままルリを連れて帰るんじゃないの！？」

僕はてっきりそのつもりで来たんだと思つていたんだけど。

「今の僕にその力はないんだ」

「でも今、悪魔に戻つているんじゃないの？」

「この力は君から借りているような物なんだよ。君から離れると長くは持たないから持続もしないし」

「僕、何か貸してたつけ？」

「・・・これから説明するよ。ルリにも聞いて欲しいから正気に戻ってきて、奏吾

「なんで僕が、ジャジちゃんがやればいいんじゃないかな？ 長い付き合いみたいだし」

「呼び捨てでいいよ。ちゃん付けは虫唾が走る」

「ごめん！ ジャジ」

なんで少し笑うの！？ その笑顔は怖いだけだよ？ 分かつてよ

！ ここに怖がっている人がいるということを！

「僕はそういう事は苦手だから」

「そういう事って笑顔の事？」

「奏吾、君は何を言っているんだい？ 何の話をしていたかも忘れてしまったのかい？ 君の記憶力という存在の有無を考えなくちゃいけないかな？」

言葉に棘がある！ 僕の胸に深く突き刺さつて苦しい。

「君は思い出す気があるのかい？」

「あります！ もうバツチリ、針が一本も通ることのない完璧なまでに思い出します！」

「君はその例えが好きなんだね」

なんでジャジは苦笑いをしてるんだろう？

えつと、僕がルリを呼びに行くつて話をしていたんだつけ。混乱状態を直すだなんて、ジャジにとって苦手そつにはみえないけど。でも頼まれたんだし僕が頑張るしかないか。

「ルリ！ ジャジが大事な話があるって」

困惑中のルリに呼びかける。

「ジャジちゃん・・・ですか？ 薫ちゃん・・・ですか？ 薫ちゃん？ ジャジちゃん？」

ゲームでの混乱状態だったらとっくに治つていると思つただけども。

「ジャジのほうだよ。薫ちゃんは今休憩中なんだって

とりあえず適当に言つてみる。

「なんだ、そうだったんですか！ 奏吾さん、もつと早く言つてくださいよ」

今の訳の分からぬ説明を信じたの！？ 薫ちゃんが休憩中って、なら早く休憩を終えて帰つてきて欲しいよ。

「ルリは前から信じやすくて思い込みが激しいから気にしなくていいよ」

あつ、そなんだ。ルリは信じやすいのか。これはいいことを聞いたな。

「奏吾、ルリを騙したら許さないから

「ぼ、僕がそんなことするはずが無いじゃないか！」

全く、心外だよ！ 僕は紳士の中の紳士と呼ばれるほどに紳士なんだから。

「君は勘違いをしているみたいだけども、紳士といえば教養の高い人に見えるわけではないよ？ むしろバカに見えるからやめたほうがいい」

バカだなんて、僕は自分は悪い事はしないということを分かつて欲しかつただけなんだけど。バカって言わると亮介と同じだつて言われているみたいで嫌なんだけど。

「あれっ、今僕声に出して言つたつけ？」

心の中でも読まれた？

「心の中なんて読めないよ」

「そうだよね」

僕の勘違いだつたみたいだ。

「話つてなんですか？」

困惑状態から抜け出したルリがジャジに近寄りながら言つ。

「僕の力を教えてくれるんだよ」

「奏吾さんの力のことですか？ ジャジちゃん、それつてどうい
う事ですか？」

「それは今から話す。僕の知つている限りをね」

ジャジの顔つきが変わる。

「まず最初に人間の力の事から。人間の力というのは、僕達悪魔
や天使の力を作り出すことができるということなんだ」

「人間にもジャジやルリのようなことができるって言つなの？」

「ということは人間もルリがやつた回復魔法のような物が使えると。
「そういう意味じやないよ。」

ジャジは僕の方を見上げながら言つた。

「そんなことが人間にできるなんて聞いてないですよ！」
ルリが驚いた顔をしながら言つ。

「それはそうだよ、ルリ。このことはトップシークレットの情報

だからね

「トップシークレットですか？」

ルリが不思議そうな顔で言う。

「そうだよ。この情報、本当は誰にも話してはならなかつたんだけれども、ルリだから特別に話すんだからね」

ジャジは微笑みながら言った。

その言い方はツンデレっ子が使うものだとばかり思つていたけど、案外誰でも使うのか。というかルリだけつて言つてたけど、僕も聞いたやつていいのかな？

「それは構わない。君はこの話に多いに関わつてることだからね。君にも理解してもらわないと僕が困るんだよ。それに君は特別中の特別だからね」

特別中の特別？

「それってどういう事なの？」

「今からちゃんと説明する」

ジャジは一つ咳払いをする。

「人間達が作り出す力と言う物は極小さいものであつて、僕達の力の百万分の一よりも低いものしか作り出せないんだ。本来は」

「本来は？」

「そう、本来は。だけれども極まれに僕達が作り出す量と同等かそれ以上を作り出し、体内に貯めておくことができる人間がいるんだ。僕達はこういう人たちのことを器を持つ者と呼んでいる。器というのはね、天使なら天使の力、悪魔なら悪魔の力を保持していられる存在の事で天使たる器、天使の力を保持していられる者を天器、悪魔たる器、悪魔の力を保持していられる者を悪器^{あき}と呼んでいる。

ちなみに悪魔の力を魔力、天使の力を天力と言うんだ。まあ、呼び方に意味なんてないんだけどもね。でもあつた方が便利というだけだよ。実際、天使と悪魔の力の源は殆ど同じだから天使だって悪魔の力、魔力を使うことだって、悪魔が天使の力、天力を使うことだってできてしまうんだよ。全員ができると言つわけじゃなくて極

少數だけね」

なんだか話がじちや「じちや」してて分かりにくい。

「要するに天使の力を貯めておけるのが天器、悪魔の力を貯めておけるのが悪器って言うことですか？」

ジャジはルリに笑みを向けながら言つ。

「そういう事だね。ルリは物分かりがよくて助かるよ」

僕は物分りが悪いとでも言いたいのか、その目は。

だけれどもジャジに言われたことを聞いて、ルリは「少しつら顎を赤らめて恥ずかしがつていて。ジャジに褒められて嬉しかったみたいだ。

「「こめんジャジ。よく分からないことがあるんだけど、力を作り出せる人は全員の力を蓄えることができないの？ それに蓄えることができなかつたら、一体その力をどこにいつちゃうの？」

「えつと、説明してなかつたかな？ 力を蓄えれない人は常に力

が漏れでいるつて考えてもらつて構わないよ。殆どの人は元々の力がかなり弱いし、身体への影響は全くないから、心配する」とはな

いけれど」

ジャジは安心してと言つて僕の肩をポンと叩く。

身長に差があるからジャジはハイタッチのポーズになつてているけど。

「えつと、それじゃあ僕はその器と言つことなの？」

「そういうことだよ、奏吾。そして君はその力を僕達に貸せることが出来るんだ」

力を貸すか。あの時ルリの力が戻つたのは僕が原因だつたということなのかな？

「その通り。ルリは君の力を借りたといふことだよ」

「それじゃあ、僕は天器と言つことなの？」

「君は悪魔の力も持つてゐるだろ？？」

悪魔の力も？ そいつえば今はジャジも悪魔に戻つてゐるんだつけ。僕が原因で。

「ん？ でもさっきのジャジの話じゃあ、まるで天使の力と悪魔の力をどちらかしか持つていかない言い方じゃないか」

名前を付けて区別までしているし。

「確かにそうですね。ジャジちゃん、どういう事ですか？」

「さつきも言つたよね？ 天力も魔力もさほど変わらないって。でも、使えるのは全員じゃないとも言つたよね？ 極少数だつて。その少数が君と言つ事なんだよ。これ位は理解できるよね？」

「あの、僕のこと本当にバカだと思つてないよね？」

僕だつてそれくらい理解できるよ。それにさつきの話しだつて分かりにくく」と思つただけで理解はしていたし。

「なら僕の説明が悪かつたつて言つのかな？ 君は」

その笑顔以外の表情はできないんでしょうか？

「できることもないけど、君にはこれが効果的みたいだからね。これからも何度も使わせてもらうよ」

「その笑顔は僕にとつて凶器だよ」

「なに言つてるんですか秦吾さん！ こんなに可愛い笑顔、私にとつても凶器です！」

「ルリ、君が言つてる凶器と僕が言つている凶器は意味合いが違うと思うよ」

「そんな？ マークをだされても」

「あのさ、僕が力を貸すつて言つてるけど返してもうつているの？」

？」

突然の質問に対してもうとした顔をする。

「返しはしないよ？ だつて力は使うとなくなるものだし。返しよつが無いじゃないか。それがどうかしたのかい？」

「いや、それじゃあ貸すという表現より、渡すという表現の方が正しいよつな気がするんだけど。僕の気のせいかな？」

「・・・君は僕をバカにしているのかい？」

さつきまでの笑顔とは違う！ なんだか笑顔が少し崩れて殺氣さえ感じるのは僕の思い過ごしだと信じたい！

「君は信じる信じない以前に僕に何か言う事は無いのかい？」
僕に謝れって言うの！？ ジャジがいい間違いをしていただけなのに！

「文句があるのなら聞くよ。後でたっぷりとね」

一体何の後つて言うんだ！？ その時に僕は元気な姿で立つているとは想像できない事と関係していないよね！？

「大丈夫。痛いのは最初だけだから」

「もう、僕は諦めるしか無いのか・・・」

「どうしたんですか？ 奏吾さん。人生が終わつたような顔をしていますけど？」

「ルリ、僕がいなくなつても僕のことを忘れないでね」

「君は何を言つているんだい？ 「冗談はここまでにして、力を渡す話だつたよね」

あつ、渡すに変わつて。

「君には少し僕の怖さと言つ物を知つてもうつたほうがいいのかな？」

「そ、それだけは遠慮しておくよ！」

危うく僕の人生という幕が閉じるところだつた。

「僕が言つたかったのは、君は僕達一人に力を渡せるということなんだよ」

僕はルリに力を渡していくみたいだし、ジャジにも同じ用に力を渡したのだから、ジャジが区別している意味が分からない。どちらも同じような力とも言つていたからジャジカルリがどちらの力も使えると言つことなのか？

「違うよ。何度も言つけれど、全員がどちらの力を使えると言つわけじゃないんだ。どちらの力も使える人なんて稀つて何度も言ったよね？。僕もルリも使うことなんてできない。だから君は特別中の特別なんだよ、奏吾」

僕が特別中の特別だつて？

「普通、器を持つ者はどちらか一つの力を持つてゐると考えても

らえるとすぐに分かるんじゃないかな？ つまり特別なものでもどちらか一つの力しか莫大には保有していない。この意味も分かるよね。つまり君の特別中の特別たる所以は一つの力を莫大に所有していると言う事なんだよ。僕の言っていることは理解したかな？ だから君はこの話を知つておかなくてはいけない。そして自分の力の貴重性、そして君自身の危険性を

ジャジの顔が一段と真剣味を帯びる。

僕の中にある力ってどんでもないことだつたんだな。

「あの、ジャジちゃん。貴重性はわかつたんですけど危険性って、奏吾さんは危険な存在と言う事なんですか？」

ルリは少し心配そうな顔を浮かべながらジャジに問いかける。

危険性？

そういうえば最後にジャジが言つていたな。確か力は莫大にあつたとしても人間にはその力を使えないんじゃなかつたっけ？ 危険性を感じるところなんて一つもないと思うんだけど。

「ごめんね。少し言い足りなかつたみたいかな。僕が言いたいことは君が危険な存在じやなくて、君の身が危険だと言う事を言いたかつたんだよ」

僕の身が危険？

「なんで奏吾さんの身が危険なんですか！？」

ルリの顔がすごく心配していると分かる顔に変わる。

「この情報はトップシークレットって言つたよね？ なんでか分かる？」

「いいえ、分かりません！」

なんてすがすがしい返事なんだ。僕にも良く分からいや。

「奏吾、人事じやないんだよ。あまり軽く考えるのは良くない

「あつ、ごめん」

怒られてしまった。

「それじゃあ例えの話をするね

例えは分かりやすくて助かるよ。

「あるところに悪い悪魔がいました」

「えつ？ 悪魔なのに悪いとかあるの？」

「悪魔という名前からして皆悪そうだけだ。」

「だから例えつていつたよね？」

「ジャジの表情、悪魔のように怖くなつたよ！」

「悪魔のようになって、僕は悪魔だよ。それに僕が悪そうに見える

？」

「見えます」

限に今の顔、すゞぶる悪そうに見えますからー。

「・・・怒るよ」

ジャジの瞳孔が開く。

怖い！ 僕泣いちやうからーー。

「ジャジちゃんが、ジャジちゃんが・・・ものすゞく怖いです」

ルリが半泣きでジャジに訴えかける。

そんなルリを見てか、ジャジの顔は一瞬にして笑顔へと変わる。
なんという早業！

「冗談だよ、ルリ。何真に受けてるんだい？」

「冗談か。よかつたよかつた。」

僕がそう考へていてるにつっこり笑顔のジャジが僕の方を向く。

「（ルリをいじめるなよ）」

その目からは僕にはそう聞こえる！ 瞳孔がまた開いてらつしゃ

いますよー

「その目、怖いからやめてほしんだけど・・・」

「あの、何か言いましたか？」

僕の力ない声をルリが拾つてくれる。君は僕の助けになつてくれ
るんだね。

「奏吾は話を進めて欲しいだけだよ、ルリ」

僕の助けの船が・・・

「さてと、本題に戻ろうか」

よかつた。許されたみたいだ。

「別に許したとかじや無いからね。話が進まないから一曰置くだけだからね」

「一旦置くつてなに！？ どれだけ根に持つてるの！？」

「例えの話に戻るから。えっと、悪い天使が、だつたかな

悪い悪魔じやなかつたつけ？」

「奏吾、君つてやつは

またあの目！？ あの目をするつて言ひのー！？」

「僕、もう君に合わせるのに疲れたから話を進めるよ」

僕に合わせてくれていたのか。何だか悪いことをしたな。

「何だかじやなくて、悪いと思つたら謝る」

「ごめんなさい」

「うん、いいよ。なんで誤つてているかわかつていらないみたいだけど」

分かつてはいないけど、怒つてているのは分かる。

僕が誤つたからか、気分が少し晴れたようだ。さつきまで感じていた怒りが薄れていよいに感じる。

「あるところに悪い天使と悪い悪魔がいました。ある日その一人の悪者は上の世界の侵略を考えました。しかし、悪者一人だけでは当然適うはずがありません。そんな二人の耳にある情報が飛び込んできました。それは僕達がトップシークレットとして扱つてている情報でした。君達がこの二人ならどうする？」

話し方が本を読み聞かせる保母さんみたいだな。

「私なら侵略を諦めます！」

ルリが元気良く答える。

あ、こんな場面小さい時にみたことがある。

「うん。実際にルリらしい答えだね。僕もそつあつて欲しいと思うよ。だけど今回はこの二人は侵略を諦めないこととして考えてみてほしいな」

「そうですか。残念ですけど分かりました」

ルリはにつこりとする。

「奏吾ならどうする?」

僕なら、そうだな。

「人間が力を持っていると分かっているなら、それを奪いにいくかな」

「うん、僕はその答えを聞いたかった。君の言つように奪いに来るとして、どうやって奪おうと思う?」

「どうやってって。それは僕がルリやジャジに力を渡したみたいに奪いとるんじゃないの?」

「そうです。私もそう思います」

「そうだつたのならまだ良かつたんだけどね。二人とも覚えていると思うけど、ルリの力は継続したかい? しなかつたよね。限に今のルリは力がないままだろう?」

「でもそれは僕の力を全部渡していなかつたからじゃあ」

「それは違う。すべての力を渡したからと言つても自分で作れないのなら意味が無いんだよ。奪つただけの力ならいつかは底を付いてしまうのだから」

なくなる力を奪う必要が無いんじゃないのか?

「それなら奪う人数を増やしたらどうですか?」

確かに一人じゃ足りないなら二人、三人と増やしたら。

「確かに、それは考えられる最善の策だとは思うよ。でもね、力を莫大に持っている者はやつぱり少ないんだよ。奏吾のように力を多く持っている者以外の力だけを奪つたとしても意味がない。もし奏吾と同等の力を奪おうと思ったら百万人でも足りないんじゃないかな」

普通の人はジャジ達の百万分の一よりも低い力しか無いんだったつけ。

「それじゃあ、力を奪う必要なんてないんじゃない」

「力だけを奪うならね」

「それ以外に奪うものなんてあるんですか?」

「その通りだよ、ルリ。力だけを奪うんじゃないんだ。その元か

ら取り出す元からね」

「元つてどういう事?」

「元と言つのはね、要するに力を作る導力とそれを蓄える器を奪うと言つ事」

「導力と器ですか?」

導力? また新しい単語が増えたな。

「それならコシコシと貯めることも、莫大な力を受け継ぐことが出来るからね。秦吾、察している通り導力も天使と悪魔で名称が違うよ。天使は天導力、悪魔は魔導力と言うんだ。天の力、魔の力を導くと言つ意味なんだけれども、深くは考えなくていいよ」

「深くはって、深く考えることもないと思うんだけども。

「でも、受け継ぐことができるとか奪えるとか言つてるけど、結局どうやってそんなことをするの? それになんかすごい力みたいだし、そんなにホイホイ渡せるとは思えないんだけど」

「そうですね。そんなうまい話がある理由がないんですよ」

「そう、そんなうまい話なんかある理由がないんだ。渡すには特定の条件がいる」

特定の条件?

「その条件とは力の根源。つまり生命そのものを奪うといつこと。この意味は分かるよね?」

生命そのもの奪う? といつことはもしかして。

「・・・命を取るってことですか?」

ルリが消え入りそうな声で答える。

「そういうことだよ。正確には命を奪つた後に出てる魂を食べるんだ」

「魂を食べちゃうんですか!?」

今日のルリの一言は驚く為にあるんじゃないかと思つくりて今日は驚いているな。

「食べる」とこよつて器とその導力を取り込むことが出来る。自分の体内に。それなりにちりの世界に来てまでも欲しくなるだらつ

？」

ジャジは不敵に笑う。

「世界のバランスは、一体世界のバランスはどうなつてしまふんですか！」

世界のバランスが何だつて？

「だからトップシークレットと言つてゐるんだよ」

ジャジの顔に真剣味が帶びる。そしてルリはとつと怯えているのか、小刻みに震えている。

「えつと、バランスがどうとかつて言つてゐる意味がいまいち分からないんだけども」

「奏吾、僕らの世界と君たちがいるこの世界とは繋がつてゐるんだ。死者の魂は天に昇るとか聞いたことはないかい？　その天といふのは僕たちの世界のことと置き換えて聞いて欲しいんだけど、天だからと言つて天使だけの世界というわけじゃないよ？　そこの所も理解して聞いてほしいんだ。つまりはね、その死者の魂は僕達の世界に来る。そしてその魂は僕達の世界で再び生を受けるんだ。生まれ変わるんだよ。そして僕達の世界で生きていく。そして時が来ればその生も亡くなつてしまつよね？　要するに死者になる。そうすれば魂はどうなると思う？　次は君たちの世界に降りるんだよ。そしてまた新たなる生として誕生する。この繰り返しさ。魂の循環。だから、魂を食べられてしまうとその連鎖は止まつてしまふんだよ。つまりどちらの世界からも消えてしまふということ。これが一人だけならばこの循環は崩れはしないんだけども、ルリも言つていたよね？　一人がダメなら二人、三人と。百万人の力を奪つてもと言つたけれど、その器や導力ごと奪つたとして、それをコツコツと貯めればどうなる？　当然その分は力がつくよね？　この世界の人口は億単位でいるだろう？　もし少しづつ、コツコツと貯められでもしたら僕達だつて気づくかどうか。そうすれば確実に、少しづつではあるけれども魂の循環から外れる魂が有るということ。そうなればこの循環は崩れ去つてしまふ恐れがあるんだ。魂の循環が崩れて

しまつと僕も何が起きるか分からぬ。何が起こるか分からぬのは怖いことだよ。何も起こらなければそれはそれでいいんだけども、その確証がないと言つことは僕達や君達の世界が消えるかも知れないといふ恐れだつて出てくる。僕達はそれが怖いんだ。とてつもなく」

ジャジの顔に曇りが見える。

ルリは魂の循環のことは知つていたのだろう。だからこんなに怯えているのか。ルリのことだから最悪の場合を想像するだろうし。

「トップシークレットな理由はわかつたよ。だけど、僕が危険というのが分からぬんだけど。だつて、僕じゃなくても力を奪えることなんだし」

「君は忘れているみたいだけれど、普通の人は百万分の一よりも低い力しか生み出せないと言つたよね？　君の力は僕達のよりも明らかに大きんだよ。大きい力は狙われる。小さい力をコツコツと、と言つても小さすぎると思わないかい？　一気に力をつけたいという奴なんて、ゴロゴロいると思わないかい？」

「えつと、今さつきから僕達つて言つてるけど、達つてジャジの他にもこの情報を知つている人がいるって事なの？」

僕の質問を聞いたジャジは、少し困ったような顔を見せて

「その情報もトップシークレット。君には関係の無いことだから教えられないよ」

これ以上追求しないでおこう。

あんなジャジの顔を見てしまつと、もう思ひしか無いように思えた。

「私、私奏吾さんを守ります！！！」

突然そんな決意を声高らかに宣言するルリ。

「奏吾さんにはお世話になりましたし、それに私達の世界も奏吾さん達の世界も崩壊させる訳にはいきません！　だから私が奏吾さんを守ります！」

ルリの目は真っ赤に燃えるようにギラギラとしていた。
さつきの怯えはどこへやら、だ。

「あ、ありがと。」

とりあえずお礼を言つておこう。

「ルリ、その覚悟忘れないでね。これは僕達が受けた任務なんだから」

ぼそっとジャジがつぶやいたのが僕の耳に入った。

任務？ 一体どういう事だ？

でもジャジには聞きづらい。またさつきのような困った顔をされると僕の良心が痛むからね。

「奏吾、なんだかかっこいいこと考えているみたいだけど、實際そんなにかつこ良くて無いから」

「くそつ、何だか熱いぞ！ ここは暖房の効きすぎじゃないか」

「ここは屋外だよ、奏吾」

ジャジは僕を追い詰めてなにが楽しんだ！

もうその恥ずかしい奴を見るような目で僕を見ないで欲しい！

「ごめんね、奏吾。僕もあまりからかう気は無いんだけども、何だか君を見ていると、ついね」

ジャジは笑う。

その笑顔は僕がさつきまで見ていたジャジの表情の中で一番自分を表している自然体に思えた。

「それじゃあ話を戻すよ」

「戻すといっても僕が知っている限りの君の、というより人間の力については話したから、次は君の力の発生条件とその有効時間、有効範囲の説明でもしようかな」

「またややこしい話？ 今日はもうさつきのでお腹いっぱいだよ。明日にしてくれないかな。母さんや結衣もそろそろ買い物済ましてるだろうし」

それにジャジも今日から僕達の家に住むみたいだから。

「いえ、聞きましょう！ 奏吾さんをお守りするには力は必要不可欠なものですから！」

「奏吾、自分が狙われているという自覚がなさすぎると」

同じような理由で起られてしまった。

自覚がつて言われても、実感なんかわかんないよ。

「君がそう思うのも無理は無いけど、この話もとても重要な事なんだ。君だけじゃなく、戦う僕やルリの命だって君次第なんだよ？」

「そう言わると何も言えない。

「それでは話を続けるよ」

「はい！」

ルリの元気な返事。

パンクしそうな頭に少しでも知識を詰め込もうと、今までのジャジの話を要約して保存。

・・・やっぱりパソコンのようにはいかないみたいだ。

「そんないらないことを考えている暇があるなら少しでも僕の話を覚えてよね」

「そんなこと言わなくても、僕だつていっぱいいっぴになんだから

「奏吾、ならこれだけを覚えていたらしいんだ。君は狙われている。命が危ない。ただそれだけを」

「確かに、それは簡単だ！」

僕の言葉にジャジは半分呆れ顔になる。

「君って奴は、少しさは危機感を覚えて欲しいものだよ」

危機感を持つて言われても、やっぱり狙われているという実感が沸かない。

「わかった。それは仕方のないことかも知れないから、とりあえずは狙われているということだけは分かつていて」

ジャジは諦めたように小さな溜息をついて一回話をきる。
そして小さく息を吸う。

「まずは奏吾の力についておさらい。君は天使と悪魔の力、二つを持っている。そしてそのどちらも僕達悪魔や天使に比例するほどに強大な物である。これがさっきまでに言ったこと。そして君の身体の右半身が天使、左半身が悪魔の力を宿しているところが新

しごこと

「半分ですか？」

ジャジがその言語に對して頷く。

「奏吾の右半身には強力な天導力が、それでいて左半身にも強力な魔導力が備わっている。さらにはその膨大な力を収める器までも両半身にそれぞれる。

ここまで何となく分かつてもらえればいいんだけれども。奏吾とルリに覚えてほしいことは右が天器で左が悪器であるところのこと。これだけは覚えておいてね」

「はい！ 私は奏吾さんの右側から力を貰えればいいんですね！」

「ルリがいう右側って、僕の右半身のどこででも力つて渡せるの？」

「そんなに急かさないでくれないかな？」

「別に急かしてなんか」

ルリの言葉に誘われただけなんだけど

「まずは君の力はどうやら手からの受け渡しになつてているのだと思つよ。僕もこれは確証がないんだ。だつて仕方ないだろ？ 君のよう力を渡すなんてやり方、前例がないんだから。今まで力を手に入れていた者はみんな魂を食べていたからね。だから情報を得るすべがない。むしろ僕が知りたいくらいさ。そのことは後で検証をさせてもらえないかな？ いや、絶対する」

あの、そんな下から睨みつけたような目をされても、上目遣いをしているようにしか見えないよ？

ジャジの上目遣いは可愛いな。

「奏吾、そんなことばかり考えていると死ぬよ？」

死ぬつて！？ 戦闘で殺られるつて事！？ それともジャジに殺られるつてことなの！？

「僕は君を護るつて言つてているんだよ？ 殺る訳がないじゃないか、ふふっ」

それじゃあその笑いは何なの！？ 憎悪しか感じられないんだだけ

れども、気のせいだよね！？ 気のせいなんだよね！？

「そんなことは置いておいて」

置いちゃうの！？

「あとは力を渡す方法、これも僕の推測の域を脱せれてはいないんだけれども、おそらく君が気を許した相手に流れこむんじゃないかと言うのが僕の考え方」

「えっと、推測なの？」

てつくりわかっているのかと。

「さつきも言つただろう？ 前例がないって」

「でも、この話のはじめに力の有効範囲と有効時間の話をするとて得意げに言つていたよね？」

発生条件とかも分かつている風だつたのに。

「奏吾さん！ ジヤジちゃんは数少ない情報からここ今まで理解して推理して説明してくれているんですよ。そんなジヤジちゃんを追い詰めるようなことを言つるのは良くないと思います！」

「いや、追い詰めるつてことなんて」

「ありがとうルリ。君はいつでも僕の味方をしてくれる。こんなに幸福なことはないよ」

そんな、僕の味方にもなつてよ、ルリ。

「ルリは僕の一一番の友達だからね。当然の事だと言つ」とだよ。

わかつたかな？ 奏吾

・・・悔しい。僕だって少なからずルリとは親しくなつたつもりでいたのに。

「ルリ、僕達つて友達だよね？」

「違います！」

「そんな！ 僕達友達じゃないの！？」

僕だけが友達と思っていたのか！？

ジヤジ！ そんな可哀想な目を向けないで欲しい！

「奏吾、友達というのは親しい者同士の事を言つんだよ。君はルリとそれほどに親しかつたかな？」

ジャジの言葉に胸が張り裂けそうになる。

苦しい。この状況が僕には辛い。

「それじゃあルリにとつての僕つて

赤の他人ということなのか！？

「はい！ 奏吾さんは私にとつて命の恩人なのです。友達だなんてとてもとも。おこがましいと思います！」

「いやおこがましくなんか無いよ！ 僕をそんな女神のようにならせるのはやめて！」

「君は何を言つているんだい？ 奏吾、女神といつのはルリのような天使の最高位で、尚且つすべての種族に崇められる存在なんだよ？ 君のような者が女神だなんてそれこそおこがましい。それに君は男だろう？ それとも女装でもしようと言つのかい？」

「ジャジ！ 僕の余計な一言に反論しそぎじゃない！？」

とりあえず気を取り直して

「とりあえず、僕はルリと友達という関係でありたいんだ。命の恩人だなんて言つて距離をおくのはやめて欲しいんだけど」

「そうですか・・・」

ルリは少し考へる仕草をして

「分かりました！ 命の恩人からの頼みですから。私は今日から奏吾さんとは友達です。これからよろしくお願ひします！」

今日からという言葉が心を突き刺す。それに命の恩人だからって、そんな命の恩人じやなかつたら友達にもなれなかつたってことなの？ でも、まあ友達という立ち位置に付けただけでも良しとしたほうがいいのかな？

「命の恩人からの頼みだからね。ルリはしっかりとお願ひを聞くべきだよね」

その仕方なくみたいな言い方は僕を追い詰める為なの！？

一体ジャジは僕をどうしたいというわけ！？

「どうもしないよ？」

「どうもないならやめてよ！ 僕つて傷つきやすい体质なんだか

「ら

笑つてないで何か言つて！ ルリもジャジに釣られて笑わないで！

「じめんよ奏吾。もう言わないから泣かないでくれ」

「泣いてないから！ 勝手に泣かさないでくれる！？」

「奏吾さん！ 私もジャジちゃんもいますから。だから泣かない

で下さい」

だから泣いてないって。

「奏吾の事は置いておいて、話を戻すよ」

そんなこと言わないで。何だか寂しくなつてくるから。

「さて、有効時間と有効範囲の話だったね。これは話すのは難しいから長くなる・・・と思つたけど、話すよりも実践。今までのおさらいも兼ねてね」

「実践つて、戦うつていつの？ といつよつそれも憶測？」

「そうだよ。悪いかい？」

「悪くはないからね。だから怒らないでね！」

「怒らないよ。それより、来たよ。一人とも氣をつけて」

そう言つてジャジは空を見上げる。

僕とルリは釣られて空を見上げる。

ズドーン！！

「うえ！？」

「きやあああ！！ な、ななな、なんですか！？」

僕達の後方から凄まじい音が響いたのを聞いて驚く僕とルリ。

「彼が今回の対戦相手」

ジャジはその音のした方向を向き直つ。距離は30m程の所。2mくらいありそうな身長に長い手、それに反しては短い足をしていて、口からはみ出した牙が上下に一本ずつ生えている。そして頭には一本の立派な角がこれ見よがしに生えていた。

「いや、あれが対戦相手だとしても何で空なんて見上げたの！？」

上から何か来ると思ったじゃないか！ なんでフェイントなんてかましていくの！？」

「奏吾つるさい。もう戦闘は始まっているんだよ？ それに僕は空から来ると言つたかい？ ルリを見てみなよ。ルリから放たれるこの緊迫感、もう戦闘態勢に入つていてる」

緊迫感か。

僕にはルリが只怯えているように見えるんだけど、氣のせいなのかな？

「ルリ、大丈夫？」

「ふあい！ 私はいつでも大丈夫です！ もうバッヂリです！」

脚が震えるくらいのバッヂリ加減です！」

「脚が震えているのがバッヂリじゃないよね！？ それはもう戦える状態じやないよね！？」

「何を言つているんだい？ あれは戦闘の前に興奮して体が震えてしまう現象だよ」

「僕には武者震いには見えないよ！」

ルリには心配要素しか見当たらない！

「今回は僕一人で戦うから、一人とも手を出さないで。奏吾の力は借りることになるけど」

「一人で戦うなんて危ないです！ 私も戦います！」

「こっちの世界での戦い方が良く分からぬルリは不利な立場にあるわけだし、もちろん奏吾は戦えないからね。力があつても使えないんじやあ意味が無いからね」

そう言われると自分が情けなく思えてくる。

「奏吾、そんなに落ち込むことはないよ。君がいるから僕達が戦えるんだから」

僕の気持ちを察してか、ジャジが優しい言葉をかけてくれる。

「あの、ジャジちゃん。どうしてさつきからあの怪物さんはこちらを攻撃してこないんですか？」

確かに、さつきからこちらに攻撃してくる素振りが見えない。一定の距離をとつて眺めているだけのよう見えなくもない。

「ルリも彼を怪物と呼ぶんだ」

「ジャジ？」

聞こえるか聞こえないかの声でジャジが言った言葉。

僕はその言葉がひどく悲しそうに聞こえた。

「なぜ向かつて来ないかだつたね。それはこちらの様子を伺つているんだよ。多分向こうからはまだ仕掛けっこないと思つよ

「そつか。それなら安心だね」

「安心なわけないよ。まだつて言つたよね？ 戰闘態勢を崩したら殺られるよ？」

「そうですよ！ 私たちが安心して油断したときに食べに来るんです！」

「その通りだよ、ルリ」

二人の気迫に押される僕。

「わかった。油斷は絶対しない。それより僕はある存在が何のか知りたいんだけれども、天使や悪魔つてわけじゃないよね？ ルリは知つているの？」

「いえ、私も詳しくは知らないんですけど、怪物だと学校では教えられて、その存在は悪い者だつて」

怪物つて、そんな曖昧な言葉の中に入れられても分からないし。その言葉を聞いてジャジはルリから顔を背ける。

「どうしたの？」

「なんでもない。それよりあの存在の話だよね？ あれは怪物という名前で私たちの世界では呼ばれているんだ。でもね、本当の名前は別にあるんだよ。奏吾も思つただろ？ なんでそんな曖昧な括りに放りこまれてているだけなんだろうって、それは知られたくなかったからだよ。この、「鬼」の存在を

「鬼！？」 鬼つてあの桃太郎が退治したつて言つ…？」

「鬼ですか！？」 あの桃太郎が退治してくれたつていう…？」

「君達は同じことを考えているみたいだけれど、僕は桃太郎を知らないからね。何とも言えないんだけども。鬼というのはね、魂の循環の話を覚えているかい？ その循環ではたまに循環から漏れ

てしまう魂があるんだよ。幽霊とでも言ひておこうか。その幽霊はね、この世に未練があつてつて話はよく聞くよね？ でもそれは違うんだ。魂の循環にはね、ある程度の力が必要になるんだよ。悪魔でも天使でもどちらでもいい、どちらかの力をほんの少しでも持つていれば漏れたりはしないんだ。でもね、奏吾みたいに莫大な力を持っている者がいるつてことは、その逆もあるつてこと。全く力を持つていらない人は漏れてしまう。その魂の循環から。僕達の世界で生まれられないからね、力がないと。そしてこの世に残るしかなくなるんだ」

「それであうゆう存在になつてしまつてことなの？」

「そうだよ。魂はね、いろんな感情を避雷針のように受け取つてしまふんだ。そしてこの世界には憎しみや怒り、悲しみが大半を占めている。そしてその感情に魂が耐えられなくなり原型を留められなくなる。そして鬼といつ存在になつて魂を保つんだよ。消えないようにな」

「でも、それじゃあ悪者つて決めつけているの、おかしいんじやないですか？」

「確かに、悪者という言い方は少し違うかもしれない。感情を受け取ると言う事は、それを自分の中に貯めこむと言つ事だよ？ そんな状態で自分を保てるとは思えない。いや、保てないんだ。一人分の感情だけなら受け止められるかも知れないよ？ だけれど多くの人からその感情を受け取ればどうなるか分かるよね。」

感情の爆発。発狂。

僕だつて何回か怒つたことはあるけれども、あの時の気持ちを全部今降りかかつてきたりしたら、僕は感情をコントロールできる自信は無い。というより精神が崩壊してしまつと思つ。

「ジャジちゃん！ 鬼さんを助ける方法つていうのはないんですか？」

ジャジの顔が優しい笑顔になる。

「ルリはいつでも優しいね。怪物と呼ばれている者を助けようだ

なんて。いや、嫌味じゃないよ？」

「ジャジはルリに笑顔のまま言つ。

「ジャジ、それで助ける方法は？」

ジャジの顔から笑顔が消え、曇つた表情へと変わる。

「・・・ないよ。鬼を助ける方法なんて」

助ける方法が無い？ つまり、助けられないといつこと…？

「そんな！ 何とかならないんですか！？」

ルリの不安な顔を見ると僕まで不安になつてくる。

「僕にはどうしようも。ごめんよ、ルリ。君の力になれなくて」

ジャジの顔がさらに曇り暗くなる。

ジャジはルリの頼みを聞けなくて落ち込んでいるのか。

それでも、どうしても鬼を助けられないのかな？ 確か鬼に

なつてしまふのは魂の循環から漏れてしまつたからで。

「あのさ、ジャジ。その鬼に力を渡すことってできないの？」

「力を渡す？」

「僕がルリやジャジにやつたように力を渡して上げるんだ。それなら力を持つた状態になつて魂の循環に戻れるんじゃないの？」

「そうですね！ それなら力を手に入れた事になりますから私たちの世界に生まれることができます！」

鬼を助ける希望が生まれたからか、ルリは笑顔を取り戻す。

「ルリ、奏吾。それは不可能な事だと僕は思うよ」

「えっ！？ 不可能つて、まだ試してもいいのに」

「そうですよ、ジャジちゃん！ 試してからでも奏吾さんの考えを否定してもいいんじゃないんですか！？」

「鬼というのはもつと、君たちが思つているよりもずっと難しい存在なんだよ」

「難しい存在ですか？」

「難しい存在だって？ 一体どう難しいってジャジは言つんだ？」

「さつき一人に話した鬼の事は一部の話し。簡単に言えば、初めはそうやって鬼は誕生したということ」

初めはつてどういう事だ？

「ジャジちゃん。初めはつてことはその後は違うっていうんですか？」

「そうだよ。初めは鬼は確かに魂の循環から漏れた者、つまり人の魂が鬼となっていたんだけど、今はそれも変わってきてるんだ。確かに今も魂の循環から外れてしまう者はいるよ？ けれどね、鬼は学習するんだよ」

「学習する？ 鬼は無知だつて事なの？ 元は人の魂なのに」

「それを説明していなかつたね。魂の循環に外れてしまった者は鬼になつて魂を保つて説明はしたよね？ なぜ鬼になると魂が保てるのだと思う？ つまりはね、鬼という存在になると感情を避雷針のようにキャッチすることはなくなるんだ。そして今まで貯めた感情を消すことが出来るんだよ。一緒に人間だった時の記憶や本能などを忘れてね。そして魂はとりあえずの安定を得る事が出来る。だけどね、人間の時の知識を捨てているわけだから、自分が何者なのかも分からない。そして鬼の本能に従つてしまふんだ」

「鬼の本能ですか？」

「鬼の本能というのはね、力を求めるといつこと。力の話はしたよね？ 魂を食べると力が丸ごと手に入るって」

「それじゃあ鬼の本能つて。

「鬼の本能は力を集めること。つまりは魂を食べるといつことだよ。普通の鬼には天使や悪魔の力は使えないみたいだけど人の魂を食べることが本能！？」

「そ、そんな。なら、あの鬼さんは私たちを食べに来たんですか？」

？」

ルリの声に力がない。

「そういう事だよ、ルリ。おそらく僕の力に反応して現れたんだと思うけど」

ジャジは小さく息をはいて話を続ける。

「ちょっと遠回りをしちゃつたけど、話を戻すよ。そしてここか

らが別の鬼の生み方。鬼は人を見て学習する。感情をね。でもその感情を学習できても鬼はそれ出すことはできないんだよ。つまりは感情が貯まる。そうすると魂はまた耐えられなくなるんだよ。つまりは感情の詰め込みすぎでね。魂を保ちたいならどうする？当然感情を排除したいよね。だから鬼は感情を吐き出すんだよ。食べた魂に感情をぶち込んでね

「感情をぶち込むって、そんなことしたらその魂はどうなるの！？」

「当然鬼はその魂を自分から切り離す。そしてぶち込まれた感情のせいで魂を保てなくなり鬼になる。これが今の鬼の誕生の仕方。つまりは魂の循環に漏れることのなかつた魂すらも鬼に変えられてしまうということだよ」

「でもさ、それが僕が言つた力を渡す作戦が不可能だつて言えないよね？」

「君はまだ分からないのかい？ 食べられた魂も鬼になつてしまつて話したろう？ 食べられているということは力があつたつてこと。つまり力があつても鬼になつてしまつては魂の循環には戻れないと言つ事なんだよ」

そう言われると確かにそうなのかも知れない。力を持つている魂も鬼になる。

「なら鬼の外側だけを倒すという事はどうだ？ 魂だけは無傷で」

「そうですね。それなら魂を循環に戻せることだつて」「それが出来るならもう教えているよ」

だよね。ルリがここまで真剣に頼んでいるのにその方法を教えないなんておかしいから。でも、それなら一体どうやって魂を助ければいいんだ。

「あの、ちなみに鬼さんを倒したら魂はどうなつてしまつんですか？」

もう分かっている答えをそつと欲しくないのか、覚悟を決

めるために確認したいのか、どちらかは分からぬけれどリはジヤジに問いかける。

「もう分かつていいと思つけれど、鬼といつ存在と共に消滅してしまつよ」

「そうですか・・・」

やつぱり答えが分かつていたからか、今までの落胆の仕様とは違つて落ち着いていた。けれども落ち込んでいたようだ。ルリの顔から元気が感じられない。

「ジャジちゃん。それじゃあ鬼さんを消してしまつことしか出来ないんですか?」

「何度も言つけれどもなんだよ。僕達は彼ら鬼を消すことしかできない。そう言われているんだ」

言われている?

「ジャジ。もしかして悪魔と戦つたことないの?」

「そりやそうだよ。下の世界に来るのなんて初めてだし、そもそも純粹な鬼を間近で見るのなんて初めてなんだから」

「えつ!? そうなんですか! 私はてっきりジャジちゃんがもう鬼との戦闘をこなしていると思つていたんですけど、違うんですねか!?

「僕もてっきりそうだと思っていたんだけど」

「違うよ。それにルリは知つているだろ? 一緒に学校に通つていたじゃないか」

「あつ、そうでした。ジャジちゃんとは毎日学校に行っていたんでした!」

「学校なんであるの?」

「当然あるよ。僕達はそこで勉強を学んでいるんだ。君は学校には行つていらないのかい?」

「行つていいけど、でも君達の世界で学校があるなんて以外だと思つて」

「そなんですか? こここの世界とそんなに変わりませんよ?」

「ううなの？」

「そうだよ、奏吾。基本的な物はこの世界の物と変わらないよ。違つところと言つたら車が無いことかな」

「ジャジは車を知つていいんだ」

「上の世界ではこいつの事を多少は勉強していたからね。いや、といつより今はそんな話をしている場合じゃ無いんじゃないかな？現実逃避している場合じゃないよ？」

そんなことは分かつていて。でも、さつきから魂を助ける方法を考えているんだけど何も浮かばないんだ。鬼を倒すだけじゃ魂は助けられない。ましてや消滅してしまつ。そんなことジャジにはやつて欲しくはない。それを何としても回避したい。どうすれば。

「ジャジちゃん、やっぱり私が戦います！ ジャジちゃんに魂を消す役なんて似合いません！」

「・・・ルリ・・・ありがと♪。でも、やっぱり僕がやるよ。君こそこんな役は似合わない」

「そっ！ 僕があの鬼と対決することもできれば、一人にこんなつらい役をやれせなくとも済むの！」

「一人とも気をつけて。長々と待つてくれていた鬼が、流石にしひれを切らしたみたいだよ」

そう言われて鬼の方を見ると、その鬼はさっきまでじっとしていただけだったのに小刻みに震えだしていた。

「君の言つ武者震い、なのかな。あれもさっきのルリから学習したのかな？」

そう言つているジャジは悲しげな視線を鬼に向けてこむろよつて見えた。

「それじゃあ行つてくるよ。一人は離れていてね

ジャジは翼を広げ、飛ぶ体制をつくる。

「ジャジちゃん！ やっぱり私が！」

「ルリ、最初に言つたとおり君は戦い方をわかつてないじゃないか。そんな君が鬼と戦えるわけないだろう？ それはもう戦いじゃ

なくて犬死というんだよ。だからといって一緒に行くなんて言わないでくれよ？ それは足手まといにしかならないからね」

さつきまでのルリにしていた優しい話方とは違つて、棘のある言い方をジャジはした。

確かにジャジの言ひとおり、戦い方を知らなかつたらルリの言ひただの犬死。ルリが戦闘に絶対に参加させないためのあの棘のある言い方ということか。

「・・・分かりました。気を付けてくださいね」

ルリは全てを分かつてか、涙を浮かべつつも笑顔をつくりジャジに向ける。

「うん。二人とも気をつけて」

そしてジャジは鬼に向かつて飛び立つた。

僕はというと、ただつたつていることしかできなかつた。

そしてジャジと鬼との攻防が始まる。

ジャジは飛びながら鬼に近づきずつ、右手に黒い弾を作り出す。そして右手を鬼に伸ばしながら黒い弾を放つ。その放たれた弾は鬼の右腕に命中する。

「ぐわああああああおおおお」

鬼の雄叫びが僕の耳を貫く。

なんてすごい雄叫び何だ。鼓膜が破れそうだ。

そして鬼が苦しんでいるのか、雄叫びを挙げている隙に懐に入り込む。

「はあーっ！」

ジャジは右手に拳を作り一発、鬼の腹にお見舞いする。さらに左でもう一発打ち込む。そしてまた右、次に左と連続で打ち込む。連打。

鬼の雄叫びはいつの間にか止んでいた。ジャジに腹を殴られているせいで声が出ないんだろう。

「なんて早い攻撃なんだ。ジャジはあんなにも強かつたなんて強いとは思つていたけどあれほどとは。」

ジャジはかなりの数の拳打をし後方に下がる。そして両手を引き、両方の手にさつきと同じように黒い弾を作り出す。

「これで、終わり」

ジャジは引いていた両手を一気に前に、鬼に向かって突き出す。それと同時に二つの黒い弾は鬼に向かってものすごい速さで飛んでいく。

その二つの弾は鬼に当たると同時に、爆発でもしたかのような凄まじい音を立て、あたり一面に煙が立つ。

「お、おわったんですか・・・すごい煙がたつてあるんですけど煙のせいです」

「段々煙が晴れてきたみたいだよ。ほら、ジャジだ」
ジャジはというと、戦闘態勢を解いているのだろうか、構えは解かれでいて力を抜いているようだ。顔は下を向けている。
やつぱりジャジも鬼を倒すのは辛かつたんだね。

「・・・ジャジちゃん」

ジャジのそんな様子を見てルリは心配しているようだ。

こういう時つてジャジにどんな言葉をかけてあげればいいんだろう。仕方がなかつたんだよ？ それとも、ありがとう、助かつたよ？ それとも他の言葉？ 僕には分からぬ。どれが正解でどれが不正解なのか。今の僕にはどれも不正解にしか思えない。どんな言葉をかけたとしても、その言語はただただジャジを傷つけてしまうとしか思えない。なら、僕は一体何ができるんだ？ これからもこんな状況が続くと思う。それでジャジや、次はルリだって戦闘に参加するだろう。そして一人に傷を、二人の心に傷をつけなくちゃいけないのか？ そして僕は見ているだけ、二人が傷つく姿をただ眺めているだけ？ 僕は何もせずに一人に守られているしかできないの？

「くそつ」

そして僕はジャジを見つめる。ジャジはこっちに飛んで戻つて来ずに歩いて向かってきた。ジャジの羽を見ると羽が少し薄くなつて

きている。あの時ルリの力が消える前の現象に似ている。さっきの戦いでかなりの力を消耗したんだろ？

「ジャジちゃん！ 危ない！」

その声にジャジは後方を振り向く。そこには大きな拳がジャジの体目がけて飛んできた。

「ジャジ危ない！！」

僕が叫んだ頃には何もかもが遅かった。その大きな拳はジャジの身体を貫く。

そしてその反動で後方に飛ばされ、地面に体を打ち付ける。そして、そのあたりの煙が完全に取り払われる。

「あれば鬼！？ あそこまでやつてもだめなのか！？」

「あんな猛攻でも倒せないのか！？」

「奏吾さん、ジャジちゃんが！」

鬼は角と角の間に力を溜め込んでいるのだろう。その間に小さな弾が形成され、その弾は段々と大きくなつていつていて。トドメを刺そうとしているのか！？

「ジャジ！ くそつ、僕は名前を呼ぶことしかできないのか！」

「私が行きます！ 奏吾さん私に力を貸して下さい！」

ルリは僕の右手をつかみながら頼む。

僕は何もできない、力を渡す以外では、ルリに頼むしかジャジを助ける選択肢が無いってことは分かっている。それしかない。

「ルリ、それじゃあ頼むよ」

僕は精一杯ルリの力が渡されるように願う。

「奏吾さん、どうしたんですか！？ 早く力を、ジャジちゃんが

！」

「分かつてるよ！ 今やつていいから！」

けどなんで？ なんで力がルリに渡されないんだ？ もうルリに頼ることもできない。ジャジを助けるどこも出来ないって言うのか？ 僕が唯一できる力を渡すことすらもできないなんて。僕はなんてどうしようも無い奴なんだよ！

そして鬼の弾が角に当たりそつたほどの大さまで膨れ上がり
いる。

「もう撃つつもりか！？」

「奏吾さん！ もう時間がありあせん。早く！ お願いします、

ジャジちゃんを助けさせてください！」

「くそっ！ なんでだよ、なんでルリに力が渡されないんだよ！」
そして鬼のつくりだした弾はジャジへと放たれる。

「ジャジちゃん！」

「くそつ、がー！」

一瞬大きな光に包まれる。そしてあたり一面煙が覆う。
そして煙は段々と薄れていき、ジャジの姿を映しだす。
ジャジはぐつたりと地面に倒れており、悪魔の力は失ったんだろう。
羽が消えてしまっている。

「ジャジ・・・僕は、なんで、何も、でき・・ぐつ」

言葉が出ない。僕はジャジを見殺しにしてしまった。その現実が
受け止められない。受け止めたくない。涙をこらえきれない。

「奏吾さん。ジャジちゃんは大丈夫ですよ。安心してください」

「・・・ル、リ？ なんで、天使の姿に？」

何故かルリは天使の姿に変わっていた。

どういうことだ？ さつきは何度やつても力を渡すことができなかつたのに。

「いや、それよりジャジが大丈夫って！？」

僕は涙を拭い、ルリに問う。

「ぎりぎりで間に合いました。私の得意な天術が防御壁で良かつ
たです」

天術？ 防御壁？ 一体何の話をしているんだ？

「ジャジちゃんは無事です。力はもう戻しているみたいでけど、
最後の一撃は防げたので命に別状はないと思います」

「それは良かった！ 良くわからないけどジャジは助かったんだ
ね！」

「はい！ これも奏吾さんのおかげです！」

「僕のおかげ？ 僕は何もしていないじゃないか。それを言つたらルリのおかげだろ？」

「違います！ 奏吾さんのおかげです！ 私、今ものすごい力を自分の中に感じているんです。この力のおかげであの一撃を防ぐことが出来ました！ もし、私の本来の力だったら、私が作った防御壁は壊れていたと思います！だから奏吾さんのおかげなんです！ それに、私なら何でもできる気がするんです！ 私、行つてきます！」

「行つて来るって、あそこには…？」でも

「大丈夫です！ 私を信じてください！」

ルリは僕にとびっきりの笑顔を見せてくれる。

なんだろう。この安心感は。

「ルリ、僕をジャジの元まで連れていくてくれないか？」 ジャジをあのままにしておくわけにはいかないだろ？」

「はい！ では、行きますよ」

ルリは羽を広げジャジの方へと飛び立つ。

「ジャジ！ 大丈夫か！」

ジャジは目に見える傷は擦り傷などが多くあった。

「奏吾？ 僕は生きてるのかい？ さっきの攻撃は？ 君達は無事だったのかい？」

「僕達は無事だったから、心配しないで。それより怪我の具合は

？」

「肋を一本か三本折られただけだよ。気にしないで」

「それなら私に任せてください」

ルリはジャジに両手をかざす。するとみるみる内にさつきまでみえていた擦り傷が消えていく。

「ありがとう、ルリ。痛みが消えたよ。折れた肋も治ったみたいだ。それでもなんて早い回復力なんだい。一体君に何があつたんだい？」

「私にもよく分からんんですけど、奏吾さんからものすごい力をいただけたので」

「二人とも、その話は後にしよう。鬼の方は一度も僕達の会話を待つ気は無いみたいだよ」

「鬼はさつきもやつた技をもう一度しようとしている。

「でも、僕は戦えないみたいだ。君の左手を握っても全く力が流れてくる気配が無い」

「大丈夫です。私がいるじゃないですか」

「ルリが!? でも君は戦闘経験もないし、それに君の力では「大丈夫です。奏吾さんにいっぱい力をもらえたので。奏吾さんにもいつたんですけど、今なら何でも出来る気がするんです! それに、ジャジちゃんが戦えない今、誰が鬼さんを助けるつて言つんですか?」

「助けるつて、ルリ。僕は鬼は助けられないって言つたよね?」

「大丈夫です。見ていてください」

「ジャジ、僕はルリが嘘を付いているように見えないんだけれども、信じてみない?」

「ルリを信じなかつたことなんて一度ないよ。ルリ、任せたよ」

「はい!」

ルリは羽を広げ地面から足を離す。

「鬼さん。今助けてあげますからね」

そう言つてルリは両方の手の指を胸の前で絡ませ祈る仕草を作る。

「ルリが光つてる?」

ルリが突然光だし、そしてその光はルリを中心とした球体へと変わる。ルリの姿は微かだけど見える。

「ルリが光に包まれちゃつたんだけど、あれは何?」

「僕にも分からぬよ。ルリのあんな天術、僕は見たことがない鬼の方に目をやると、鬼はさつきよりも大きな弾を作り出していくた。

「ルリ! 気をつけて!」

僕の言葉は届いているのか分からぬけれども、届いてると信じて。

「私のこの祈り、届いてください！」

ルリを包んでいた光がルリを離れ鬼のもとへ。それと同時に鬼はルリに向けて弾を放つ。

「ルリ！」

「大丈夫ですよ」

鬼から放たれた弾はルリが創りだした光へ吸い込まれていく。そしてそのまま光は鬼を包みこむ。

「あれって、鬼の形が！？」

光に包まれた鬼はその形を変え、一つの小さな塊へと姿を変える。

「あれはもしかして」

ジャジが取り乱している。

そしてその塊はゆらゆらと上へと登つていった。

そして見えなくなると、ルリが僕達の方へと降りてきた。

「奏吾さん！ ジャジちゃん！ 私やりました！ 鬼さんを綺麗な魂に戻せました！」

「やつぱりあれは魂だつたんだね。でも一体何でそんなことが」

「どうだつていいじゃないか！ 魂を消さずに済んだんだし」

「よくないよ！ 君も鬼の攻撃がこれつきりだなんて思つてないだろ？ いつでもこの力が使えないダメじゃないか」

確かに、『もつともです。

「でもさ、とりあえず家に帰らない？ あまりここに長くすると誰かが来ちゃうだろ？ あんなにものすごい音とか立てたんだから」

「今だれもここに以内の奇跡なんだし。

「そうだね。でも、ここに人がだれも来なかつたのは奇跡でも何でもないよ」

「それってどういう事？」

「そのことも君の家で話そつか。君のお母さんにも挨拶しなくて

はいけないからね。それにルリが限界のようだし
ルリを見ると何だか眠たそうにしている。

「力の使い過ぎだと思うよ。多分もう少しすれば天使の力も消え
るだろうし、それと同時に眠ってしまうかも。僕はルリをおぶれな
いし、その前には合流しておきたいものだよ」

「大丈夫だよ。僕がいるじゃなか

「君にルリの太ももを触らせるとでも？」

「いや、別に僕はやましい気持ちなんて持つてないから！」

「関係ないよ。ルリが後から聞いたら落ち込むかも知れないだろ
う？」

「そんなこと・・・」

無いよね？ ルリ、僕は信じてもいいんだよね？

「ということで行くよ。ルリは僕が引つ張つていってあげるね
ジャジはルリの手を引いて出口へと向かう。

「待つてよ！ 僕をおいて行つてどうするんだよ！」

屋上を出る前にその屋上を見渡す。

「えつ！？ 一体どういうことだ？」

屋上での死闘がなかつたかのよう、元の遊具がある屋上へと戻
つていた。

悪魔の友達（後書き）

次の投稿はできるだけ早くしたいと思っています。
でわ

三人娘

「あつ、ジャジおはよ。随分と早いね」

リビングの扉を開けるとジャジが一人で朝食をとっていた。

「おはよう奏吾。君もこのトースト食べるかい？」

テーブルにはトーストと、湯気が立つていていかにも苦々しそうな黒色のコーヒーが置かれていた。

「あれ？ ジャジってトースター使えたつけ？」

「いや、さつき君のお母さんに作つてもらつたんだよ。トーストつて結構美味しいんだね。この飲み物も入れてもらつたんだ」

そう言つてトーストをひとかじりする。

もう母さんが起きてるなんて珍しい。

「それでその母さんはどこにいるの？ 見当たらんなんだけど」

「さつき大きな荷物を持つて出ていったけれど、君は何も聞いて無いのかい？」

大きな荷物が、多分父さんの所にでも行つたんだろう。

「母さんが出て行つたってことは、ルリはもう大丈夫なの？」

「さつき測つたら平熱になつていたし、ルリの顔色もよくなつていたから大丈夫だと思うよ。君のお母さんも安心していたよ。あれから三日も寝こんでしまつていたからね。かなり強力な力を使つたからだろうけど、こっちの世界に着いてからの疲労も溜まつていたらうし、慣れていない環境のせいもあつたんだと思うよ。こんなに長い時間寝込んでいるルリを見るのは初めてだからね」

あの戦いの後、結衣と母さんに合流したときにルリは倒れてしまつたんだよね。

「ルリが病院は嫌だとが言い出した時は大変だつたな。僕が行かないといダメだよつて言つてゐるのに、三人とも嫌なら仕方ないみたいな。行つていたらもつと早くに治つていたと思うけど」

「ルリは前から病院嫌いだったし、それにルリは天使なんだから

心配することないと思つたんだよ

「それってどういう意味なの？」

「天使はね、体のあらゆる病気や怪我の治りが早いんだよ。これは天使ならではの特性なんだ」

「天使の特性？ なんなのそれって」

「そういえばルリの件もあって色々と話せてなかつたね。その特性以外にも話させてもらつよ」

「以外つて何？ 何かあつたつけ？」

「君は僕に質問をしておいて忘れたのかい？」

ジャジはあの目を僕に向ける。

「いや、仕方ないじゃないか！ 三日も前の話なんだから」

「君はあの出来事をたつたの三日で忘れたとでも言つのかい？ それはなんて素敵な記憶力をしているんだろうと言わざるおえないんだけれど」

「そこまで言わなくともいいじゃないか。それにあの時に何があつたか位は覚えているよ」

あんなに、あんなに自分が惨めで何も出来ない存在だと思い知られた日を忘れるわけがない。

「君は何も出来ない存在だと言つ事は無いよ。君がいたからこそ鬼を魂に戻すことができた。それに僕は助けられた。だから自分を少しは褒めてあげてもいいんじゃないかな」

ジャジ、君はなんて良い奴

「さて、そんな君の話は置いておいて話を戻そうか」と思つたけど、それでもないみたいだ。

「まずは天使の特性から話そつかな。と言つても今から話することは全て特性によるものなんだけれどもね。天使の特性、まあ天使それぞれで変わつて来るから要するに特性にも種類がいくつがあると言つ事だよ。例えば傷の治りが早かつたり、大抵の病気ならすぐに完治する回復力。壊れた物などを元あつた状態に戻すことができる原状回復。この現状回復は天術と合わさつての特性になるんだけど

この説明はまた後で。他にも色々と有るんだけれども大抵はこの二つのどちらかかな」

「特性ってかなり便利なんじゃないの？」

「いや、特性と言つてはいるけれどそんなに大したものではないんだよ。例えば野球で白球が投げられるからと言つて誰もが百六十キロ以上を投げられわけでもないし、サッカーでボールが蹴られるからと言つて狙つたところへ打ち込めはしないだろう？ それと同じなんだよ。回復力の特性を持っていたとしても傷が一瞬で治るわけでもないし、病気を患つたとしてもそれが必ず治るとは限らない。原状回復を天術を使って行つたとして、それを広範囲にわたつて発動するのでききない。そういうことができるのは居るにはいるよ。でもね、百六十キロ投げられる人、ボールを狙つたところへ蹴り込める人は何人いるんだい？ 多分それを出来る人と同じくらいの人数が、私たちの特性の出来る以上に出来る人の数といふことかな」

「そこら辺の言い方は君に任せるとよ。僕の言つたことが理解できただならね」

そして「コーヒーを一口。

「それにしてもこの飲み物、なんでこんなに苦いんだい？」

「砂糖でも取つてくるよ」

僕はキッチンに入つて、食器棚に置かれているコップ、砂糖の入った小瓶を取り出す。ついでにトースターに六枚切りを二つほどセットする。

「ジャジ、牛乳もいる？」

「それを入れたほうが美味しくなるなら頼もうかな」

「美味しくなるかは人それぞれだけども、今より甘くはなるよ」

僕は冷蔵庫を開けて牛乳を取り出す。

僕は牛乳でいいか。

「コーヒーに牛乳いれるなら砂糖はいらなかつたかな？」

テーブルに戻つてジャジに牛乳と砂糖を渡す。

「僕はよく分からぬから君に任せよ」

「ん、分かつたよ。とりあえず牛乳いれるから、それでも苦かつたら砂糖を入れるといいよ」

僕は牛乳しかいたことないけど。

僕はコーヒーの入ったカップに溢れない程度牛乳を注ぐ。そしてジャジが一口。

「・・・砂糖入れようかな」

そう言つてビンの蓋をあけカップに向かつて傾ける。

「あつジャジ・・・」

一体スプーン何杯分入ったんだろう。

「これはかき混ぜたほうがいいんだよね」

カップにスプーンを突っ込みかき回す。

かき混ぜるだけでゴリゴリと聞こえる。それにかき回すときのスピード感が感じられない。相当重そう。そしてカップを口に近づけドロドロになつているだろう液体を一口。

「少し甘いけど、なかなか美味しいよ」

「・・・そうですか」

ジャジは以外に甘党だと言つ事か。

「何か言つたかい?」

「いや何も。それよりさ、ルリの特性つて何なの?」

ジャジの最初の言い方から察するに回復能力かな?

「そうだね。しかもかなりのものだよ。だから今回のよつな場合は初めて何だ。天使の力が使えなくとも特性、回復力は残つていてると思つていたんだけど天使の力が無いせいかな」

そしてコーヒーを一口。なんとなくカップの中に視線を落とす。白いカップの中の黒かつたコーヒーが白に変わつている。

なんだか口の中が甘くなつてきた。

「ジャジにも特性つてあるの? 悪魔の特性つてことになると思うんだけど」

「僕の特性は、簡単に言つてしまえば人を寄せ付けなくする事か

な。君も不思議に思つてただろう？ あんな戦いがあつたのに誰も屋上に来ないなんて。この特性にも条件が有るんだけれどもね」

あれはジャジの特性のおかげだつたってことか。

「そりゃ戦闘で壊された物が直つていたんだけど、あれもジャジが？」

「違うよ。あれはルリがやつたんだ。さつきも言つただろう？ 現場回帰の特性だよ。ルリは鬼を元の魂だけの存在に戻したときに直していたんだよ」

「特性？ 一人に一つじゃないの？」

「万能といえば分かるかな？ 何でも出来る人。それがルリだけ話なだけだよ」

「なら他の特性も使えるって事なの？」

「そういう事。さて、もうこの話は終わりにしようか。僕が言ったかった事は全部言つたことだし。あまり話を伸ばしても全く覚えていてもらえなかつたら話損だからね。僕としては、それは腹立たしいことだから」

「覚えてるよ！ 忘れたことなんて一度も無いから！」

「逆に忘れてもらつたら困るんだけどもね。忘れないように要約してまで話したんだから。それにそんな大きな声を出さなくとも聞こえるよ。今は朝なんだから迷惑になるだろ？ そういう事も考えたほうがいいんじゃないかな」

「・・・ごめんなさい」

特性についての話をしていただけなのに、なんで僕は説教されてしまつてるんだ？

「話を終わるまでに最後に一つ聞いていいかな？」

「なんだい？ もう君が聞きたいことはないと思つていたんだけど」

「いや、天術だつたつけ？ それについて何も説明を受けてないんだけど」

「ああ、そのこと。天術というのは天力を使う技の事。防御壁を

君は見たんだろう？ あれが天術。僕の傷を癒すのも見ただろう？

あれも天術。これで分かつたな？ 君なら話さなくとも分かつて

くれているとは思っていたけど、ちょっと買いかぶりすぎたかな

「確認しただけだから！ 分かつてたから！」

「君は学習をしないのかい？ そんな大声をだしたらルリ達が起きてしまつじやないか」

「・・・」めんなさい

本日一回皿の謝罪。ジャジには謝る機会が多い気がする。

「さつきから焦げ臭い匂いがするんだけれど、君はトースターを使っていたんじゃないなかつたつけ？」

「しまった！」

僕は慌ててキッチンのトースターに向かう。

「焦げてる。というかこのトースター飛び出すタイプなのに

故障か？ バネでも緩んでいたのかな。

「そういえば、君のお母さんがそのダイヤルを回していくみたいだけど」

・・・母さん。

僕は焦げたトーストをとりあえず皿に移す。

「それは食べられるのかい？」

僕が焦げた物を載せた皿をテーブルに置いたときにジャジは言つ。

「食べれないことはないよ。ただ、少し苦いかな」

「なら砂糖をかけるといい。とても美味しくなるよ。かけてあげようか？」

「遠慮しておくよ

とんでもない量をかけられてしまいそうだし。とりあえず砂糖をかける前に一かじり。やっぱり苦い。砂糖をかけるのもいいだろけど、これはバターをつけて食べるというのもいいかも。

僕はもう一度キッチンに向い、冷蔵庫からバターを取り出す。

「おはよう」ゼココます！

「おはよー」

ルリと結衣がリビングに入ってきた。

「ルリ、結衣おはよー」

「おはよう」

僕とジャジが朝の挨拶を返す。

「そうくん。今日起きるの早いんだね」

「あ、うん。今日は何だか早くに目が覚めちゃって」

「ジャルちゃんも早起きさん何だね」

「結衣、そのジャジの呼び方やめない？ 何だかどこかの飛行機

会社の名前と被るんだけど」

「そうかな？ とても可愛く思うんだけどな。ジャルちゃんたつて別にいいよね？ 可愛いよね？」

「僕は別に構わないよ。親しい仲になるには肝心だからね。それに結衣の言うとおり可愛いから気に入ってるくらいだよ」

「そうですね。私もとても可愛いと思います！ 私もジャルちゃんつて呼ぼうかな」

「ならいいんだけど」

でも僕はこれからもジャジと呼ばせてもらつけど。

「二人もトースト食べる？」

僕がジャジの正面に座っていたので結衣はジャジの隣、ルリはその結衣の前の席に座る。

「私は食べる~。ルリちゃんはどうする？」

「トーストつてこの黒い食べ物の事ですか？」

「それは違うよ。こっちの方がトースト。それは奏吾が調理に失敗しただけだよ」

別に僕のせいで失敗したんじゃないんだけど。

「それなら美味しそうですね。奏吾さん私も頂きます！」

それならつて・・・まあ黒焦げのパンが美味しいように見えるわけないけど。

「ルリ、もう熱が引いたみたいでよかつたね。体が痛かったりしない？ 頭痛とかはない？」

「もうバツチリ大丈夫です！ 奈留さん、結衣ちゃん、ジャジちゃん。ご迷惑をおかけしまして申し訳ありませんでした！」

ルリは深々と頭を下げる。

「違うよルリちゃん。ここは謝ると「いやなくて感謝する」というだよ。誰の迷惑にもなつてないじゃない」

ルリは僕達を見渡す。

ジャジはコクリと一つ頷き、僕はにこりと笑った。

「・・・あ、ありがとうございました」

少し恥ずかしがっているのか、いつもの元気な声ではなく、少し消え入りそうな声。

「それでいいんだよ。でも本当に元気になつて良かつたね。倒れたときはどうしようかと思つちやつたよ。無理しちゃダメだよ～。これからは倒れる前にしんどくなつたら言つてよね」

「はい、そうします」

「ルリちゃん顔真っ赤になつてるよ」

「えっ、あっ、すいません！」

「だから謝るところじゃないって」

ルリも元気になつているようで何よりだ。

僕はトーストをセットして、ダイヤルを今度は焦げないように調節する。

「二人とも何飲む？ といつても今は「コーヒーか牛乳しかないんだけど」

「なら私は牛乳！ ルリちゃんは？」

「あの、「コーヒーってジャジちゃんが飲んでいるそれですか？」

「そうだよ。一口飲んでみる？」

「えっと、遠慮しておきますね。私も牛乳もりいます！」

ルリがタジタジになつてゐる。あの白い物飲みたいとは思わないよね。

「とっても美味しいのにな」

そんなジャジの声が僕の耳にはいる。

ジャジ、君はどんなに甘党なんだ・・・

僕はコップを一つもつて三人が居るテーブルに戻る。

「あのさあのさ、三人とも聞いて！ ルリちゃんも元気になつたことだし、今日は夏祭りに行こつか」

「行こつか　じゃないよ！ ルリだつて病み上がりなんだし、今日は家でおとなしくしておく方がいいよ！」

「どうしたの？ そうくん。夏祭り行くのが嫌なの？」

「べ、別に嫌つてわけじゃないよ？」

「ならいいでしょ？ それにルリちゃんもジャルちゃんも行きたいよね？ 夏祭り行くよね？」

「夏祭りですか？ それって学校の行事か何かなんですか？」

「夏祭り知らない？ 夏にある風物詩的催しなんだけど、ジャジは知ってるよね？」

「そうだね、私は知ってるよ。でも僕も書物でしか読んだことしかないから。僕達上の世界では春夏秋冬がないからね。それと君が言つ夏祭りと僕が読んだ夏祭りとは違うみたいだ。夏祭りつて病気や厄災をはらう為の儀式的なものだと書いてあつたんだけど、どっちが本当なんだい？」

「僕に言われても、お祭りとしか分からぬな。でもジャジの言う儀式なんて見たことはないけど

「どちらも合つてると思うよ」

結衣が一人の顔を交互に見る。

「えっとね、夏祭りとは夏季に行われる神社のお祭りなんだ。これはそろくんが言つてることと同じこと。それでこの夏祭りはジャルちゃんが言う儀式、とはちよつと違つんだけど病気や災厄とかをはらう祈願から発生したものなんだって。一人とも納得した？」

「納得したよ。結衣ちゃんは物知りなんだね

・・・以外だ。結衣がこんなに難しいことをペラペラと話せるなんて。

「結衣、一体そんな事どこで覚えたの？」

「わざわざ辞書で調べたんだ。今日は夏祭りに行こうと思つてい
たからね」

いや、普通行こうと思つたところの名前なんて辞書で調べたりし
ないよ。

「あの、すいません。結局何をするとこりか分からなかつたんで
すけど」

「簡単に言つと楽しいところだよ」

「楽しいところですか、なら私も行きたいです！」

「ジヤルちゃんは？ 夏祭りどうする？」

「僕も行きたいな。どんな夏祭りであれ一度は行ってみたいとは
思つていたからね」

「よし決まりだね そうくん、そういう事だから」

「そういう事だから じゃないよー 一人が行くつ言つても僕
はやめておいたほうがいいと思つ。もしルリが夏祭りで倒れたりし
たら大変だろ？」「
僕的にはなんとしても今日は夏祭りに行きたくない。とういより
あいつにこの状況を知られたくない。知られでもしたらなんて言わ
れるか。いや、何をされるか分からぬ。

「あいつって誰の事だい？」

「あいつって亮介に決まってるじゃないか。こんな状況、女の子
三人と暮らしているなんて知れたら・・・えつ？」

「そうくん。もしかしてそれが夏祭りに行きたくない理由なんて
言わないよね？」

しまつたあああ！ なんで僕はこんなことを口走つてしまつたん
だ！？

「そ、そんなことないに決まってるじゃないか！ 僕はルリのこ
とが心配で、そりや確かにちょっとは亮介のこととかで心配したり
もごめんなさあああああああああああああああああああああああ
をこつちに向けないで！ お願ひだから！ つてどっからそんな物
だしたの！？」

結衣が僕にイビツな形の物を僕に向けている。先端が尖っているから身体に突き立てられることは容易に想像できる。

怖い！ 逃げたい！ 恐ろしい！

「ジヤルちゃんに借りちゃった」

「そんな危険な物を向けられながらにつこりとされても困るから！ 僕が対処に困るから！ なんでこんな物貸しちゃってるの！？ というかジヤジはなんでこんな物を持つてるの！？」

結衣と並んでにつこりとされても！

「それでそうくん。夏祭りには行くよね？」

「ぐつ、ええとえつと

「そ・う・く・ん」

いやいやいやいや、その口調は僕に恐怖しか植えつけられないよ！？ 結衣はいつたい僕をどうしたいと言うわけ？ この状況を打破出来る策は、ここにはキッチンに逃げこむしか。よし

「ちよ、ちょっとトースト取つてくるよ。焦げたら大変だからね」

「ああ、トーストなら僕が今さつき取つてきたよ。使い方は君のお母さんのを見ていたからね」

ジヤジは何やつてくれるんだ！？ 僕の逃げ道が

「で、どうするの？ 行くの？ それとも逝くの？」

あれ？ おかしいな。両方行くに聞こえたんだけど、なんでだろう。僕の選択肢が生きるか死ぬかと聞かれている気がする。

「・・・わかつたよ。だから物騒な物をこっちに向けないでくれない？」

もう観念するしか無いということですね。はい、実際最初から行くしか無いとは分かっていました。やっぱり結衣には押し切られてしまうな。

僕達四人はそのまま雑談をしながら朝食を済まして各自が支度を始める。

「ジヤジ、ちょっといいかな？」

僕は二階に上がるとしているジヤジを呼び止める。

「なんだい？ さつきの武器のことなら大丈夫。結衣ちゃんにはちゃんと返してもらつたから」

「いやそれも聞きたかった事なんだけど、本当にルリは大丈夫なの？ ルリの事を大切に思つているジャジだから変だなと思つて、それにあの場面はジャジの応援もあつて抜けられると思つてもいたし。

「ああ、その事。特性の事は君に話しただろ？ だから今は完全に回復していると思うよ。それにもしもの時は君がいるだろ？」

「僕が？ もしもの時つて僕に何が出来るつていうの？」

「簡単な事だよ。君の天力をルリに渡すだけでいいんだ」

「それだけ？」

「それだけ。結衣の特性、今弱まっているのはわかるよね。それは天力が作れない状況。つまり天使に限りなく遠ざかっているということ。だから君が力をルリに渡してくれさえすれば天使に、完璧な天使になれるということだよ。そうすれば特性の効果が強く出るということ。だから夏祭りに行つて大丈夫だよ。ルリが行きたいなら僕はできるだけ行かせてあげたいからね」

「ジャジつてルリには優しいよね。それぐらい僕に優しくしてくれてもいいじゃないか」

「何を言つてるんだい？ 僕は結衣ちゃんにも優しくしていろよ。それに君に優しくしても付け上がるだけだからね」

「いや、付け上がるつて。

「それじゃあ僕は行つていいかな？ 結衣ちゃんに呼ばれているんだよ」

「うん。聞きたいことも聞けたし、ごめんね。引き止めちゃつて」

「別にいいさ。ルリを心配してくれているのが本當だと分かつて僕はほつとしているからね」

「ほつとしているつてなんで？」

「それは、君がただ夏祭りに行きたくないからと行つてルリをだしに使つただけなら、僕は手を出すしかなかつたからね」

ジャジは僕にあの顔、僕に恐怖という感情しか抱かせないあの笑顔をむけ、そして二階へと上がっていく。

ジャジは僕に恐怖を植えつけて何が楽しいんだろう。

「今日の夏祭りは一波乱起きそうだな」

そして僕も自分の部屋に向かつため、二階へと続く階段を登った。そして正午、昼食の時間。

僕達は朝と同じ席で昼食を取ることに。ちなみに昼食を用意したのは僕。

「三人共一体何してたの？」

朝食をとつてから三人は母さんの部屋でずっと何かをしていたみたいだけど。

「えっとね、それは浴衣だよ、浴衣。夏祭りといえばやっぱり浴衣を着ていかないと。一人に合つサイズと柄を探していくと時間がかかるっちゃった」

「とつても可愛いのをえらんで頂きました！ 着るのがとつても楽しみです！」

「そうだね。ルリはかなりの可愛い物を選んでもらつていたからね。奏吾に見せるのが勿体無い気がするよ」

ちょ、勿体無いつて。

「でもさ、良く一人に会うサイズの物があつたね。それに種類だつてそんなになかったんじゃない？」

「それなら心配ないよ。奈々さんから浴衣コレクションを貸してもらつたからね、種類だつていっぱいあるから悩んじゃつたよ」

僕は別に心配はしてないけど。

「いや、というか浴衣コレクションって何!? それって一体どこに隠してあつたの!？」

母さん達がいない時は僕が掃除をしているからそんなコレクションと呼べる程の量を見かけたことはないけど。

「それは分からなないな。昨日奈々さんから借りただけだから。でもそろくんには内緒つて言ってたかも」

じゃあ僕に言うのはまずいんじゃないの？

「それじゃあ浴衣に着替えたやおつか。ジアルちゃん、ルリちゃん行こ」「

「いや、結衣。今から着替えるのは少し早くない？ 夏祭りは夕方からなんだし、それに浴衣って着慣れていないと落ち着かないと思つんだけど」

「そんなことないよ。女の子の支度には時間が掛かるものなんだから。今日は遅刻するわけにはいかないからね」

確かに結衣の支度はとっても遅い。それは僕が身を持つて分かつてゐる事か。

「でも待ち合わせまで四時間もあるよ？ いくらなんでもそんなには」

「私一人で三人分するんだから当然時間が掛かるよー。一人とも化粧もしたことないって言うから私がするしか無いんだから」「別に化粧なんてしなくても」

「何言つてるの！ 一人とも元がこんなに可愛いんだから化粧をすればどう化けるか。腕がなるわー」

化けるつて、そんな表現の仕方でいいのか？

「とにかく今から支度するんだから、そうくんは自分の部屋でおとなしくしてね」

「はいはい、了解しました」

「あと、食器の片付けとかもよろしく」

「それも了解」

「時間になつたらリビングに集合だから。それじゃあ一人共行こ

」

「はい！ よろしくお願ひしますー。」

「お願ひするよ」

ルリとジャジは結衣の後に連れてリビングを出ていった。

「それじゃあ僕も始めますか」

僕はテーブルの空の食器を集めてキッチンへと向かった。三十分

程で食器を綺麗に洗い終わった。

それでもまだ3時間以上の時間が有るのか。なら掃除でもしようかな。でもこの前母さんのおかげで大掃除もしたことだし、掃除だけじゃあ時間が潰せない。

「あつ、夏休みの宿題が！」

宿題、確か今年はかなりの量を出されていたんだっけ。やつておかないと後で結衣が写に来るだらうじ、なら掃除は置いておいて頑張ろう。

あれから3時間程宿題をして時計を見ると時刻は午後四時。待ち合わせ時間は午後五時だから後一時間は余裕があるんだけど、結衣達は準備ができたんだろうか？ とりあえずリビングに向かう為宿題の問題集の山を綺麗に積み直し、その横に今日やつた分の問題集を積む。携帯電話といつもより少し分厚くなっている財布をポケットに突っ込みリビングへと向かう。

「そうくん遅い！ 私たちなんてとつぐの昔に準備が済んじゃつてるんだから、女の子を待たすなんてあつてはならないことだよ！ そこのところ分かつてるよね？ 分かつてるんだつたら今日はりんご飴をいっぱい買つてもらひつんだから覚悟しておいてよね！」

「え、ああつ」

僕は上の空だった。

「そうくんどうしたの？ 私たちに見どれちゃつた？」

全くその通りだ。この前の花火大会とは違つて紫を基調としたおとなしめ、だけども大人の雰囲気を醸し出していてすごく色っぽい。結衣のイメージが変わってしまいそうだ。ルリはピンク色の浴衣で牡丹の花が散りばめられている。ルリのイメージにぴったりだ。最後にジャジ。

「ジャジ、その格好は・・・ワンピース？ 浴衣じゃないの？」

「そうなんだよそうくん。ジャジちゃん一回は浴衣を着てくれたんだけど、動きにくいからって脱いじゃつたんだよ。何回言つても着てくれないから、せめてワンピースで夏だけでも感じてもらおう

と思つて

いや、ワンピースだからって言つて夏を感じられる訳無いと思つけど。

「ジャジ。なんで浴衣を着るやめちゃったの？ 結構乗り気で見えたんだけど」

「奏吾。僕がいつたい何をしに着たのか忘れた訳じゃないよね？ 君を守るためにも、何があつてもすぐに対処できるように動き易い服装が着たから浴衣はちょっととて言つ事だよ。だから僕はこの服装をとっても気に入っているんだ」

ジャジの服装は白のワンピース。ルリが僕とあつた時に着ていた服と同じ白色。

「このワンピースかわいいでしょ？ イメージは天使。ルリちゃんをイメージしてみました！」

いや、まんまじゃん。

「結衣ありがとうございます。僕はこの服、とても気に入ってるよ」

「どういたしまして」

ジャジは浴衣で無いにしろ、かなり似合つてゐるのは言つまでもない。

「それじゃあ行くよ」

「なんでそうくんが仕切つてるのよーーー一番遅くに出てきたくせにー。それにまだ一時間ほどあるんだよ？ 出るの速くなーい？」

「でも神社まで歩いて三十分くらいあるだろう？ だからうつうつといじやないか」

「それもそうだね。それじゃ、行こつか」

「はい！ なんだか緊張してきました」

「夏祭りで緊張なんてすること無いよ。夏祭りはただ楽しめばいいんだが

「結衣ちゃんの言う通りだよ、ルリ。せっかくのことなんだから楽しまないと損だよ」

三人で仲良く話ながら玄関へと向かつ。僕もリビングの明かりを

消してから玄関へと向かう。

「そうだ！二人にこれ、渡すの忘れてたから。ルリちゃん、ジヤジちゃん。奈々さんからだよ～」

結衣は一人に巾着袋を渡す。

「中には奈々さんからのお小遣いと、女の子に必須のアイテムが入ってるから落とさないように気をつけてね」

「はい！大事に持つておきます！」

「僕も落とさないように気をつけるよ」

いや、結衣は浴衣を着ているから違和感がないとして、ジャジ。ワンピースに巾着は似合わないと思うけど。

「うん。一人共いいよ！ ワンピースにも巾着つて結構合つから不思議だよね～」

・・・僕には女の子のセンスが分からないや。

「あの、結衣ちゃんの分のこれはないんですか？」

ルリは結衣の目線の高さに巾着を持ってくる。

「大丈夫！ 私の分もしつかり有るよ！ ほりこのとおり」

そう言って今度は結衣がルリの目線の高さまで巾着を持ってくる。

「あのさ、僕の分はあつたりしないの？」

「どうしたの？ そうくん。そうくんも巾着袋ほしいの？」

「そうじやなくて、母さんから僕に渡す物は無いの？」

「特にもらつてないよ？」

「そ、そ、う。分かつた」

なんで僕には何もないんだ！？ お小遣い少しは恵んでくれてもいいのに。僕の財布事情も少しは察して欲しいよ。

「そういえば、奈々さんからの伝言があつたんだった」
伝言？ 母さんからつて一体何の？

「甲斐性なしは持てないぞ だつて」

嫌がらせかあああ！ 絶対分かつてたよね！？ 僕の財布事情、絶対把握してたよね！？

「奏吾、一体どうしたんだい？ 顔が引き攣つっているみたいだけ

「ど

「・・・気にしないで」

まあ三人には渡っているんだから、今日僕がお金を出す必要もないか。

「渡す物も渡したし、出発するよ」

「はいはい」

僕達四人は玄関を出て少し曇った空の中、夏祭りの有る神社へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0641t/>

天使で悪魔

2011年10月31日17時05分発行